

---

# GAME -aya-

転寝猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GAME - aya -

### 【Nコード】

N0518J

### 【作者名】

転寝猫

### 【あらすじ】

これは、交錯し作用しあう3つの物語…

不知火文は、中高一貫の高校に通う学校一の優等生。

女子高生らしいことといえば、携帯中毒なことでアイドルのファンなことくらい、なんて妹のすずにはよく言われるけど。

『良い子』でいなきゃ。

それは小さい頃からずっと思い続けてきたことで…

そんな彼女の身に起こる、一週間の奇跡とは？

当作品は、同じ世界を舞台とする3つの独立したお話になっております。(ちなみに設定もエンディングも同一です)  
日付順に全てのお話を追っていくもよし、個別のキャラクターのみ最後まで追っかけて他のキャラは後で一気に読みするもよし、  
楽しみ方は貴方次第！

## Prologue

鐘の音が聞こえる。

遠くのお寺の…鐘の音。

もうじき日が暮れる。

もう、帰らなきゃ。

文はいい子だね。

パパはいつも、笑って頭を撫でてくれた。

文はお姉ちゃんだから。

いい子でいなきゃいけないの。

帰っちゃうの？

その子は悲しい目で聞いた。

もう少しだけ…一緒にいようよ。

ごめんね。

そう言っただけ私は立ち上がる。

私はお姉ちゃんだもの。

母さんの手伝いもしなくちゃいけないし、妹の世話もしなくちゃいけない。

日が暮れたら、父さんもうちに帰ってくる。

いい子でいなきゃ。

でも……

いい子でいたら、本当に幸せになれるのかな？

いい子でいて、本当に幸せになれた？

あなたは……

少年は私の名を呼ぶ。

とてもとても…愛おしそうに。

聞いたことの無い名前。

私の名前は文なのに。

でもとても…懐かしい名前。

あなたは誰？

それに……………

私は……………

12月19日

『やっと会えたね』

耳に響く、懐かしい優しい声。

誰だろう？

どきっとして顔を上げる。

夕日に染まった図書館では、私のような学生やお年寄りが静かに本を開いていた。

ズレたメガネを直しながら、小さく舌を出す。

「やつば…寝ちゃった」

週明けのテストの勉強、まだ全然出来てないのに…

昨夜はラジオに聴きいってしまい、寝たのが3時だったのだ。

録音してあるし、途中で寝ようと思ってたのに……… ついつい。時計を見ると、針は6時を回っている。

広げてあったテキストとノートをまとめて、帰り支度を始める。

と、その時。

ノートの端っこに張ってある付箋紙に気づく。

ボールペンの綺麗な字で書かれているのは、どうやら携帯の電話番号とメールアドレス。

私が寝てる間に、誰かが張っていったのだろうか？

まさか………ナンパ？

…いや、多分いたずらだろう。ナンパされた経験なんて、何を隠そう一度もないのだから。

花も恥らう女子高生、ちょっと悲しい気がしないでもない。

とりあえずそのままノートを閉じ、かばんにしまって立ち上がった。

家に帰ると、母は仕事帰りのスーツ姿のまま、台所に向かっていた。

「お帰り！文」

「ただいま…ごめんね、今手伝うから」

鞆を置いてエプロンを取ろうとする私を制して、母はにっこり笑う。  
「いいわよ、テストがあるんでしょ？気にせずあなたは勉強しなさい」

「でも…」  
「いいの！あなたがテストで一番になってくれると、ママは嬉しいんだから」  
そう言われてしまうと…弱い。

「すずは部屋？」  
「今日はまだよー。ゲームの発売日だとか言ってたから、お店寄ってくるんじゃない？」

…あはは。

我が妹すずは、自他共に認めるゲームオタクなのである。  
学校のある日はまだいい。

休みの日なんか一日中家に閉じこもって、部屋でゲームに向かって  
いる。

長期の休みなんて、このまま引き籠もりになっちゃったらどうしよう…と心配になるくらいの熱中ぶりだ。

「あの子もねえ…文くらい勉強しろとは言わないけど、ちょっとは中学生らしいことしたらいいのに…」  
ため息をつく母に、意を決して言う。

「私…言ってみようか？」

「…言っても聞かないでしょ？あの子」

「でも…私、そういうのいつもママにお願いしちゃってたし…もし  
かしたら、ちゃんと言えば聞くかもしれないでしょ？」

ありがとう、と笑って、母は小さくため息をつく。

「…文はいい子ねえ。あなたがそんない子に育ってくれて、ママ  
本当に助かってるわ」

少し寂しそうな色が瞳に浮かぶ。

「パパが亡くなった時ね…あなた達二人抱えて、ママどうしたらいい  
のかしらって途方にくれちゃったのよ。悲しくて、寂しくて、心

細くて…」

…あら。

ママだったら…感傷スイッチが入っちゃったみたい。

「仕事も忙しくなって、あなた達と一緒にいて上げられる時間も少なくなっちゃったし。でも…あなたは寂しいの我慢して、お手伝いもしてくれて、ずすの面倒も看てくれて…」

「だって…私、お姉ちゃんだもの」

「お姉ちゃんのお陰で、ママはお仕事もおうちのこととも頑張ろうって思えるのよ。ありがとね、文…」

じーんと胸が熱くなってきた、思わず涙ぐんでしまいそうになる。

「あ…私、勉強あるから部屋戻るね！」

慌ててそう言つと、私は二階への階段を足早に登った。

「……………ふう」

シャープペンシルを机に置いて、うーん…と思いつきり背伸びをする。

駄目だ…全然分かんない。

壁に貼つてある、大判のポスターを見つめる。

「積分がねえ…ちよつと捻るともう、全つ然駄目なんだよねえ…」

ポスターの中のKEI君は、にっこり微笑んで私を見ている。

「だいたい、高3のこの時期にテストなんて、どうかと思わない？」  
当然ながら、KEI君は何も答えてはくれない。

でも、その笑顔にちよつと癒されて、もう一度問題に向かう気持ちになれた。

そういえば。

『街はすっかりクリスマスモードだけど、ラジオ聴いてる皆の中には受験を控えた学生さんも沢山いるんじゃないかな？』

KEI君…昨日のラジオでそんなこと言ってたっけ。

『絶対夢は叶うから、諦めないで頑張つてね。僕も、いつも君の傍で応援してるよー！』



なあってね、と照れたように笑う彼の声……………  
思わず顔がにやけてしまい…恥ずかしくて顔が熱くなる。  
高3でこれは…そりゃイタイって言われても仕方ないかも？  
でも…いいじゃない、それがモチベーションになるんなら。  
思いなおして大きく首を振り、シャープペンシルを握る。  
と。

トントンと階段を登る足音が聞こえる。

……………すずだ。

どうしよう。

でも…ママと約束したし…

私は…お姉ちゃんなんだから。

私は思い切ってドアを開け、おかえり、と彼女に笑いかけた。

ちよつと挑むような気持ちで言ってみる。

「またゲーム？」

「そうだけど…何か文句ある？」

強気な妹の言葉に少し戸惑う。

でも…ここは姉らしく威厳を見せなくては。

余裕をアピールしようと、取りあえず…かけていたメガネを外して  
みる。

「ママ嘆いてたわよ？すずのゲームオタクっぷりには困ったもんだ  
って」

またその話？という顔をして、彼女は視線を床に落とす。

「そりゃ…私はお姉ちゃんみたいに成績良くないけどさ…」

「別にママもね、すずに勉強して欲しいって言ってるわけじゃない  
のよ？もうちよつと普通の中学生らしく、洋服とか音楽とか…そう  
いうのに興味持ってくれたらいいの…」

「そんなこと言ったらさあ」

私の言葉を遮るように、すずは仁王立ちで私を指差す。

「お姉ちゃんだって普通の高校生みたいじゃないじゃない！？ずっ

と図書館とうちで勉強ばつかしててさあ、クリスマスも来るっていうのに彼氏の一人もいなくてさあ……」

彼氏の一人も……  
気にしてるのに。

ちよつと弱気になりながら反論を試みる。

「でも、私は休みの日友達と出かけたとか……するじゃない?」

「たまーにね!ごくたまーに!でもそれ以外はずーっと家にいるじゃない?」

「だって休みの日は……家事とかもあるでしょ?」

う……と言葉に詰まるはず。

同時に、しまった……と私も思う。

家事の手伝いは私が勝手にやってることで、お母さんも別にやってほしいなんて言ってるわけじゃない。だからすずには強制しないようにしよう……と常々思っているのだが……

しばらく黙り込んだ後、話をリセットするように、彼女は大きく一つ深呼吸をする。

「お姉ちゃんさあ……私のことゲームオタクだったじゃない?」

「……認めるでしょ?」

そうだけども……と不満そうにつぶやいて、すずはじつと私を睨む。

「お姉ちゃんだってアイドルオタクじゃない?何なのよあのポスター、高校生にもなってあんなもんデカデカと貼ってさあ、ちよつとやり過ぎなんじゃないの?」

「……え?」

ティーン向けの雑誌でモデルデビューしたKEIくんは、私より3つくらい年上で、若者からおばさままで幅広い人気を誇っている。あまりそういうのに興味なかった私がハマるくらいだから、相当な人気者であると言って間違いない。

最近はドラマやバラエティーやCMにも出演していて、テレビで彼を見ない日はない。

でも……特にお気に入りなのは、あの深夜ラジオ。

収録されたテレビでは見られない、時々覗く彼の素顔がたまらない  
…なんて。

男に興味なんてない！と断言しているすずには、きつと馬鹿にされ  
てしまうだろう。

「でも…オタクっていうほどじゃないでしょ？追っかけやってるわ  
けじゃないし、それに……………」

「ドラマ録画して何回も観てるでしょー！？ゲーム何回もやる私と  
おんなじじゃん！」

「…そうなんだけど……………」

逃げ出したい気持ちになったところで、すずがガチャ！と自分の部  
屋のドアを開けた。

「もう、いいでしょ！？ほつといてよもう！」

ボタン、という苛立った音を残して、閉まるドア。

ちよつとほつとしてしまう自分が…ちよつとだけ情けない。

「すず…」

「何！！？？」

「もうごはんだから…あんまり熱中しちゃだめだよ？」

食事中も、すずはむつつりご機嫌斜めだった。

多分私のせいかな…と思うと、話しかけるのも躊躇われる。

遠慮がちに、ママが口を開く。

「あらあ…あなた達、珍しいわねえ…喧嘩でもしたの？」

別に、とぶつきらぼくに答えて、すずは大きく切ったハンバーグを  
頬張る。

「せっかく、今日はすずちゃんの好きなハンバーグでしょ？機嫌直  
しなさいよお…」

「別に…機嫌悪くなんかないもん」

どうやら、虫の居所が悪いのは、私の所為だけじゃないみたいだ。

「ゲームが糞でさあ…」

「こらっ、女の子がそついう言い方しないの」

「……………だつてえ」

その時。

『KEIさん、クリスマスのご予定は？』

瞬間、テレビに吸い寄せられる。

そうですねえ、と首を傾げるKEIくんの顔は、信じられないくらいチャーミングだ。

呆れた顔ですが言う。

「…出たよ、アイドルオタク文」

「だから…違つてば」

赤くなつて反論しつつも、テレビからは目が離せない。

涼しい目で、彼はじっと私を（…ではなくて、カメラを正面から）見つめた。

『特に予定はないんですよ、残念ながら』

本当ですかあ！？と騒ぐインタビューの言葉に、彼は微笑んで答える。

『でも、まだ一週間ありますからね。一週間で僕、運命の人にめぐり会えたらなあって思うんです…それで、クリスマスはその人と…二人きりで過ごせたらなあって』

ほう、と感心した様子でママがため息をつく。

「うつまい事言つわねえ、あの子…」

アイドルだもん、と呆れ顔で言い、またハンバーグを口に運ぶすず。

「一週間で、ねえ…一体どんなかわい子ちゃんとめぐり会うつもりなのやら」

一週間…か。

来週は冬期講習が始まるから、ずっと学校に缶詰だもんなあ。めぐり会える可能性など…限りなくゼロに等しい。

思わずついたため息を、すずが見逃す筈もなかった。

「お姉ちゃん、まさかシヨック受けてんの！？あんな芸能人に本気で恋なんてしても、叶うわけないでしょ！常識的に考えて」

「……………うるさいなあ。そんなんじゃないわよ」

もう、とママは困り顔で笑う。

「文ちゃんもせっかく可愛いのに、そのメガネがねえ……」

「そうそう！コンタクトにしたらいいのに」

「……………怖いからヤダ」

何だそりゃ、と鬼の首でも取ったようにさすが笑う。

「医学部行ってお医者さんになるうつつて人がさあ……怖いからとか何なの？一歩踏み出したら、お姉ちゃん、世界が変わるかもしれないよ？」

「今度、一緒に眼科行ってみましょうか！？」

コンタクトレンズ愛用者のママが、嬉しそうに尋ねる。

うーん……………

「…考えとく」

「世界が変わる……ねえ」

部屋に戻ると、ポスターのKEIくんと目が合った。

「そんなことも……あるかなあ」

でも……試験の第一関門まで、もう一ヶ月もないのだ。

「大学デビューってやつに……賭けるか」

ため息をついて、再び積分を戦うために机に向かう。

……………あれ？

机に乗っていた携帯が、ない。

ちよっとびっくりしてきよろきよろすると、何のことはない……床に転がっていた。

ディスプレイには、メールのマーク。

バイブレーションにしていたので、きつと振動で下に落ちこちたのだらう。

誰だらう？

開こうとした……その時。

「……………きゃあああああ！……………！」

思わず、椅子から飛び上がる。

…すず!?

慌てて隣の部屋のドアを開く。

「どうしたの、すず!?!」

腰を抜かして、ピンク色のカーペットにぺたりと座り込んでいる、すず。

「あつ…あれ……………」

震える指で、何か指差そうとしたが……………

壁に向けた視線が、ぴたりと止まる。

ぽかんとした表情。

「すず!?!」

鬼気迫る表情のママが、階下から走ってきた。

ママの顔をぼうつと見て、私の顔をぼうつと見て……………

すずは、呆然とした表情のまま、つぶやいた。

「あ……………ごめん、何でもない」

……………え?

「……………もお」

異常のないことを確認して安心したらしいママは、呆れ顔でため息をついている。

「また怖い動画でも見たの?」

「…また?」

この前ね、と笑いながら、私をちらりと見る。

「あなたが模試受けに行ってる時にこの子、パソコンで動画見ていきなり悲鳴上げて……………」

かあつと顔を赤くしてすずが立ち上がり、ドアを閉めようとこちらにやってくる。

「もつつ、そんなことどうでもいいじゃない!大丈夫だからほっといて」

「えつ……………でも……………」

さっきの様子…何だかおかしかった。

違和感ていうか……………

でも…今のはまあ、いつものすずか。

「気のせいかな」

部屋に戻り、つぶやいて、放り出した携帯をもう一度手元に引き寄せる。

…見たことのないメールアドレス。

怪しいメールは開かないほうがいい…って、すずによく注意されるけど。

開いたノートに何気なく目をやる。

と……

さっきの…付箋紙。

このメールアドレスは…さっきの…

何で？

何でこの人…私のメアドを知ってるの？

でも………そうか。

さっき私が眠っている間に、携帯を開いてみたのだろう。

ああ…『使わない時は携帯にロックかけなさい』って、すずについていっても言われるのに。

ちよつと冷や汗をかきながら、でも…

好奇心が沸々と湧き上がってくる。

ちよつとだけ…見てみるか。

『はじめまして』

そんなタイトルのメールには動画が添付されていた。

ドキドキしながら…少しビクビクしながら…再生。

今度は叫ぶの…私の番だったりして。

………だが。

映っていたのは、イルミネーションに彩られた、街の風景。

サンタや、雪だるまを象った発光ダイオードのオブジェや、大きな眩しいクリスマスツリー。そして、金色にきらきら輝くアーチの中を歩いている様子。

「………綺麗」

思わずつぶやく。

その人はそのまま、細い路地に入る。  
その時だ。

目の前に、大きな黒いお化けみたいなのが立ちはだかった。  
どきんとして、思わず停止しそうになるが…ごくんと唾を飲み込んでぐつと堪える。

それは…泥のような土のような物で出来ているらしい。  
そんな訳の分からない物に遭遇したというのに…その人はとても冷静だ。

ただ淡々と、ムービーを回している。

そして…お化けの巨大な手が、その人に迫る。  
が……

突然小さな竜巻が起こり。

土のお化けは粉々に砕け散って…消えた。

「……………よかったあ」  
ほっと安堵のため息をつく。

『お見事でした』

今までに聞いたことのない…美しい女性の声。  
携帯のカメラが、ゆっくりと声の方に向く。

その女性は……………

外国の映画に出てきそうな、長いブロンドヘアの美しい人だった。

『何をしているのですか？睦月』

……………睦月？

彼は少し笑ったようだ。

画面が少し揺れ。

そして、ムービーは止まった。

しばらく、呆然とそのまま…携帯のディスプレイを見つめていた。

そして…もう一度、再生してみる。

同じ物が…映っているはずだった。



が……

映っていたのは…さっきの美しいイルミネーションだけ。

「……………何だったの？」

誰も答えてはくれない。

夢でも見ていたのだろうか？

「……………睦月」

つぶやいて、壁を見る。

ポスターの中のKEIくんは、一部始終を見ていたはずだ。

でも…彼はそんなことなどお構いなしに、ただ穏やかに微笑んでいた。

12月20日

パイプオルガンの音が、高い天井に厳かに響き渡る。

隣のおばあちゃんがよく通る綺麗なソプラノで、賛美歌を歌っている。

私はあまり歌に自信がないので、それに合わせて口をパクパクさせていた。

こういう時は普通、神様に祈りを捧げるものなんだと思うけど…

私がお祈りの時にいつも思うのは、先に天国に行ってしまった大事な人達のこと。

さよならも言えずに、突然いなくなってしまった…優しかったパパ。それに…

明るくて活発で、きらきらしていた…親友のひかり。

ひかりが入院していた頃は、毎週ここでお祈りしたものだだった。

『ひかりが早く良くなって、ソフトボールの試合に出られますように』って。

私が良い子でいて、一生懸命お祈りすれば、神様は願いを聞き入れてくださるんだって、神父様はおっしゃったけど…どうやら、お願いは神様に届かなかっただらしい。

ひかりはすごく良い子だったし、素晴らしい才能を持っていたから、きっと神様は早くお傍に置きたいとお思いになったんだろう…と、仕方がないので考えることにした。

もう…3年も経つのか。

小さかった弟の仁くんも、ひかりが亡くなったのと同じ年になってしまった。

彼はひかりの遺志を受け継いで野球を続けており、中等部の野球部を引退した今も、高等部野球部に混じって毎日練習に励んでいる。彼がボールを投げている姿を、フェンス越しに見かけることがある

が…

『あれ、ひかり？』と、時々錯覚してしまう。

投球フォームの綺麗だったひかりに叩き込まれたのだろう。仁くんのフォームはひかりによく似ている。それに、ひかりは男の子みたいなショートヘアだったから。

ポジションを訊くと、ピッチャーです！と元気良く答えてくれた。た…小学生の頃の彼。

昨日偶然話す機会があつて、久しぶりにポジションを尋ねたら、何でもなさそうに『ライトです』と言われた。

『ピッチャーは才能ないんでやめました』…とか。

最近の子は、なんていうか…あつさりしてるんだな。

ひかり、すっごく楽しみにしてたのに。

『仁のコントロールは抜群なんだもん！きつとこれからもっともつといい球投げられるようになって、中学高校でスカウトに注目されて、ドラフトの目玉とか言われてプロ入りして、球界を背負うすっごいピッチャーになるんだから！』

目をきらきら輝かせながら、彼女はよくそんなことを言っていた。

『ひかりは？』

私がそう訊くと、にやりと笑って彼女は言うのだ。

『ソフトボールの代表に選ばれて…オリンピックで金メダルよ』

そんなことを、いつも真顔で言っていた。

仁くんがプロ野球選手になることも、自分が金メダリストになることも、彼女は信じて疑わなかったのだと思う。

まさか突然の病魔に襲われて、その夢が叶わないなんて…

彼女は微塵も考えていなかった。

毎日毎日、彼女はひたすらボールを投げ続けた。

夢に向かって一直線に突っ走る、ひかりはとても眩しかった。

彼女のことを思い出すたび、私は…

『医者になろう』という決心を新たにするのだ。

なんとなく熱っぽいな…と思いつながら出かけた教会の帰り道。  
だんだん頭が重くなってくるのがわかる。

…風邪かしら。

そういえば、昨夜から少し喉が痛かった。

どうしよう…明日テストなのに。

ただいまーという声は、自分で聞いててもかなりおかしかった。

たまのお休みで、コーヒーを飲みながらテレビを観ていたママが、  
目を丸くして私を見る。

「文、どうしたの！？顔赤いけど…熱でもあるんじゃないの？」

「…そうかも」

ソファに座らされて、体温計を挟まれる。

熱…38度。

「インフルエンザかしら…大丈夫？」

「んー…多分」

だるくてあまりしゃべりたくない。

背筋がぞおつと寒くなる。

放っておくと、熱はまだまだ上がりそうな気配だ。

ちよつと待っててね、とママは階段を登り、すぐに何か頼みに行っ  
た様子。

ぼおつとする頭に…ふとよぎったもの。

昨日の女の人…誰だったんだろう。

綺麗な人だったな……

あれ？ひよつとして私…あの時から熱あったのかもしれないな。

それで…幻覚を見たのかもしれない。

それはそれで、ちよつとがっかりだけど。

「ムツキ…か」

誰なんだろう。

男？それとも女？大人なのか、子供なのか…

その時。

コートのポケットに入っていた携帯がブルブル鳴る。

…メールみたいだ。

タイトルは『ちよつと質問』。

『こういうの、好き?』という文章と共に、添付されていた写真は…シルバーの華奢なブレスレットだった。

ころんとした正十字のチャームには、小さなジルコニアが散りばめられていて、きらきら輝きを放っている。

そのチャームと一緒にくっついているのは、ハート型のトルコ石。

トルコ石は私の誕生石だが、すずの4月のダイヤモンドなんかと比べるとなんだか地味で、こんなに可愛い誕生石のアクセサリーって、今までに見たことがなかった。

「わあ…かわいい」

思わずつぶやいて、『好き』と返信する。

熱に浮かされてうつらうつらしていると、ママが私の名前を呼んだ。ママは薄くお化粧をしてコートを羽織り、車のキーをチャリチャリ言わせている。

「ごめんね、お待たせ。病院行きましようか」

どうやらママはすずに、休日診療をしている病院を調べさせていたらしい。

すずがリビングの入り口から顔を覗かせて、大丈夫ー?と呼びかけている。

「うん………ありがとう」

だるいし寒いし、動きたくないけど…

受験生なんだし、ひどくなる前に治さなくては。

それより何より…せっかくすずが調べてくれたのに、行かないのも申し訳ない。

ぼーっとしたままふらふら立ち上がり、靴を履いていると、向こうの部屋でママがまた何か、すずに頼み事をしているような気配。

えーめんどくさい…とかなんとか…文句を言う声が聞こえる。

思わず顔が緩んでしまう。

すずのそういう素直なところ…実はちよつとだけ、羨ましい。

そういえば。

さっきのメール…何だったんだろう？

携帯を見ようと、ポケットから取り出すが…

「文、行くわよー」

ママの声がして、またポケットにしまう。

変な棒を鼻の奥に突っ込まれて、痛い思いをして調べられてみたものの。

どうやらただのタチの悪い風邪で、大流行中のインフルエンザではなかった。

受験生なんです、早く治さなきゃいけないんです…と嘆願すると、お医者さんは変なおいのする注射を打ってくれて、少し元気になったような気がした。

「ちょっとお買い物してくるから、待っててね」

暖房を効かせるためにエンジンをかけたままで、ママはそう言っ  
て車を降りた。

はあ…と大きいため息。

冷たい車の窓におでこをくっつけて見上げるショッピングセンターは、サンタの飾りやクリスマスツリーで華やかだ。

行きかう人々も忙しそうで、ちよっとうきつきした様子。

もうすぐクリスマス…というのは、大人も子供もうきつきするものらしい。

私にとって、もうすぐクリスマス…というのは、もうすぐ誕生日…  
というのと同義だ。

イエス様と同じ日に私が生まれたこと、敬虔なクリスチャンだった  
パパはとても喜んだらしい。誕生日が来るたび、ママはそんなこと  
を嬉しそうに話す。

私としては、せめてあともう一日遅かったらな…と思う。

すずは誕生日とクリスマス、二回お祝いできるのに、私は一回だけ  
だもの。

プレゼント二つにしてあげようか!?と訊かれたこともあるけど、それも何だか自分が欲張りになったみたいで、一つでいい…と答えたものだった。

彼氏が出来たら…どうだろう。

やっぱり一度に二つお祝いすることになるのかな。

それはちよつと…寂しいかも。

と、ぼんやり考えていたところで…

さっきのメールのことを思い出した。

差出人も確認せずに返信してしまったけど…何だったっけ?

確か、ブレスレットがどうか…

メールを見て……しまったと思った。

昨夜の…あの人だ。

ドキドキ鼓動が速くなる。

寒気とかではなくて…何だか少し、鳥肌が立つ。

どういうこと?『こつこつこの、好き?』って…何?

何だか…ものすごく気味が悪い。

「お待たせ…あら?どうしたの…また、具合悪くなった?」

ママが深刻な顔で尋ねるので、何とか笑顔を作って、大丈夫、と答ええる。

変に心配させてもいけないし…

きつと、昨日と同じ…ただのいたずらだろう。

家でソファに沈み込み、またしばらく、うつうつとする。

と…

ただいま!という元気な声と共に、さすが外から帰ってきた。

休みの日に外出なんて、あの子にしては珍しい。

パタパタ走ってきたすずは、にやりと笑って、私の目の前に小さな紙袋を突き出した。

「…なあに?」

「…なあに?は、こつこちの台詞ですぜ、お姉ちゃん」

……変な子。

見ると、それは若い女の子向けのアクセサリーブランドの袋だ。袋の中にはリボンのかかった小さな箱と、カード。

カードには『不知火文さま』と書いてあった。

その字……何だかどこかで見覚えがある。

何何！？とママも目を輝かせて私を見つめている。

「彼からのプレゼント！？」

「…そんなんじゃないわよ」

さすがにこにこしていたのは、このことで私を追及するためだったらしい。

「ええー！？そんなんじゃない、じゃない！？前にネットで見たことあるけどさあ、結構高いでしょ、そのブランドのアクセって」

「…そうなの？」

もう、お姉ちゃんとはげちゃって…とすずは私の肩をぽん、と叩く。

「クリスマスも間近に迫ったこの時期にい、アクセサリープレゼントする奴なんてえ、もうぜーったい彼氏でしょ！常識的に考えて」

「だから…違うってば」

私がドキドキしてるのは…二人が考えている理由とは多分、違う。

「ねえ、見たい見たい！早く開けてよお姉ちゃん！」

「もう、すず！そんなに急かしたら文ちゃん可哀想でしょー！？」

二人とも、この家で初めてのこういうイベントに、目をキラキラさせている。

どうしよう……

でも…開けなきゃ二人に怪しまれるし……

メールの話をしたらきつと…すずにすごい剣幕で怒られるだろうし

……

意を決して、私は包みのリボンを引っ張った。

中から出てきたのは…

「わぁ！かわいい！……！」

「トルコ石の…ブレスレット！？」



眩暈を起こしそうになったが…なんとか平静を装うことが出来た。そう。

それはさっきの携帯メールに写っていた…ブレスレットだったのだ。差出人の名前はない。

でもカードの端っこには…イニシャルらしき、Mの文字。

Mってまさか……………睦月のM？

ねえねえ、とさすが私の服の袖を引っ張る。

「お姉ちゃん、相手誰なの！？うちの学校の人？同じ学年？同じクラス？ねえー教えてよお、たった二人だけの姉妹でしょー？」

「……………内緒」

寝る、と二人に言い残し、私は足早に階段を登った。

どうしよう。

そんなの決まってる。返さなきゃ。

でも…

どこの誰かもわからないのに、どうやって返したらいいんだろう。

『不知火文さま』というあの字は確かに…付箋紙に書いてあった文字と同じ筆跡だった。

そうだ、勝手に相談……………

いや、駄目だ。

『バカじゃないの！？何考えんの！？』と…熱でふらふらする頭で勝手に怒鳴られたら、私…シヨックで死んじゃうかもしれない。

いや、死ぬ…なんて、こんなに軽々しく使っちゃ駄目だわ。

でも……………どうしよう。

小さなノックの音。

「お姉ちゃんーん夕ごはんだよー…」

心配そうな、すずの声。

「…食べたくなーい」

「なんでえー？早く治して学校行かないと彼氏も心配するでしょー？」

「だから…彼氏じゃないってばあ」

「じゃあ…誰なのよMって」

……………う。

さすがさず…カードちゃんと見てたのか。

「とりあえず、薬飲まなきゃなんだから、何か食べなさいってママも言ってるよお?」

「ごめん……………後で食べるから今は寝かして」

少し沈黙するさず。

「わかった、ママにそう言う。なんか欲しかったらメールしてね」  
その優しさに…じーんと胸が熱くなった。

大声で呼ぶのは辛いだろうから、同じ家の中だけどメールの方が楽だと思っただろう。

前にさずが熱を出して寝込んだ時、同じようなことをしてあげた記憶がある。

『ぼかりのみたい』

変換するのも億劫というのが痛いほど伝わってくるそのメールに、慌てて近くのコンビニに走ったことを思い出した。

メールって、本当に便利だ。

声に出して言えないことも、メールなら言えそうな気がする。

……………そうだ。

これがもしいたさずらだとしたら…多分、相手のペースに乗っちゃ駄目だ。

でも…一度返信してしまっただし、これは絶対に受け取れない。

思い切って…もう一度メールする。

『受け取れません。お返ししたいので、送り先を教えてください』  
こんなメールに、返信が来るとは思えない。

でも…いらないうっていう意思表示は、はっきりしなくちゃ。

えい!と送信する。

メールは送信されました、の表示を見たら、何だか体の力が抜けて…  
さずにも『寝る』って言っただことだし…少し眠ろうと思っただ。

お嫁に行くことになったの。

そう言うと、彼は驚いた様子で目を大きく見開いた。

領主様のご子息が、私を気に入ってくれださったという話、父さんは昨夜、とても嬉しそうに話してくれた。母さんなんか涙ぐんで、よかったですねえと私を抱きしめた。

私が領主様のところへお嫁に行けば、父さんも母さんも楽になるのだ。

沢山いる妹や弟達も、おなかを空かせて泣くことはない。

そう思ったら…嫌だなんて、言える訳もなかった。

どんな人なの？と、彼は感情の無い目で私に尋ねる。

領主様のお屋敷は遠くにあつて、私はその人に会ったことがない。でも、とっても良い方なんですって…と、私も他人事みたいに答えた。

そうか…とつぶやいて、彼は空を見上げたまま黙り込んでしまう。

その沈黙に……圧しつぶされそうだった。

いつ？と…彼は沈黙をやぶって、もう一度尋ねる。

急な話なんだけど、年明けまで待てないっておっしゃるものだから…と、父さんは困ったように笑って言っていた。

5日後。なんだか、日が良いんですって。

そうか、という彼のつぶやきは…消え入りそうな声だった。

でも…その日なら私も光栄だわ。だって降誕祭の日ですもの。救世主様が祝福してくださいさるわ、きつと。

そんな風に…自分に言い聞かせるように、話した。

黙って私を見つめる彼の瞳は…本当に悲しそうだった。

そんな顔しないで、となんとか微笑んでみせたけど…

ごめんね。

『大きくなったらお嫁さんになる』って…約束したのに。守れなくて…本当にごめんね。

着信音にしていた『We wish you a merry Christmas』が鳴り響き、びっくりして起き上がった時、私は何故か涙を流していた。

心臓の鼓動が速い。

変な夢……………

携帯のディスプレイを見て…心臓が止まるかと思った。

……………あの人だ。

電話……………どうしよう。

すずに……………

でも…あんなに強気でも、やっぱりすずは女の子だもん。

こういう時、やっぱりパパがいて欲しかったと強く思う。

携帯電話は暢気にクリスマスソングを奏で続けている。

出ないと…ママからもすずからも、怪しまれるかもしれない。

いや、出ないで切ればいいんだけど…でも……………

覚悟を決めて…通話ボタンを押す。

「あの、私…郵便受け見ました、ありがとございました！でも、

知らない人からあんな高価なもの、貰うわけにはいけないので、お

返ししたいんですけど、どうしたらよろしいでしょうか！？」

電話の向こうの人物は黙ったままで、早口でまくし立てる私の声を

聴いているようだ。

「さっきのメール…私実は熱がありました、ぼーっとしてて、誰か

友達から来たメールかと思ってうっかり返信しちゃったんです！他

意はないんです本当に…ですから…ごめんなさい、このプレスレッ

トはお返します！一回もつけてないし、箱からも出してないので、

返品もきくと思います、ですから…」

『熱があるというのは…お風邪を召されているのですか？』

どきんと心臓が高鳴る。

忘れる筈もない。この前の…ブロンドの綺麗な女の人の声だ。

「えっと…でも…もう、大丈夫です！インフルエンザじゃなかった

ですし…」

知らない人に私…何言ってるんだろ。

インフルエンザって何です？と誰かに聞いているみたいながして、彼女はまた、私に向かって優しい声で話した。

『そのブレスレット、どうかお気になさらず受け取ってください。サンタクロースからのプレゼントだと思って…と、申しておりますので』

「申しておりますって……その…『睦月さん』ですか？」  
まるで…旦那様か何かみたいない方。

おじさんなのかな？睦月さんて…

ええ、とその女性は、少し嬉しそうな声を出す。

『睦月がそう申しておりますので、どうかお納めください』

「でも……あの」

この人…こんなに口調が丁寧なのは、怒ってるからなのかな、と思っただけど…違うのかな。

「私、その…『睦月さん』とは会ったこともないですし、援交とかでは決して無いので…」

『えんこうって…何ですか？』

「いえっ…あのっ…」

外国の人だから、そんな事言ってもわかんないのか。

「とにかく、睦月さんとは全然関係ありませんから！もうこういうこと、しないでくださいって伝えてください！」

受け取ってくださいって…言うならちゃんと、自分で言えばいいのに…

この国のことよく分からない奥さんに言わせるなんて…一体どういうつもりなんだろう。

そんな風に思うと…だんだん腹が立ってきた。

『そういう訳には参りません』

彼女は穏やかな口調で、しかしきっぱりと言いつつ。

『睦月はあなたのこと、心から想っているのですから…今はお会いすることは叶いませんが、必ず近いうちに、あなたに会いに行くと

申しておりますから』

「何言ってるんですか！？奥さんはそれでいいんですか！？」

『……………は？』

「あなたがお分かりにならないなら、それでもいいです！とにかく睦月さんには、私はあなたと会う気はありませんし、あなたのこと好きでも何でもないので、こういうの迷惑なんですから伝えてくださいわかりますから！！！」

その時。

電話の向こうで…男の人の笑い声が聞こえた。

なんだか、すつごく聞き覚えがあるみたいだ…その笑い声。

『何か…誤解があるようですね』

彼女も少し笑いながら言う。

かあつと顔が…余計に、熱くなる。

『私は…そういう者ではございませんから、どうかご安心ください』

「ご安心して…だから私はっ」

『お見舞いに伺っても、よろしいですか？』

…お見舞い???

そうか。あんな物届けられるくらいだもの、住所まで調べられちゃってるってことか。

『何か…召し上がりたい物、ありませんか？』

「……………そんなことしてもらっても困ります」

何なんだ…この人。

「それに…うちに来て、多分……………母や妹に追い返されますよ？全面的に拒否する私にお構いなしで、彼女はまた『睦月さん』と何か話している気配。」

『…チョコレートは、好きですか？』

「……………好きですけど」

相手のペースに乗せられて、思わず答えてしまっ…自分がとても情けない。

『でしたら、持って参ります…本当に申し訳ないのですが、睦月は

ちよつと手が離せませんので…私が』

「あの…さつきも言いましたけど、うちに来てても母が」

『それでしたら…あなたのお部屋に直接、伺いますから』

………は？

『三十分以内には参ります…どうか、驚かないでくださいね』

ぼんやりした頭を…色々なことがぐるぐる回る。

何だろう……部屋に直接って。

また…これもいたずら？

あの人達…私をからかって喜んでるんじゃないだろうか？

…チョコレートか。

KEIくん、チョコレート好きって言ってたな。

『最近流行のスイーツ男子！』と、自分で言って笑ってた。

外国の、とあるメーカーのチョコレートが好きだって雑誌で読んで…わざわざお洒落なそのショップまで買いに走ったことがある。

高いチョコレートなんて、ママがお仕事の関係で貰ってくる以外は食べたことがないので、味がよく分からなくて……当然、ずいずいも馬鹿にされた。

………あ、そうだ。

すでに……躊躇ったけど、メールをお願いをする。

言にくいこともさらっと送信出来るから、メールって本当に便利だ。

KEIくんが夕方のラジオにゲスト出演するの…忘れてたのだ。

『ラジオ録音してください。よろしくお願いしますm(\_\_\_\_)m』  
と出来るだけ丁寧に。

返信はすぐに来た。

『ばかじゃないの？』

………ぐわっ。

でも……ずいずいは優しいから、何だかんだ言ってやってくれと思う。携帯の時計を見る。

さっきの電話が切れてから…三十分はとうに経過していた。  
なんだ、やっぱりいたずらじゃない。

ほっとしたら体の力が抜けて…なんだか眠くなってきた。  
また変な夢見たらやだけど…ちよつと寝よう。

そう思つて布団に潜り込んだ…その時だった。

「文さん？」

どきつとして、布団を一気に跳ね除ける。

「…あ……………」

目の前に立っていたのは…

昨日ムービーで見たのと同じ…ブロンドの女性だった。

「あ…あなた…一体どこから……………？」

彼女はにっこり微笑んで、ガラス張りの窓を指差す。

鍵は…掛かったままなのに。

「どう…やって？」

「申し遅れましたが」

彼女は外国の貴婦人みたいに、長いスカートの裾をつまんで、微笑  
みながらお辞儀する。

「私…風の精霊の、シルフィードと申します」

「かつ……………風の……………精霊!？」

あまりにびっくりして、言葉が上手く出てこない。

「そんなもの…本当に…いるわけが」

『妖精を見たことがあるの』

その時ふつ…と、ひかりが言っていた言葉が頭をよぎった。

秘密を教えてあげる、と誰もいない教室で、もったいぶったひそひ  
そ声で。

『銀色の肩くらいまでの髪の毛、青い瞳の女の子。私ね、近くの神社  
で小さい頃見たの』

乙女チックな趣味とは無縁だった彼女が、目を輝かせながら教えて  
くれた、その話。



からかっているにしては…ひかりは妙に真剣だった。

思わず…

「私の友達が……妖精なら見たことあるって言うてたけど……」  
「妖精？」

優しく尋ねられ…つい、その容姿の話をしてしまう。

彼女は上等な鈴みたいな声で笑って、それは、と人差し指を唇に当てた。

「妖精ではなくて…それはおそらく、水の精霊でしょう」

「あなたの……仲間なの？」

「ええまあ…そのようなものですね」

なんて非科学的な話をしてるんだろう。

きつと…また夢を見てるんだわ。

熱もまだ下がらないことだし……

そういえば…お腹すいたな。

彼女は急に黙り込んだ私を心配そうに見て、そうそう、とまた穏やかに微笑む。

「お渡しするのを忘れておりました」

「あつ…あのつ、お渡し…じゃなくて、本当にこのブレスレット、持って帰って欲しいんですけど……」

仮に彼女が本物の精霊だとして…だ。

こんな物買ってお金…一体どこで手に入れたんだろう？

睦月って人は…精霊と一緒にいるとかって…一体何者なんだろう？

「いえ、受け取っていただきます」

きっぱり言い放つ彼女の笑顔には…こちらが拒否することを拒むような強さがあった。

駄目です、持って帰ってください！と……言いたかったけど言えなかった。

彼女は幅の広い袖から小さな包みを取り出し、私に差し出す。

赤の包み紙に緑のリボンが掛かった…その包みは、間違いなくチヨ

コレートだった。

しかも…

「あの……………」

「何でしょう?」

私が素直に受け取りそうなのがよほど嬉しいのか、彼女ははしゃいだ様子で聞き返す。

「何で…このメーカーのチョコ…私が好きだって分かったんですか?」

「あら…そうでしたか」

これ…KEIくんが好きって言ってたチョコレートじゃない。

「存知あげませんでしたけど、それは幸いです…受け取ってくださいますね?」

「……………」

これはもう…

頷くしかない。

その時、乱暴にドアをノックする音が響き渡った。

「お姉ちゃん!ごめん!トラブル発生!!!!」

「え!?!…ちよ…ちよつと待って!!!!」

動揺する私を見て、彼女はまた、静かに微笑んだ。

「では…私はこれで」

「……………待ってください!」

窓の前に立つ彼女は、振り返って私を見つめる。

勇気を振り絞って…尋ねる。

「睦月さんて…どんな人なんですか?何で私に…こんなことしてくださるんですか?」

「睦月は…ゲームにおける私のパートナーであり、ゲームのプレイヤーです」

「ゲーム……………?」

何…それ?

彼女はくるりとまた、窓の方に向き直る。

「またいずれ…ちゃんとご説明にあがります」

「あの、待って…」

「それと、睦月のことですが……あなたは睦月のこと……よくご存知のはずです」

そう言っただけで彼女は……

窓ガラスをすつつと通り抜けた。

思わず……息を呑む。

あっという間にシルフィードの体は……暗い夜空に溶けて消えた。

12月21日その1

『あなたは睦月のこと…よくご存知のはずです』

昨夜のシルフィードの言葉が、ぐるぐる頭の車を回っていた。

彼女が持ってきたチョコレートのは箱は、机の引き出しにしまっている。

つまり…熱に浮かされて見た幻ではないってということ。

風の精霊？

ゲーム？

それに…パートナー？

それって…一体何なの？

あやー？と呼ぶママの声で…我に返る。

昨日と比べるとやや回復したものの、まだ微熱があつてふらふらしていた。

「顔赤いわよ？大丈夫なの？」

ママが心配そうに私を見る。

寒い朝が苦手なすずは、不機嫌そうにぼそつとつぶやく。

「熱あるなら休めばいいのに」

「だって…今日、テストあるんだもん」

「この時期の学校のテストなんてどーでもいいじゃん。本番は年明けでしょ！？」

「その通り！」

すず良い事言った！という様子で、ママがすかさず言う。

「早く治さないと、1月の試験に障るわよ？補習期間中なんだし、

一日くらい休みなさい」

「……………でも」

『登校・出勤前の女性の皆さん！KEIくんですよー！』

テレビから聞こえて来た女子アナの声に、ふっ…と視線が吸い寄せられた。

画面の中では、KEIくんがにこにこ笑って手を振っている。

昨日の夜ラジオの生放送にゲスト出演したばかりなのに、こんな朝早くから働いて…

うちのパパみたいに…倒れちゃわないかな、KEIくん。

ぼんやりそんなことを考えていたら、突然ずがテーブルを叩いた。

「ちよつと！…！お姉ちゃん聞いてんの！？」

「あ…………ごめん」

ごめんじゃないでしょ！？とすずはイライラした様子で言う。

「あのねえ、昨夜も言おうと思ったんだけどさあ…もういい加減」

KEIくん』は卒業したら！？アイドルオタって、男がいつちばん

嫌がる女のタイプなんだよ！？」

「……………そうなの」

何とかなだめようと素直に話に乗ってみるが…どうやら怒りは収まらないらしい。

「彼氏いるんだったらさあ、ちゃんと彼氏のことだけ見てあげなよ！じゃないと彼氏が可哀想だよ！？あんな非現実的な、アイドルなんかと天秤にかけられたらさあ…」

彼氏彼氏って……………

見ず知らずの『睦月』という男性。

高価なプレゼント。

携帯番号もメールアドレスも、住所も…チョコレートのことまで。

私のこと、何から何までお見通しみたいな…あの様子。

しかも……………風の精霊とかいう、私の理解を超えるものまで現れて。そのことで、私がどんだけ悩んでるか…何にもわからないくせに。

「だから……………彼氏じゃないって言うてるでしょ、何度言ったらわかるのよ！？」

熱があつて、余裕がなかったのかもしれない。

気づいたら私は…物凄く不機嫌そうな声を出していた。

ママもすずも、驚いたように目を丸くして私を見ている。

けど…と、若干怯んだ様子ながら、すずはまだ、噛み付こうとする。

「じゃあ…昨日のあのブレスレットは一体何なのよ？それに」

「あれは然るべき時にちゃんとお返しします！そんなこと、すずには関係ないでしょ!？」

きっぱりと言い切ってしまった……

青い顔をしたすずを見て…襲い来る後悔の波に押し潰されそうになる。

「…………ごめんなさい」

俯いたすずは、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

私は大いに動揺して…すずの肩にそつと手を置く。

「ご…ごめんねっ、私の方こそ…すずは私のことすごく心配してくれているのに…ひどいこと言っちゃって、本当にごめんなさい!」

「でも……………」

「いいの！すずは全っ然悪くないんだから！悪いのは全部私なの、だから…ね？すず…元氣出して」

ん…と腑に落ちない顔で唸った後、すずはこくりと頷いてくれた。  
…よかった。

ほっとして、見上げた時計に…思わず飛び上がる。

「いつけない、もうこんな時間…行かなきゃ!」

え？と二人はまた目を丸くする。

「文の…いつものバスの時間にはまだ、早いわよ?」

「今日は一本前のやつで行くの!昨日ずっと寝てたから、早めに行つて勉強しないと…」

「お姉ちゃん…………大丈夫なの?」

「だーいじょうぶ!じゃあね、行ってきまーすっ」

テレビの中では、KEIくんがいつてらっしゃい、と笑顔で手を振っている。

バス停にダッシュして、ぎりぎりセーフで駆け込み…

ほっとしたら、くらっ…と眩暈がした。

幸い空いていた、バスのシートに沈み込む。

と。

バイブにしていた携帯が振動した。  
鞆に隠してこっそり開く。

『風邪の調子はどう？あんまり無理しないでね。お大事に』

……睦月さんだった。

思わず……ため息をついてしまう。

チヨコレートのお礼……言った方がいいかな。

でも……くださいなんて言った覚え、ないし。

でも……

これだけ色々交流してしまったのだ。今更シカトした所で、何になるわけでもないだろう。

バスを降りて、しばし考えた後……短く返信することにした。

『お陰さまで大分熱は下がりました。チヨコレートどうもありがとうございました』

学校に向かって歩いていると……また携帯が鳴る。

メールの送り主は……やっぱり睦月さん。

『気に入ってくれた？』

……どうしよう。

変な事書いて送って、また返信が来ても……困るし。

『はい、ありがとうございます。これから学校なので返信出来ません。すみません』

なんてつつけんどんな返信だろうと……我ながら惚れ惚れする。

えい！と送信すると、すぐに返事が来た。

『朝早くから大変だね。いつてらっしゃい、頑張つてね！』

……頑張ります。

別に大したことのない、ごく普通のメールなのに……

何だか、ちよっとだけ元気が出てきた。

考えてみたら、男の人とこんな風にメールのやり取りするのなんて

……生まれて初めて。

なんか……ちよっと……

「彼氏でしょ!？」

「すずの言葉が脳裏に蘇ってきて…ブンブンと大きく首を振る。」

「そんな訳ないじゃない…『常識的に考えて』」

お昼休みになったが、熱が下がりきららないようで、あまり食欲がなかった。

「文大丈夫なの!？もう帰りなよー」

友達は心配してそんな風に言ってくれるが…

テストは5時間目。それが終わるまで、帰るわけにはいかない。

そんなことを話すと、友人達は頑固だねえ…とため息をついた。

「じゃあ、せめてさ…お昼食べないんなら、休み時間中だけでも保健室で寝てきたら？」

「んー…そうねえ」

試験勉強には不安が残るが、頭が痛いには勝てない。

とりあえず、何か食べて薬飲みな!という世話好きの女の子に、おやつのクッキーをつまませてもらって、解熱剤と風邪薬を飲む。

「大丈夫?保健室一人で行ける?」

「…勿論」

本当に?と友人達はまだ心配そうな顔をしている。

「私…そんなに辛そう?」

「そうじゃないんだけどさあ…」

運動部だった友達が困り顔で笑う。

「文って頭良いのはわかるんだけど、なーんか頼りないっていうか

…心配なんだよねえ」

他の子達もうんうん、と納得顔で頷いている。

「…なんだそりゃ。」

大丈夫?やっぱり一緒に行こうか?という有難い友達の申し出を丁寧で辞退して、私は一人ふらふらと教室を出た。

うちの学校は進学校の癖に、割と部活動が盛んだ。



私も妹のすずも帰宅部なので、それには一切貢献していないけど……冬期講習期間に入り、中等部生は午前中で授業が全部終わるらしい。保健室に続く渡り廊下には、運動部の中等部生達の活気に溢れた声が響き渡っていた。

吹く風の冷たさに……思わず首をすくめる。

……コート持ってくればよかったかも。

ふと思いついて、ポケットから携帯を取り出し、メールを確認してみるのが……

問い合わせ結果、メール0件。

何だか……ちよつとだけがっかりする。

返信出来ませんって、メールするな、みたいなこと言ったのは私なんだから、当たり前と言えば当たり前なんだけど。

それに、平日の昼間だし……きつと睦月さん、忙しいんだ。

睦月さんて………何してる人なんだろう？

昨日のシルフィードの話からは、結局彼の正体を窺い知ることには出来なかった。

私みたいな鈍臭い女子高生にちよつかい出そうなんて……その上、あんなプレゼントくれたりするなんて……酔狂としか思えない。

やっぱり、おじさんなのかなあ。

でも……メールの様子からは割と若そうっていうか……うーん………その時だ。

突然、遠くから仁くんの声がした。

「不知火先輩！危ない！！！」

「えっ………」

ダン！という衝撃と音。

近くにいた生徒達の悲鳴が聞こえる。

我に返ると……

私がいいた渡り廊下のすぐ傍の柱に、一本の弓道の矢が突き刺さっていた。

「お姉ちゃん！！！！！」

すずの声が肩の辺りから聞こえてきた。

どこか遠くから駆け寄ってきたらしく、呼吸が少し乱れている。

「うわぁギリセーフ…もうちょっと歩くの早かったらマジ刺さってんぞ…」

「何あれ…誰がやったの!？」

周囲の生徒達の囁きが聞こえる。

呆然と、目の前に刺さっている矢を見つめる。

羽根の部分は…真っ白だ。

……………白羽の矢、か。

「お姉ちゃん、大丈夫!？ねえ、お姉ちゃん!？」

すずが必死で私を呼ぶ声が……………

段々…遠くなっていく。

12月21日その2

白羽ノ矢ガ立ツタンダト。

アノ キリシタンノ家ラシイナ。

トイウコトハ アノ娘カ。

器量良シデ氣立テモ良クテ 親思イノ良イ子ダヨ アノ娘ハ。

領主サマモ大層 氣二入ツテオラレタヨウダガ

白羽ノ矢ガ立ツタトアラバ 仕方アルマイテ。

アア 領主サマハ 信心深イ御方ダカラナ。

カワイソウニ アノ娘。

数日後二八 綺麗ナ着物着テ 若サマニ輿入レスル手筈ダツタンダ  
口。

マサカ ヒトバシラニナツテ 土深くニ埋メラレチマウコトニナル  
ナンテ

キツト思イモヨラナカッタロウ。

父親モ隠レテ泣イテタヨ。

母親ハ倒レチマツタラシイナ。

ナノニ アノ娘トキタラ立派ナモンダ。

神様ノ思シ召シナラバ 喜ンデオ受ケシマス トカナントカ。

ソイデ 自分ガ生贄ニナツタ暁二八 父親ヲ土地持チノ百姓ニシテ  
ヤツテクレダト。

神主サマモ領主サマモ 涙ナガラニ承諾ナサツタソウナ。

何ダカ 仏サマノヨウナ娘ダネエ。

イヤ キリシタンダカラナ 自分ガ聖人ニデモナツタヨウナ氣デ  
イルンジャナイノカ。

俺二八サツパリ理解出来ンネ。

アア 全クダ。

ソレニシテモ

ホンニ氣ノ毒ナノハ アノ若者サ

目が覚めると。

そこはさつき向かっていた、保健室のベッドだった。さすが心配そうに私の顔を覗き込んでいる。

「お姉ちゃん……大丈夫？私、わかる？」

「……うん」

よかったあ、と大きいため息をついて、すずは両手で顔を覆った。そんなすずの肩に手をかける少年。

「……仁くん」

ひかりの弟の、水月仁くんだ。

「先輩、大丈夫ですか？……僕の声、聞こえてました？」  
頷く。

「ありがとう……お陰で、助かった」

『不知火先輩、危ない！』という仁くんの声。

あの声で立ち止まらなかつたら、多分あの矢が命中して……想像しただけで鳥肌が立つ。

弓道部の中等部生が誤って放った矢が、防護用ネットの無い、的とはあさつての方向に飛んでいってしまったのだという。

泣きながら謝罪する男の子と顧問の女性の先生を、いいですよ……と慰める。

「熱もあるみたいだし……もう少し、休んでいったら？」  
保健室の先生が優しくそう言ってくれるが……

時計を見ると、5時間目が始まるまであと5分しかない。

「……大丈夫です。5時間目テストなんで……行かないと」

「お姉ちゃん……！」

すずが怖い顔をして、私の腕を掴む。

「そんなもんでもいいじゃない！お姉ちゃん顔真っ青だよ！？」

「……………本当？」

「休んでなきや駄目だよ！テストだテストだって……………馬鹿じゃないの！？」

「そうですねよ…先輩」

仁くんも、心配そうに声をかけてくれる。

「すぐと仁くんて…仲良かったのかしら。」

確か、隣のクラスだって言ってたと思ったけど。

「私…そんなに顔色悪い？」

二人は同時に大きく頷く。

その姿が可愛くて…なんだか少し、表情が緩んでしまった。

「お姉ちゃん、シヨックで頭どうかしちゃったんじゃないの！？」

眉間に皺を寄せて怒鳴るすずに、大丈夫…と微笑みかける。

「さつきね…ちよつと怖い夢見ちゃって」

何だったんだろう…あれ。

昨日に引き続き…変な夢。

白羽の矢？ヒトバシラ？

何の事だか…さっぱり。

「だから…多分、顔色悪いのはそのせいだと思う」

ん…とすずは納得出来なそうに、低い声で唸る。

「確かに…何かちよつと、うなされてるみたいだったけどさ…」

「でしょ？だから…大丈夫」

立ち上がる時少しくらつとしたが…何とか誤魔化せたと思う。

「先生、ありがとございました。教室戻ります」

また調子悪かったらちゃんと言うのよ…と心配顔の先生に深々と頭を下げ、保健室を出た。

振り返ると、心配そうにすずがこちらを見ている。

睦月さんのこと……………

帰ったら、やっぱりすずに相談しよう。

教室に戻ると、さっきの騒動はもう知れ渡っていたらしく、クラス

中がどよめいた。

で…………… 大変な思いをして受けたテスト。頭痛がして…という言い訳をしたくなるくらい、ひどい出来だった。まあ、実際頭痛はしたけど。

何をどう書いたかさっぱり覚えていない。

一応最後まで目を通すだけ通して、余った時間は机に突っ伏して寝ていた。

終了のチャイムが鳴って、近づいてきた友達が悲鳴を上げる。

「あんた熱ひどいよ！？顔真っ赤だし！」

「…ほんと？」

うんうん、と友人達は頷いて、もう帰れ、ときっぱり私に命じた。

校門を出て、バスの時刻表を見ようと、鞆から携帯を取り出す。

…メールが来ていた。

『学校終わった頃かな？お疲れ様』

睦月さん…………… マメな人だなあ。

『まだなんですけど早退しました』

そこまで書いて…消去。

こつちの状況を事細かに教えてあげる必要はないんだし…

迎えに来るとか言われたら困るし。

彼自身が来なかったとしても、シルフィードがこんな所に現れたら、きつと街中大パニックになってしまう。

代わりに……………

『最近、怖い夢を見るんです。別に、それだけなんですけど…』

睦月さんに話したらどうにかなるかも…なんて、どうして思ったのだろう。

自分の想像を超えた存在、風の精霊シルフィード。

そんなものと一緒にいる人になら、何か分かるかもしれない。

そう思ってしまったのだ、多分。

今度は、返事はすぐには来なかった。

お仕事かな…それとも、学校なのだろうか。

ふと、正門の前に立っている中年の男性が、じっと私を見ていることに気づいた。

黒いスーツに黒いコート。シャツまで黒で、全身真っ黒だ。

若い頃はスポーツでもやっていたような、肩幅の広い体格のいいおじ様である。

怪訝に思っで見つめ返すと、彼は気まずそうに笑って、失敬…とつぶやいた。

「何か御用ですか？」

「いや、私はこの卒業生でね…さっき体育館で講演をしたんだが」「講演？」

そっか…思い出した。

卒業生で大学教授になった人がいるとかで、今日の午前中はその人を招いて、在校生向けの講演会があったのだ。すずや仁くんは、確かそれに参加したはず。

「君は…参加しなかったのかい？」

「…高等部3年生は受験を控えているので、ご遠慮させていただいたみたいです」

にしたって…何で私に声なんか掛けたんだろう。

でも…一応礼儀として、言うておくことにする。

「私、先生の大学を志望しているんです。医学部ですけど…」

「ほう…そりゃ優秀なんだな」

「いえ……ちょっと厳しいかなとは思ってるんですが」

でも、彼はそっかそっか、と愉快そうに頷く。

「まだ1月の試験の結果次第で、幾らでも変更出来るだろうからね…目標は高く設定しておいた方がいい」

「…そうですね。ありがとうございます」

少し間があつて、彼は再び私に問いかけた。

「民俗学に興味はおありかな？」

「民俗学…」

申し訳ありませんが、私は理系なのであまり詳しくありません…と

頭を下げる。

「一応日本史選択ですけど…文化とかはあんまり得意じゃなくて」  
そう言う学生は多いね、と彼は目を細めて笑う。

「私の専門はそういつた分野でね。中世この国に流れ着いた異国人  
によって、宗教、武器、文化…様々な物が伝えられた」

必死で暗記した年号が頭をよぎる。

宗教……

「異国からもたらされた様々の物、そのルーツや広がり进行调查する  
のが私の仕事なんだ」

「……………キリシタンというのは」

気づいたら、その言葉が口について出ていた。

「その頃…この辺りにもいたんでしょうか？」

「勿論だとも。南の方と比べると数は少なかったが、この辺りにも  
異国人は住んでいたからね…その中には宣教師も含まれていたし、  
それに」

『錬金術』

彼は確かに、そう言った。

「異国で名をはせた錬金術師の弟子が、この辺りに居を構えていた  
らしい」

「錬金術…ですか」

なんて…胡散臭い。

信じないかね？と彼は愉快そうに私に尋ねる。

「錬金術を通じて…化学は発達したのだと、昔どこかで聞いたこと  
はありますけど…」

「異国の名錬金術師は同時に名医でもあり、そして、金以外にも様  
々な物を生み出したという」

うんざりしている私にはお構いなしで、彼は饒舌に語り続けている。  
きっと自分の研究内容を人に話すのが、楽しくて仕方無いのだろう。

「人工生命体のホムンクルス、人に不老不死を与える賢者の石など  
など。哲学にも秀でており、その他色々なことに関する本を著して



いる。代表的な物として『妖精の書』」

「妖精!？」

思わず叫んだ私に、彼は目を輝かせた。

「左様。四大元素をそれぞれ精霊になぞらえて『四精霊』とすることを提唱したのが彼だ。炎の精霊サラマンドラ、水の精霊ウンディーネ、土の精霊ノーム、風の精霊シルフィード」

「……………シルフィード」

「興味があるかね？」

「えっ……………いえ……………」

「まずい。」

このままでは話がどんどん長くなって、うちに帰れなくなってしま  
う。

でも……………すごく気になる。

「うちの…妹が、その…ゲームとかファンタジーとかが大好きで…  
聞いたことがあって…それで……………その錬金術師は、精霊と話をす  
ることも出来たんでしょうか？」

「そうだなあ…残っている文献によれば、そのようだが」

「呼び出したり…することも？」

「ああ、そう記されているよ。ただ……………」

「……………ただ？」

「この国に住んでいた弟子に、それほどの力があつたかについては  
…定かではないがね」

「そうですか……………」

睦月さん……………」

その…錬金術師に関係があるんだろうつか。  
とりあえず…聞きたいことは聞いた。

「有難うございました。とても興味深くて…面白かったです」  
にっこり笑って、その場を辞する。

「それは良かった」

先生はにっこり笑って、一枚の名刺を私に握らせた。

名前と大学名、研究室名とメールアドレス。

「もし何か聞きたいことがあれば、ここへ連絡してくれたまえ。可能な限りお答えするよ」

家に帰ると、さすが不機嫌な顔でテレビを観ていた。

「ただいまーと声をかけるが、返事は無い。」

「さっきのこと、怒ってるのかな？」

「さっ…話があるんだけど」

それでもやっぱり……すずは黙ったまま。

彼女が座っているソファアの隣に、ちよこんと腰掛けてみる。

ちらりと、横顔を覗き見る。

すずはだんだん、ママに似てきたような気がする。

いつの頃からか、大人びた顔つきになってきた。

昔は…あんなにちっちゃかったのに。あんなにいつも、にこにこしていたのに。

お休みの日はいつも、パパと並んでゲームをしていた。

パパもすずもすっごくはしゃいで、きらきら目を輝かせて…

目悪くなるからほどほどにしてよ、と呆れ顔でママが笑って。

私はいつも本を読みながら、そんな二つ並んだ背中を眺めていた。

私が…すずと一緒に、遊んであげられればよかったんだけど。

そうすれば、もっと…すずは笑ってくれるのかもしれない。

そんなことを考えていた。

「あのさ…何か言いたいことあるなら、言えば？」

どきっとして我に返ると、すずは眉間に皺を寄せて、口を尖らせて私を見ていた。

「えっと……さっきは…ありがとう」

「いいえ、どういたしまして。最初に気づいたのは水月だもん」

「仁くんと…仲、良いのね」

勘違いしないでよ、と不愉快そうに口調を強める。

「あの時、たまたま一緒にいただけ。別に何でもないんだからね」

「…そっか」

「で……………用事はそんだけ？」

「あ……………」

そっか。

コートのポケットから携帯を取り出して、メールを見せる。

それと、ノートに貼ってあった付箋紙も。

すずはそれを見るなり……………怒鳴った。

「馬鹿じゃないの!？」

「……………やっぱ…そっかよね」

「もしかして…あのプレゼントも!？」

その勢いにちよつと躊躇ったが…ここまで話しちゃったら仕方が無いので…頷く。

もう信じられない!とすずは大きく首を振る。

「そんなの完つ全にストーカーじゃないの、常識的に考えて!!!  
相手してやるなんて、お姉ちゃん人が良いにも程があるわよ!?!  
そういう輩はねえ、こつちがリアクションしてくるのを楽しんでるんだから!女子高生にちよつかい出すなんて、変態よ変態!」

「でも……………」

その言い方は余りに…睦月さんが可哀想な気がする。

「その…帰りに後つけられるとか…帰ってきたら『お帰り』ってメールが来るとか…さ。無言電話とか…そういうんじゃないし…なんて言うか……………」

シルフィードのことが喉まで出掛かるが…慌てて飲み込む。

代わりに…『普通のストーカーとは違う気がする』と反論してみた。が…勿論答えはいつもと同じ『馬鹿じゃないの?』。

「最初はみんなそんなもんだってば。だんだんエスカレートしてくるもんなの!本当にお姉ちゃんはお人よしなんだから…」

すずは仁王立ちで私を指差し、きっぱり言い放った。

「もう絶つ対に、その男と連絡取っちゃだめだからね!」

部屋に戻って…ため息をつく。

携帯取り上げられて…番号を消去されてしまった。

『着拒にしても、外しちゃうでしょ？どうせ』

『そんなこと、しないわよ…』

『もう、登録してある電話以外には出ちゃ駄目だからね！じゃないと…』

すずはぐつと声を低くして、私を睨んだ。

『このこと…ママに言うわよ！？』

…それだけは駄目。

付箋紙もビリビリに破かれて、ゴミ箱に捨てられてしまった。

「睦月さん…か」

KEIくんのポスターに視線を移す。

「仕方ないよね…本当は最初から、そうしなきゃいけなかったんだもん」

自分では出来なかったから…すずがきっぱりそうしてくれて、助かった。

ふう、と大きく一つため息をつく。

おでこに手を当てると…やっぱりまだ熱い。

布団に潜り込み、シーツの冷たさにぶるっと身震いした。

目を閉じると…ぐるぐる回るのは。

睦月さん。

風の精霊シルフィード。

あの奇妙な夢。

そして…錬金術。

少しうとうとして…携帯のバイブにびくっとして起き上がる。ズキンと頭が痛む。

「…いたた…あれ？」

メールアドレス欄には、アルファベットが羅列されていて…

「…………睦月さんだ」

そっか…さっき電話帳から削除したから。

『絶対出ちゃ駄目』

さつきせずに言われたけど…

……見るだけなら、いいかな。

メールを開いてみる。

『どんな夢だろう？そういうのって、すごく不安になるよね』  
うんうん、と頷く。

『でも心配しないで。君のことは絶対に、俺が守るから』

………ときん、と胸が高鳴った。

「守る………」

『どんな時でも、必ず駆けつけて君のこと助けるから。だから安心して……』

ストーカー…か。

だんだんエスカレートするとか…そういうもんなのかな。  
すず………

でも…どうしても、私にはそうは思えないの。

すずと約束したばかりなので、返信はしなかったけど。

もう一度布団に潜り込む。

また怖い夢、見るかな。

でも………睦月さんがいてくれるから、きっと大丈夫。

ふうっ…と大きく深呼吸して、もう一度目を閉じた。

夢を見た。

今度は怖い夢ではなくて、すごく気持ちの良い夢。

私は、大きなクリスマスツリーの下に立っている。

金銀の飾りは、明るい日の光を受けてきらきら輝いていた。

綺麗…と思わずつぶやくと。

『本当だね』

優しい声と、肩に置かれる大きな手。

『だから言ったでしょ？文は俺が守るって』

その人はそう言って、私の体を抱き寄せる。

『…睦月さん？』

その人は頷いて、優しい瞳で私を見つめる。

『……………あなたは』

『We wish you a merry Christmas』  
に、心地よい眠りを妨げられる。

「……………夢か」

そりゃそうだ。

携帯を取りに、ベッドからむっくりと起き上がる。  
と。

ポスターのKEIくんと目が合った。

ちよつと動揺して、目を逸らす。

すずじゃないけど…『馬鹿じゃないの？』私。

「いくらなんでも…そんなことあるわけないじゃない」  
光るサブディスプレイには、電話帳登録のない番号が表示されている。

これは…多分、睦月さんだ。

『絶つ対に駄目！！！！』

さっきのすずの鬼のような形相が目には浮かんだが…  
隣の部屋に向かって、手を合わせる。

「すずごめん…馬鹿なお姉ちゃんを許して」

えい！と携帯の通話ボタンを押す。

画面に案内メッセージが出て…

「テレビ電話だ」

ときどきしながら…通話OKのボタンを押す。

電話の主は、海に架かった橋の上を走る、車の中にいた。

車窓に映るのは、埋立地に立つ巨大な観覧車。

イルミネーションは色を変え形を変え、華やかな輝きを放っている。

「……………綺麗」

前に、メールに添付されていた街のイルミネーションと同じで、こ

の夜景を私に見せようとしているのだろうか。

車を運転しているのは、どうやら睦月さん本人ではないらしい。

ガタガタ車が揺れる音と、カーステレオから流れる賑やかなBGMに埋もれ、聞き逃してしまいそうになるが……低い男性の声が聞こえる。

途切れ途切れでよく聞こえないけど……

感謝する、とか、共通の目的がどうか……

男性はぼそぼそ話すので、余計聞き取りにくい。

睦月さん！と呼んでみたら……どうなるだろうか。

隣の運転席の男性は、彼が携帯を 통화状態にしていることに、気づいていない様子なので、きつと驚くだろうし……もしかしたら、話を他人に聞かれたことに慌てるかもしれない。

というほど……内容は聞き取れていないのだが。

……秘密の話だったりして。

『聞かれたからには生かしてはおかん！』とか……

いや……まさか。最近ちょっと、すぐに感化されすぎかも。

そんなことはないにしても、動揺してハンドルを切りそくなって事故……なんてことになったら困るので、声を潜めて観察することにした。

しばらくそのまま頑張ってみるが。

相変わらず、カーステレオの重低音にかき消され、会話の内容はさっぱり。

しかし。

ふいに耳に入ってきた言葉に……思わず受話器を強く握り締める。

『シルフィード』

その男性は……確かにそう言った。

心臓の鼓動が速くなる。

どうしよう……これ、本当に『秘密の話』なんじゃないかな。

シルフィードの話なんて……そうそう赤の他人とする話じゃないだろう。

睦月さんは相槌を打つでもなく、ただ黙って窓の外の綺麗な夜景を眺めている様子。

と、その時。

『聞いているのか？風群…』

男性が、口調を強める。

どこかで…聞いたような声。

『……………ああ、勿論』

ぼそりとつぶやいた声は…睦月さんの声だろうか。

携帯を運転席の足元に向ける。

男性の黒いコートの裾がちらっと写った。

『貴様、何を』

そこでぷつりと、電話が切れた。

ツーツーという音が響く。

「……………風群」

男性は睦月さんのことを、そう呼んでいた。

「風群…睦月……………か」

不意に、さっきの番号に…睦月さんに、電話を掛け直したい衝動に

駆られるが…

ぐっと自分を抑え込む。

我慢するのは…我儘を引っ込めるのは…割と得意だ。

携帯を机に置いて、もう一度布団に入った。

ぎゅっと目を瞑るが……………色々な謎が頭の中を巡る。

睦月さん…

あなたは誰？

それに…さっきの人は？

私に何を見せたかったの？

シルフィードは…ゲームって一体何？

それにあなたは……………

私を『何から』守るといふの？



12月22日 その1

「物騒ねえ」

ママが新聞を広げて眉をしかめる。

「すずちゃん好きなあおの街ね…何だか事故があつたみたいよ」

地下に埋まったガス管の爆発事故。

水道管にも亀裂が入り、大通りは水浸しになったのだそう。

ガスに引火し周囲で火災も発生したが、幸い被害者は出なかったという。

「遅い時間帯だったみたいだけど、忘年会シーズンで人も沢山いただろうし…大事にならなくて本当に良かったわよね」

はあ、とため息をつくママ。

黙り込んでいるすずをちらりと見ると…

その表情は暗くて、お箸を持つ手も止まっていた。

「すず？」

「……………あ…ごめん。何でもないの」

ほっぺたの…小さな切り傷に目が留まる。

「あら？これ…どうしたの？」

柔らかい頬に触れた私の手を、すずは慌てた様子で振り払い、曖昧に笑う。

「あ…これね…なんか、爪で引っかいたみたいで……………」

「…そう」

何か変だなあ…と思わないでもなかったけど。

「お姉ちゃんこそ、熱下がったの？」

「ん…まあね」

…嘘。

さつき体温計で計ってみたけど…この所、37度2分を下回る気配がないのだ。

やっぱり…ちゃんと休まなきゃ、駄目なのかなあ。

薬ちゃんど飲んでるし、食欲ないの我慢して、一生懸命ご飯も食べてるのに。

まあ……………いいや。

「……………メールは？」

小声で訊くすずに……………どきつとしつつ、平静を装ってにっこり笑う。

「あれから一回も来ないわよ？ やっぱりいたずらだったみたい」

ママに聞こえないように、こそつと答える。

ごめんね、すず……………これも嘘。

嘘つきさんは天国に行けないよって……………小さい頃、パパに言われたのを思い出した。

「文ー？」

休み時間にぼーっと机に突っ伏していたら、友達ののりが声をかけてきた。

「ちよつとー……………大丈夫なの？」

「ん……………大丈夫。最近寒いから眠いだけ」

本当に寒いのか、寒気がするのかは……………謎。

「ねえねえ、明日……………暇？」

「明日って……………あ、そうか。明日はお休みかあ」

「そうかじゃないわよお、折角の休み忘れるなんて、あんたやっぱりちよつと変だよ!？」

まゆもやって来て、呆れた様子で言う。

「別に……………何の予定もないけど」

そっか……………じゃあ、明日はゆっくり寝よう。そしたらきつと、熱も下がるだろう。

「明日さ、街出ない？ 付き合っで欲しいところがあるんだけど」  
のりは、彼氏のクリスマスプレゼントを選びに行くのだと言う。

……………いいなあ。

具合悪いから、明日は寝てたいんだけど……………って、本当は言いたいけど。

そんなこと言ったら…きつと昨日みたいに、まゆに『早退しなさい！』と追い返されてしまうに違いない。

しぶしぶという様子の私に、まゆが楽しそうに笑いかける。

「ねえねえ行かない！？おまけのイベントもあるんだけど」

「…まゆは行くの？」

まゆは彼氏もいないし、寂しいクリスマス仲間のはずなんだけど。

…イベント？

「明日ね、坂のところにスタジオあるじゃん？」

「…うん」

「あそこで…ラジオの公開録音あるんだけど………ゲスト、誰だと思っ！？」

ぱっと目が輝くのが…自分でもわかった。

まゆは私と同じ…KEIくんのファンなのである。

「もしかして…KEIくん！？」

あつたりー！と、まゆはピースサインをして笑う。

私達のはしゃぎように…呆れ顔でため息をつくのり。

「で…どうなの？行くの行かないの？」

そんなビツクニューズ聞いてしまったら…答えは勿論、決まってる。

「行く行く！絶対、行く！！！」

熱に浮かされながらぼんやり残りの授業も受けて…放課後。

剣道部が練習している道場の片隅に、珍しい人を見かけた。

「仁くん？」

仁くんは…今の時間なら、野球部のグラウンドにいる筈なのに。

「今日は野球の練習じゃないの？」

「あ……………えっと」

何故か仁くんは、まずい所を見られた…みたいな、バツの悪そうな顔をする。

そして…しどろもどろに言い訳を始めた。

「ちょっと…気分転換というか、精神統一というか…今はオフィー

ズンで時間もあるんだし、野球以外のこともトレーニングに加えたらどうかって、先輩に言われたんです」

「…そうなの」

成程…そんなこともあるのね。

でも…………

何だか、変な感じ。

仁くんの顔と、『なんでもないの』と笑った…今朝のさすが重なった。

すずも最近…こんな風に、何か隠し事をしてるみたいなのがある。

「先輩は…もう、授業終わったんですか？」

「ええ」

今日は何とか、ホームルームまで持ちこたえることが出来た。

でも…はつきり言って、昨日より体調は悪いような気もする。

「ちよつとだけ…見てもいい？」

そう尋ねる自分に…自分でもちよつと驚いた。

「見ても…多分、面白くないですよ？俺、剣道はほぼ素人だし…」

「いいの。何となく…見ていたくて」

何でだか、自分でもよくわからない。

でも…無性に、見ていたくなったのだ。

背筋を伸ばし、まっすぐ竹刀を振り下ろす仁くん。

しなやかな筋肉は、野球で鍛えた賜物だろう。

運動神経が良くて羨ましい。

そういえば、ひかりもスポーツ万能だったな。

私は昔から鈍くさかったから、よく笑われたものだった。

『もう何やってんの！？文』って。

『早く来ないと置いてくよ…』

いつも彼はそんな風に言って…私の方を振り返って笑った。

あの…今にも吹き出しそうな笑顔。

馬鹿にされてるみたいで、ちよつとやだったけど…

その瞳は、本当に…私を気遣ってくれていた。

……………そう。

こんなことも…よくあったわ。

こんな風に、彼は…寒空の下で、黙々と素振りをしていた。

『私にも出来るかな?』

そう言うと…彼は呆れ顔で、お前には無理だよと笑うのだった。

『出来るわよ、先生が良いもの』

口を尖らせる私に…

楽しそうに目を細めながら、ため息混じりに言うのだ。

『…言つとくけど』

俺は教えてやらないよ。

お前は刀の握り方なんて、覚える必要ないんだから。  
だつて。

お前のことはずっと……………俺が守るんだから。

「誰のこと…ですか?」

仁くんが突然言い…

どきつとして我に返る。

「……………え?」

「いや…その……………俺、不知火先輩にそんな人がいたなんて…知らなくて」

……………そんな人?

「……………そんな人つて…何?」

「…えっ!? いや……………だから…先輩が今、素振りがどうとかって言つたから…」

仁くんは…あたふたしながらそんな事を言う。

「私……………そんな事…言つた?」

木枯らしが吹き抜ける。

今の……………何だったの?

白昼夢?

だって……あの人は……誰？

何だか……悪寒がする。

しかも私……うわ言を言っていたらしい。

本当に……最近私……どうしちゃったんだろう。

話題を変えよう……という風に、仁くんが私をじっと見つめる。

「先輩。不知火から聞いたんですけど……ストーカーに遭ってるのかって」

……ストーカー。

そっか、睦月さんのことか。

「……そう」

すずってば……

「……すず、そんなこと言ってたの」

仁くんはまだ……話しちゃったんだ。

……よっぽど心配してるんだろうなあ。

やっぱり……話さないほうがよかったかもしれない。

「警察に……相談したほうがいいんじゃないですか？そついうのって

……」

仁くんも……すごく心配してくれているみたいだ。

でも……

「でもね！」

仁くんは優しいから……

分かってくれるんじゃないかって、つい……思ってしまう。

「睦月さんって……すずには分かってもらえないかもしれないけど……

悪い人じゃないと思うの。風邪引いた私のこと、気遣ってくれたり……

……怖い夢見て不安だったときに、すごく心配してくれたり……」

今朝も、昨日と同じ時間にメールが来た。

『今日は怖い夢見なかった？風邪の具合はどう？』って……

すずはあんな風に言うけど……

どうしても……睦月さんが悪い人には思えない。

「先輩……こんなこと言うの……あれですけど」

「騙されてるって…思う？」

辛そうな顔をして…彼は小さく頷いた。

やっぱりそんな風にしか…思ってもらえないよね。

「…そうかなあ」

きつと…実際に接してみなきゃ、彼の本当の姿はわからないんだと思う。

でも…

そういえば、私も……

まだ直接…睦月さんに会ったことはないのだ。

「やっぱり、そうだよな………ありがとう、仁くん」

不本意な気持ちもあるけど……

この場はとりあえず…彼とすずを安心させてあげなくては、と思った。

うちに帰ると、暖かい部屋の空気に頭がぼーっとした。

ふらっ…と下駄箱にもたれた所で…携帯が鳴る。

メールボックスを開くと。

『熱下がった？あんまりひどいようなら、もう一度ちゃんと病院に行くこと！』

「……………睦月さん」

思わず少し…笑顔になってしまった。

『熱、なかなか下がりません…白血病だったりして』

送信してしまっってから…あまりに不謹慎で、我ながら大いに反省する。

ひかりのことを…思い出したのだ。

『なんか、熱っぽいんだよねえ』

だるそうにため息をついて、そんな事を言っていたひかり。

何で私…『ちゃんと医者さんに見てもらいなさい』って言わなかったんだろっ。

あの時ちゃんと病院に行ってれば…

もしかしたら、ひかりは今でも元気で……  
ぶんぶん首を振って悲しい空想を断ち切り、慌ててもう一度メールを送る。

『すいません…今は冗談です。変なこと言っでごめんなさい』  
部屋に戻った辺りで、携帯が再び鳴った。

ドキドキしながら開いてみると…それは、ママからのメールだった。  
『今日は遅くなります。ずっと何か食べて。本当申し訳ないm(

——)m』  
…ママったら。

明日も休日出勤だつて言つてたし…大変だなあ。

ママに『無理しないでね』と返信して、すすに…  
すずの部屋をノックしようとして…手が止まる。

『不知火から聞いたんですけど…』

仁くんの言葉が、脳裏に蘇ってきた。

…どうしよう。

これ以上、あの子に心配かけたくないし。

でも…睦月さんのことは、やっぱり気になるし。

………ちゃんと伝えなきゃ。

ノックして扉を開け、ママが遅くなると告げる。

ごはんどつする？と訊くと、コンビニで買ってきてくれるという。

でも、もう外は暗いし寒いし、一人で行かせるのは…ちょっと心配だ。

「……………でも」

「いいから！具合悪いんでしょ！？私が食料調達してくるから、お姉ちゃんは寝てなさい！」

『一緒に行く』って…言おうと思っただけ。

気遣ってくれるのは有難いけど……………

でも…これ以上言つと、もっと怒らせちゃうかな。

ただ、これだけは……………どんなに怒らせても、言っておかなくちゃ。

「あの…すず？」



「もう…何!？」

「仁くん…睦月さんのこと、話したの？」

「すずは強張った顔で…じっと私を見つめる。」

「さつき、仁くんに話したのと同じ話をしよう…と思ったのだが。」

「口について出たのは、結局…朝とおんなじ嘘だった。」

「ねえ、すず…この前は心配かけて、本当に申し訳なかったと思ってるんだけど…ただのいたずらだったんだし、あんまり大げさに話さないでほしいなって…思うんだけど」

「もう睦月さんのことは忘れて欲しいから…わざとそんな風に言ったというのに。」

「すずの表情は…更に険しくなり。」

「額の血管が切れそうなくらいの勢いで…怒鳴った。」

「お姉ちゃん!？」

「…はい」

「あのねえ、ただのいたずらで、あんな高価なプレゼント持ってきたりするはずないでしょ!？今は何も接触してこなかったとしても…」

「…」  
「すずは湯気でも出そうな真っ赤な顔で、ふう…と大きく息継ぎをする。」

「後々になって、何されるかわかったもんじゃないんだから…気をつけなきゃ駄目!…!」

「何されるか…か。」

「騙されるとか…後々何とかとか…」

「二人には……わかってもらえないか。」

「そりゃそうだよね…私だって、逆の立場だったら猛反対するもの。」

「その時…ふっと思いつく。」

「もしかしたら…シルフィードの事を話したら、すずは分かってくれるかもしれない。」

「すずは私よりずっと、精霊とかファンタジーとかに詳しいのだから、でも…」

話しても、きつと『大丈夫？やっぱり熱あるんじゃないの？』って  
…言われるだろうな。

そんな事を考えていたら…

すずの机に載っている、ゲームのパッケージが目に残った。

『Salamander』

サラマンダーって…

何気なく、手に取ろうとすると…

すずが、物凄く怖い顔で私の手を振り払った。

「…何するの？」

「え……………あの」

「私がどんなゲームで遊ぼうが、お姉ちゃんには関係ないでしょ！  
？」

……………ゲーム。

すずは特に深い意味もなく言ったんだらうけど…

不意に、シルフィードの言った『ゲームのパートナー』という言葉  
が…脳裏に蘇る。

「それ…どんなゲームなの？ちょっと…興味があって」

「……………どんなゲームでもいいでしょ？」

薬飲んでさっさと寝なさい！とぴしゃりと言い放ち、すずは私を部  
屋から追い出した。

12月22日 その2

『睦月さん

質問があります。

ゲームって一体何なんですか？

シルフィードは私に、自分は『精霊』なんだって言ってました。精霊って他にもいるんですか？

例えば…

サラマンダーっていう精霊もゲームの中にいますか？

私の妹、ずずって言うんですけど…何だか最近変なんです。

(多分、私のことも変だなあって思ってると思うんですけど…)  
変なところをじつと見つめて独り言を言っていたり、

あちこち怪我をしていたり…

それで…部屋に『サラマンダー』って書いてあるゲームがあつて。

もしかして、ずずもゲームに何か関係があるんですか？

それって…危険じゃないんですか？

ずずに何かあつたらつて思うと…私、心配で』

メールの返事は、すぐには来なかった。

遠くにいるんだもの、仕方ないよね。

それに…あの人は忙しいんだもの。

力のある武家に召し上げられてからこつち、村に戻ることも滅多に無くなってしまった。

昨年お母様を病で亡くして、もうこの村に彼の家族は残っていないのだし。

仕方が無い。

全て、あの人の剣術の腕と才覚を認められてのことなのだから。どんなに寂しくても…あの人のためなんだから。

我慢するのは…我儘を引つ込めるのは…割と得意だ。  
だから……………今度だつて大丈夫。

私には神様がついてる。

ちゃんと最後まで…導いてくださるに違いない。

……………あれ？

「……………何だっけ」

私…また何か、変な夢見てたみたい。

額に触れると、手が冷たいせいか、びっくりするほど熱かった。

寝なきや。

せつかくすずが、休ませてくれるって言うんだから。

すず……………

何か…危ないことに巻き込まれてないといいんだけど。

うとうと眠っていたら携帯が鳴って、私は反射的に『通話』ボタンを押していた。

「睦月さんですか？」

相手は…何も答えない。

ディスプレイも見ずに出てしまったけど…

多分、睦月さんだと思う。

いや……………絶対そうだと確信していた。

「睦月さん……………私…また変な夢見ました」

布団にもぐつたまま話す私の声は、寝ぼけてるみたいに聞こえていくだろう。

「睦月さんがね…泣いてたんです。うちの近くに大きな椎の木があって…その下で、一人で隠れて泣いてました」

睦月さんは…やっぱり何も答えない。

「睦月さんが泣いてるのね…多分私のせいだと思うんです」  
でも……………

『ごめんね』って言いたかったけど…言えなかった。

彼の背中があまりに…痛々しくて。

「あの時は…ごめんなさい。『ごめんね』って…言えなくて」

『……………文ちゃん？』

睦月さんの声…

ちゃんと聞くのは初めてのはずなのに…

何故かその声は、とてもよく知ってる人みたいに聞こえる。

「それに…それにね、私……………ちゃんと『さよなら』も言っていない」

『文ちゃん！』

強い調子で名前を呼ばれて…はっと我に返る。

……………あれ？

「ごめんなさい。私…何か変なこと…」

『また…変な夢でも見てたんじゃない？』

優しく諭すようなその声は…受話器を通して、耳から全身に染み渡るみたいに感じた。

声…やっと聞かせてくれた。

やっぱりそうだ……………

悪い人だったら、こんな優しい声してないもの。

『すずちゃんのこと…心配してるの？』

「ご存知なんですか！？すずのこと…」

心臓が脈打つ音が大きくなる。

黙っている睦月さんに、もう一度問いかける。

「お願いします！教えてください…すず……………何も言ってくれなくて」

私もシルフィードのこと…何も話してないから、おあいこと言えばおあいこなんだけど…

あんなに…私には『危ないから関わっちゃ駄目』って言ったのに、すずは……………もしかしたら、もっと危ないことに関わっているんじゃないだろうか。

睦月さんと同じように、精霊が絡んでいるのだとすれば…

どんな危険な事がすずの身に起こっているのか、私には想像がつか

ない。

ひよつとしたら、命に関わるようなことも……

「睦月さん教えてください！ ずずは……『ゲーム』に何か」

『あの子は……プレイヤーだよ』

どきつとして……一瞬息が出来なくなった。

『俺と同じ、ゲームのプレイヤー……あの子はサラマンドラっていう、炎の精霊のパートナーだ』

「それ……」

何なの？ パートナーって……

ゲームって……

「ずずは……それで……一体……何をしてるんですか？」

睦月さんは……何も答えない。

「あの怪我……もしかして……ゲームのせいで負った傷なんですか？」

『その事は……弁解のしようがないな』

「あなたが……やったんですか？」

全身の血が……一気に引くのが分かった。

『君の妹さんを傷つけたりして……本当に申し訳なかった。けど……でもね？ 彼女だつてやられっぱなしだったわけじゃない。ずずちゃんも……自ら望んで、ゲームに関わってるんだ』

自ら望んでって……

「ずずは……あなたにも……怪我をさせたつてことですか？」

『いや……手傷を負ったのはシルフィードだけ』

「大丈夫なんですか！？ シルフィード……」

思わずそう聞き返す……自分に少し、驚いた。

ふつ……と笑って、睦月さんは優しい声で答えてくれる。

『ああ。そう大した怪我じゃないし……大丈夫だよ』

……よかった。

何か……そんな風に思うのも、変な話なのかもしれないけど。だつて……この人達は、ずずを傷つけるような人達なのに。

『優しいんだね…文ちゃんは』

「……………え!？」

『だって…俺達のことまで、気遣ってくれるなんてさ』

「そんなこと……………でも」

「ずっと睦月さんが…ゲームだか何だか知らないけど、傷つけあって  
いるなんて。」

「信じられないし……………信じたくない。」

睦月さんは優しい人だ。

私は…ずっとずっと前から知ってる。

あれ?でも……………

私が睦月さんと初めて会ってから…まだ、何日かしか経ってないの  
に。」

私……………何でそんな風に思うんだろう。

とにかく…そんなことは後回し。

「さすが『ゲーム』の『プレイヤー』だって…それ、確かなんです  
か?」

睦月さんは良い人だけど…

「ずっとだって、とっても良い子だもの。」

他人を傷つけるようなことを…少なくとも、『ゲーム』なんていう  
遊び半分の感覚で、出来るような子じゃない。」

『信じられない?』

思い当たるふしは…実は色々ある。

あの夜…急に叫び声を上げて、虚空を見つめて呆然としていたはず。  
一人でいるはずの部屋からも、時々話し声みたいなのが聞こえてき  
たし。」

あの『サラマンドー』って書いてあるゲームソフトも、ムキになっ  
て隠そうとしたし。」

それに……………何より、あの傷。」

爪で引っかいたくらいで、あんな傷…つくわけない。」

でも……………

「……………はい。信じられません」  
というより……………

信じたくありません。

『分かった。じゃあ…証拠を見せよう』

さつきから…脈が速くて、心臓が口から飛び出してきそうな気がする。

ズキンズキンと頭も痛む。

「証拠って…」

『ちよつと待ってて…それを見て……………後の判断は、文ちゃん…君に任せる』

じゃあね、と言って…

睦月さんは電話を切ってしまった。

隣の部屋をノックすると…返事はなかった。

思い切ってドアノブを回す。

真っ暗な部屋。

「すすず？」

泣きそうになりながら、呼んでみるけど…返事は無い。

部屋は…空っぽだった。

ふらふらする足で階段を降りる。

リビングにも、すすずの姿はなくて…

机の上には、コンビニの袋が置いてあった。

時計を見ると…もう、11時を回っている。

ママはまだ帰ってこない。

「すすず……………」

どこ行っちゃったの？

コンビニ行くから貸して、と言われたダッフルコートも見当たらない。

コンビニから帰ってきて、それを着たまま…また、どこかへ出かけてしまったのだろうか。



一体どこへ？

まさか…

『証拠を見せよう』

睦月さんの言葉が脳裏に蘇る。

「すず……………」

その時…

携帯電話がメールの着信を告げる。

……………睦月さんからだった。

…見たくなかった。

でも…思いきつて、メールの内容を確認する。

無題のメールには、文章も何もなく。

一枚の写真が添付されていて。

震える指で…添付ファイルを開くと。

そこに写っていたのは……………すずだった。

私のダツフルコートを着た…すずの姿。

隣には……………

「……………何で？」

仁くんの姿があった。

膝の力が抜けて…ペタンと床に座り込む。

二人の背後には…不思議な姿をした、二人の人物。

多分この人達が…精霊なのだろう。

浅黒い肌の精悍な雰囲気のある人と。

そして、もう一人……………

「……………ひかり？」

その少女は……………

私の…死んだ親友にそっくりだった。

しかも…

『銀色の肩くらいまでの髪の毛、青い瞳の女の子』

ひかりが言っていた…そのままの姿の少女。

「でも……………やっぱり…ひかりだよな？これ……………」

どうして？

なんでひかりが…こんなところにいるの？

それに…仁くんも…ゲームに関わってたなんて。

何よりも……

「すず……どうして？」

何で…何も言ってくれなかったの？

睦月さんのことも…知ってたんじゃない。

でも…そうか。

だから……あんなに怒ってたんだ、あの子。

よくよく考えてみたら…そうよ。

あの子のあの怒り方…見ず知らずの人に対する怒り方じゃないわ。

あの子がああいう顔するときは…

あんな風に鼻膨らませて怒るのは…

幼稚園のいじめっ子とか、小学校の男子とか、中等部の先生とか…

嫌いな人の話をする時。

私………何で気づかなかったんだろう。

素足にサンダルをつっかけて、呆然とした気持ちで玄関を出る。  
すると……

遠くからとぼとぼ歩いてくる…すずと仁くんの姿が見えた。

「お…ねえ………ちゃん」

「どういうことなの？」

今にも泣き出しそうな顔のすず。

追及したらかわいそうだって…思ったけど。

「…一体どういうことなの？あなた達と一緒にいたの…あれ、精霊  
でしょ？ねえ………精霊って…ゲームって…一体何なの？あなた達  
は一体、何をしようとしているの！？」

聞かずには…いられないじゃない。

すずは…何も答えてはくれない。

黙って唇を噛んで…俯いた。

「先輩……」

仁くんが心配そうな声で私を呼ぶけど……

いつもみたいに『何でもないので、ごめんね』って……にっこり笑う余裕はない。

仁くんの手を振り払うと……ピシヤリと、自分でもびっくりするくらいの音がした。

「このことがあったから……あなた達は私に、『睦月さんに近づくな』って言ったの？」

仁くんも……バツの悪そうな顔で俯いてしまう。

あの……ひかりみたいな姿の少女は、ここにはいないみたいだ。

そうだ……あの子は一体、何者なんだろう。

睦月さんは……何者なんだろう。

何にも知らないのは……私一人だけだ。

「……わからない」

寒くて、怖くて、悔しくて、悲しくて……気持ち悪くて、吐きそう。

「……お姉ちゃん」

気遣うようなすすずの声に……私は声を荒げてしまう。

「わからないわよ！すすずの考えてること……全然わかんないわ！」

『すすずを泣かせちゃ駄目だよ』

パパは小さい頃、私に優しくそう言った。

『文はお姉ちゃんなんだから、すすずには優しくしてあげなきゃ』

『だって、すすずが……』

それでも、と笑って……パパは優しく私を叱った。

『すすずは文より小さいんだ……知らないことも沢山ある。だからあんな風に、我儘な事したり言ったりするんじゃないかな？文は良い子だから……すすずが我儘言っても、ちゃんとお姉ちゃんらしく、優しくしてあげられるよね？』

……出来ないよ、パパ。

知らないことが沢山あるのは私の方だもん。

文はお姉ちゃんなんだから……

文は良い子だから、良い子でいなきゃ…

そんなの……もう沢山。

もう疲れた。

もう知らない。

すずも仁くんも睦月さんも…勝手にすればいい。

……嫌い。

『汝隣人を愛せよ』

そんなの……出来ない。

私は聖人じゃないもの。良い子なんかじゃないもの。

大嫌い。

気づいたら、私は……

泣きながら…叫んでいた。

「もう私のことは放つといて！すずも仁くんも…大っ嫌い！！！」

12月23日 その1

夢を見た。

その人は一振りの刀を握り締めていて。

刀には血糊がこびりついていて。

着物は返り血で真っ赤に染まっっていて。

手も顔も、浴びた血のせいで真っ赤になっていて。

よく見るとその人は…声も出さずに泣いていた。

頬を流れる涙が返り血と混ざり、ぽたりぽたりと地面に落ちる。

その人はまるで…血の涙を流しているみたいだった。

目が覚めると、びっしょり汗をかいていた。

そういえば…昨夜は何も食べてない。

時計は8時を回ったばかり。

友達との約束は10時なので、出かけるにはまだ早いんだけど…

この所寝てばかりいたので、すっかり目が冴えてしまっていた。

静かに階段を降りると、ママがソファでうたた寝をしながら…

「ママ…風邪引くよ?」

軽く揺すってみるが…起きる気配はない。

仕方が無いので、寝室から布団を持ってきて、掛けてあげると…

ママは気持ちよさそうに、布団の中に潜り込んでしまった。

思わず…顔がほころんでしまう。

「もう…寒かったんじゃない、ママってば」

体調は…昨日までよりだいぶ良かったです。

でも……やっぱり熱っぽいし、頭が重い。

どうしちやっただらう…?と思いつながら、シャワーを浴びて着替える。

冷蔵庫のオレンジジュースが、からっぽの体に浸透するような気がして…ちよっとだけ、元気が出てきた。

ふう、とため息をついて…

すずの部屋を、静かに開く。

寝てるかな…とは思ってたけど。

すずは布団じゃなくて…パソコンを起動したまま、机に突っ伏して寝ていた。

パソコンはスリープ状態になっていたので、下手にいじるのはやめておく。

パジャマ姿のすずに、風邪ひくよ？と声をかけてみるが…起きる気配はない。

ベッドから毛布を持ってきて掛けてあげると、すずは…気持ちよさそうに微笑んだ。

もう…二人揃って、世話が焼けるんだから。

私がいなくなっちゃったらどうするつもりなんだろう。

いくら今より良い暮らしが出来るようになったって、体壊しちゃ意味ないじゃない。

心配だなあ。

……あれ？

なんだっけ？

まあ……いつか。

ふと、人の視線を感じて振り返ると。

すずのベッドの上に…昨日の写メに写っていた、浅黒い肌の男の人が座っていた。

私が見ると…焦った様子で、ふい…と視線を逸らす。

この人…私が見えてないって思ってるのかな？

だったら…声掛けちゃ可哀想かもしれないけど……

「あなた……」

私が声を掛けると…彼は目を丸くした。

警戒心を解こうと思って…につこり微笑んでみる。

「サラマンドラって言うんでしょ？」

彼はしばらく、黙って私を見つめた後…小さく頷いた。

私はカーペットに正座をして、静かに彼に問いかける。

「あなたは…すずの味方なの？」

彼は…こくりと大きく頷く。

「睦月さんは…シルフィードは…あなた達の…敵なのね？」

彼の瞳には一瞬、迷いの色が見えたが…

少し間があつた後、サラマンドラは…こくりと大きく頷いた。

思わず、ため息を漏らしてしまった私を…彼は心配そうに見つめる。

「あの…大丈夫か？」

「ええ…ありがとう。優しいのね、サラマンドラ」

彼は顔を真っ赤にして、ぶんぶん大きく首を振る。

「すずにも…優しくしてあげてね」

「…え？」

「どうかすずのこと…守ってあげてください。それに出来たら…仁

くんのごとも」

そういえば…

「あの…もう一人いた女の子は…誰なの？」

「…ウンディーネのこと…か？」

ウンディーネ…か。

そうね…シルフィードも確か前に『それは多分水の精霊だ』って…

言ってたもの。

「あの子ね…私の大事な友達にそっくりなの」

もう…天国に行っちゃったけどね。

それは言わないで…私はありがとう、と彼に告げて立ち上がる。

「…おい」

「なあに？」

「すず…起こさなくていいのか？」

「うん…寝かしといてあげて」

また帰って来てから…すずとはちゃんと話そうと思っ。

私の気持ち…ちゃんと伝えなくちゃ。

バス停までの道のりで、睦月さんに電話をかけた。残念ながら留守電だったので…メッセージを残す。

「睦月さん…文です。おはようございます。」

昨日おっしゃいましたよね？『後の判断は君に任せる』って…

私昨夜、一生懸命考えたんですけど………  
すうつと息を吸い込む。

早く言い終えないと、テープが終わってしまう。

でも………なかなか踏ん切りがつかなくて。

テープはそこで切れてしまった。

その留守電メモは消去して、もう一度同じところまで言っ

今度は………ちゃんと言えた。

「私…ずすを信じます。私はずすの姉ですから…あの子の味方です。だから…睦月さん、あなたとはもう、メールも電話も出来ません…ごめんなさい」

ぐつと胸が詰まって…最後の数秒で、思いがけないことを口走ってしまった。

「出来たら…私一度、睦月さんに会ってみたかったです」

吹き込んだメッセージを聴いて…さんざん悩んで…結局そのまま残した。

冬空を見上げ、すうつと大きく深呼吸をすると…

冷たい新鮮な空気が肺いっぱいに送り込まれ、何だかすっきりしたような気がした。

自分に言い聞かせるように…小さく呟く。

「よく出来ました…これでいいのよ、文」

友達と会うまでの時間、街のコーヒーショップでココアを飲みながらぼんやりしていた。

ゲームって…目的は何なんだろう？

赤の他人が集まって、傷つけ合って………何の理由もなく、そんなこと出来るかしら。



何か…賞品みたいなものがあるのかな。

それがお金なのか、物なのか……よくわかんないけど。ゲームっていうからには、きっと…ゴールっていうか、最終目的地っていうか…

さすが良く言う、そう……クリア条件がある筈だ。

それは一体、何なんだろう？

ゲームのプレイヤーって…

すと、仁くんと…睦月さん。

他にも…いるのかな？

その時。

ふっと脳裏に蘇ってきたのは…

『炎の精霊サラマンドラ、水の精霊ウンディーネ、土の精霊ノーム、風の精霊シルフィード…』

あの土橋という大学教授の…歌うようなフレーズだった。

『四精霊』って…言ってたな。

ということは……もう一人ずつ、精霊とプレイヤーがいるはずだ。その人は…一体どこにいるんだろう。

私が見なかっただけで、すと達と戦ってるのか、それとも……

「どこかに…隠れてるとか」

店内に吹き込んだきた風に身震いして…はっと…思い出した。

あの……黒いコートの裾。

「…あの人が、きつと」

声はよく聞き取れなかったけど、運転してたし…多分大人の男の人だ。

じゃあ、あの人と睦月さんは……

「ねえねえ、あの坂んとこの行列何!？」

隣のテーブルの…OL風のお姉さん達の話が耳に飛び込んできて…思考は一時中断。

「あれじゃん？ラジオの公開録音…よくやってんじゃん、有名人来たりしてさあ」

「あーそつかあ…でもさあ凄くなかった！？この時間にあんだけ人が集まってることってあんまなくない？何かアイドルとかかなあ…」  
カップに残ったココアをぐっと一気に飲み干して…  
熱くて喉がヒリヒリするのを堪え、立ち上がってお店を出る。  
『先行って場所取つとくね！』  
のりとまゆにそうメールして、私は早足で歩き出した。

正直…人ごみはあまり得意ではない。  
しかも…実はコーヒーシヨップあたりから、だんだん頭も痛くなってきたのだ。

ギャル系の女の子達のお化粧の匂いが…つらい。

「…ねえ、見える？」

まゆが眉間に皺を寄せて尋ねるので…首を振る。

ラジオブースは、黒山の人だかりの…遙か向こう側。

ぴよんぴよん飛んだとしても、いまいち見えそうな気がしない。

のりはこの人ごみに、すっかりやる気をなくしてしまい…どこか近くのお店で、時間を潰しているらしい。

「侮ったね…KEIくん人気を」

「……………うん」

やがて。

キヤーーー！！！！という黄色い悲鳴が聞こえてきて…

どうやら、KEIくんが登場したらしい。

一生懸命背伸びをしてみるが…全然見えない。

しかも悲しいことに…前の方の女の子達の悲鳴にかき消されて、彼の声すら聞こえない。

はあ、とため息をつく。

これだつたら…あつたかい部屋で、ラジオ聴いてた方がよかつたかも。

周囲の熱気と、ポケットに入れてきたカイロの熱と、自分の上がってきた体温で…

ぼーっとのぼせてしまった頭に響いたのは…誰かが私を呼ぶ声。

『文さん…聞こえますか？』

誰だろう？

『文さん……………』

「……………シルフィード？」

「えっ？何？？」

まゆが聞き返してきて…慌てて何でもないの、と首を振る。

なんだろう……………今の。

でも…何でもいいや。

今のが幻聴だったとしても、シルフィード本人の声だったとしても…  
もう私には……………関係ないもの。

何だかよくわからないままに公開収録は終わり。

ごちゃごちゃと人ごみに揉まれていたら…いつの間にか、まゆとはぐれてしまっていた。

「……………どうしよう」

携帯を取り出そうにも…人が多すぎて、ポケットに手をつ突っ込むことが出来ない。

一生懸命体を捻ってみるけど…駄目。

『鈍くさいなあ……………』

そう言って笑う…彼の笑顔が浮かんだ。

あの人…いつつもあるそんな風に言うんだもの。

私個人としては、そんなに鈍くさいつもりはないし…

『あなたが何でも出来すぎるのよ』

そう言ってむくれる私の顔を見て…彼はまた、楽しそうに笑うのだ。  
ごめんごめん…と悪びれる様子もなく、手を合わせてみせながら。

「……………あれ？」

なんだったつけ？

えっと……………そうだ。

携帯電話。

やっとスシ詰め状態を脱出して、コートのポケットから携帯を取り出すと……

メールが一件来ていた。

…まゆだ、きつと。

そう思つて、開くと……

メールは短く…タイトルだけ。

『みっけ!』

突然、伸びてきた手に腕を捕まれ…

私は路地に引きずり込まれた。

抵抗する間も…なく。

びっくりして見ると……

それは背の高い…男の人。

ニット帽を目深に被り、大きな黒いサングラスをしている。

顔が小さくて…サングラスで半分隠れちゃうくらい。

それに肌が白くて……一瞬、外人さんかと思った。

「あ……あなたっ」

しーっと、彼は楽しそうに笑つて、人差し指を唇の前に立てて見せる。

しーっ、じゃ……ないでしょ？

「なっ……あなた…一体っ」

「俺、分かる？」

「そんなの…分かるわけ……」

サングラスをずらして見せてくれた、彼の顔……

嘘……

分かつちやった。

驚きのあまり声も出せず、こくり…と頷くと。

私の手をぎゅっ…と握つて。

「ついて来て………転ばないように、気をつけてね」

KEIくんは………にっこり笑つた。

どこをどう走ったのか…

私は全く思い出せない。

こんな道あったんだ…と感心してしまうような細い路地を、KEIくんはすいすい駆け抜けて行く。私の手を………しっかり握りしめたまま。

好きな人と一緒にいると、胸がドキドキするとか、目の前がバラ色に見えるとか…

いろんな話をいろんな人から、伝え聞いてはいたけれど…

私は………ただただ、呆然としていた。

とにかく、『転ばないように』という…彼の指示だけは守らなければ、と思つて…

その言葉を頭の中で何度も唱えながら…もつれそうになる足で、ただただ必死に走った。

ボタンと車のドアが閉まり、助手席のシートに沈み込んだ時に、初めて…

何だかまずいことになった………と…思った。

その車は、地下にある暗い駐車場の一番奥にとまっており、私と彼以外に人の姿はない。

………なにこれ。

私………どうしちゃったんだろう？

どうしよう………

頭痛いし………

まゆとのりも、きっと私のこと探してるだろうし………

だいたい………

「…シートベルト」

「………えっ????」

「シートベルトして。車出すから」

KEIくんは何でもないみたいにそう言って、私の前に身を乗り出しました。

「えっ!?!と…ちょっと…あのっ」

慌てふためく私を不思議そうに見て…彼は助手席のシートベルトを引っ張る。

金具のはまるカチンという音がして……

わずか20センチくらいの距離で…彼はにっこり、私に微笑みかけた。

「やっと二人きりになれたね」

「……………!?!」

くらくたと…目眩がする。

私……………最近妄想癖があるのかもしれない。

変な白昼夢は見るし、変な独り言も言うみたいだし……

ついに……………こんなにリアルな夢まで見るようになって。

やっぱり…もう一回病院行こう。

と……………思っただが。

不意に携帯が鳴り、通話ボタンを押すと…

『文ー!今どこにいの!?!』

まゆのでっかい声が…頭痛のひどい頭に響く。

はっとして…横を見てみるけど。

そこには首を傾げて、優しいまなざしで私を見つめる…KEIくんの姿。

……………夢じゃないの?

『文ってば!聞いてんの!?!』

「あっ……………ごめん」

『今どこ?あんた放つとくとまた迷子になりそうだから、私達そっち行くから……………』

「……………ごめん」

すらすら口をついて出た嘘に、我ながら惚れ惚れして…そんな自分に大いに恥じ入る。

「今ね…幼馴染の子に偶然そこで会っちゃって…それがすっごく久しぶりの再会でね…『お茶でもしない?』って話になっちゃって…」

だから申し訳ないんだけど…お買い物、二人で行ってもらってもいいかな？」

『……………男？』

ぎくっ…

「えっ……………とお……………まあ……………」

『ふうんそう。男なんだ…じゃ、仕方ないわね』

何何！？文に男って何！？と…後ろではしゃぐ、のりの声も聞こえる。

『明日…ちゃんとは報告しなさいよ！！じゃ、健闘を祈るっ』

「あ…ちよつと」

待って、と言いかけた私の言葉を遮るように…電話は切れてしまった。

どうしよう…『助けて』って…言うべきだったかも。

「友達？」

KEIくんはエンジンを掛けながら…そんな風に私に尋ねる。

「えと……………はあ」

「よかったの？」

「……………まあ」

「…それは良かった」

あの…何度見ても何時間見ても見飽きない極上の笑顔で…KEIくんは私をじっと見つめた。

「友情より俺をとってくれるとは…光栄だね」

趣味はドライブです、とKEIくんは常々言っている。

それだけあって…彼の運転はとても上手だった。

うちのママがあまり得意じゃないだけに…余計そう思うのかもしれないけど。

道を曲がるときも、信号で止まるときも…ほとんど揺れを感じない。左ハンドルの車で器用にハンドルをきり、軽快にギアチェンジをするKEIくんの手つきを、私は惚れ惚れしながら眺めていた。

「…珍しい?」

「……………えっ!?!いや……………」

どうしよう……………失礼だったかも。

「その…うちのマ…いや、母はオートマ限定なので…それに……………運転あんまり得意じゃないんです。『文そつちちゃんと見ててね!』とか『どうしよう縦列出来ないよー』とか……………」

すらすらそんなことをしゃべってしまい…KEIくんは前を向いたままくすくす笑っている。

ネタにしてごめんね……………ママ。

「あのお……………これ……………どこに向かっているんですか?」

外の景色は一変して、車は高層ビルが立ち並ぶ街を静かに走っている。

「え?どこって……………俺んち」

……………!??

ちようと車は赤信号で止まり……………

私は慌ててシートベルトを外した。

「ちよつと……………どうしたの?」

「降りしてください!?!私帰ります!?!……………」

「駄あ目だつて!危ないから!?!……………」

「大丈夫です!降りられます!?!……………」



信号が青に変わるまでの間、さんざん押し問答を繰り返した末……私は結局負け……シートベルトを締めなおし、しょんぼりシートに沈み込んだ。

「別に……」

前を見たまま、気まずそうな顔でKEIくんが呟く。

「変なことしようとか……そういうつもりじゃなくてさ。ただ……うちだったら周り気にせず、ゆっくり話が出るかなって……そう思っただけなんだけど」

「………すみません。でも………体調もあんまり良くないので……帰りたいです」

こんなに自己主張をする文は……我ながら珍しいと思う。

だって、目の前にいるのは……大好きなKEIくんなのに。

「あのお………あなたって………本物ですよね？」

「本物って？」

「その………KEIさん………です………よね？」

「そうだけど」

何気なく答える……KEIくん。

「私のこと………どなたかと………まちがってらっしゃいませんか??」

「いや?だって………不知火文ちゃんでしょ?」

「………そうですね」

何で私の名前知ってるの?

いや………さっきママの話したとき名前自分で言っちゃったからだ。

でも………いや、やっぱり苗字は言っていないもの。

意を決して………KEIくんの顔をじっと見つめる。

「あの………何で私の名前、ご存知なんですか!??」

安全運転でまっすぐ前を見たまま………KEIくんは楽しそうに目を細めた。

「俺………名前だけじゃなくて、色んなこと知ってるよ」

そう言っ………私の通う高校の名前を口にする。

それに…私の家族構成も。

気づくと、車は私の家の近所を走っていた。

「あの…うち近くのので、この辺で…」

「いいよ、家の前までつけるから。外は寒いから、風邪ぶり返したら困るでしょ？さつきも散々寒空の下、お待たせしちゃったみたいだし」

何でそんなこと……何から何まで知ってるんだろう。

優しい彼の提案に…私はもう……

ただただ…頷くしか無い。

車はうちの真正面に、音も揺れもなく静かに止まる。

ありがとうございました、と頭を下げ、シートベルトを外そうとするが…

手が震えて…うまく金具が外せない。

……どうしょ。

焦る私を見て…KEIくんは可笑しそうに笑って、外すのを手伝ってくれた。

「もう…鈍くさいなあ」

どきんと…心臓が高鳴った。

彼はまた…15センチくらいの距離で、真剣なまなざしで私をじっと見つめ…

私の唇に……そつとキスした。

びっくりしすぎて……息が出来無い。

私が転がるように車を出ると、KEIくんは車の窓を開け、文ちゃん…と呼びかける。

「また…会ってくれる？」

「………わっ…わかり…ません………」

「そっか…」

ちよつと寂しそうなその笑顔に…ぎゅつと胸が締め付けられる。

「でも…また会えると思うんだ。文ちゃんが望むと望まないに関わらず…絶対にね」

「……………どうして…そう…言い切れるんです…か？」

「だって……………俺と君とは、出逢う運命だったんだから  
眩しい笑顔に目眩を起こしそうになりながら…

その車が走り去るのを、呆然と眺めていた。

指先でそつと…唇に触れてみる。

「……………ファーストキス……………だったんだけどな」

KEIくん……………

『鈍くさいなあ』と笑ったあの…声。

『文ちゃん』と呼ぶ……………あの声は。

はつとした。

……………そうだ。

何で私、今まで……………気づかなかったんだらう。

あの声は……………

「睦月さん……………」

リビングの机に突っ伏して、お昼のワイドショーを流しっぱなしに  
していた。

熱はまた上がってしまったって、38度2分。

さすがにこれだけ続くと気味が悪くて…ちよつと心細くなる。

睦月さんに電話したら…『心配しないで』って、笑ってくれるかな。

睦月さん……………そうだ。

KEIくんって…睦月さんって名前だったんだね。

昨夜、聞き覚えのある声だなぁって思ったけど…

当たり前だよな…耳にタコが出来るくらい、繰り返し聴いてた声だ  
もの。

考えてみたら…あのお見舞いのチョコレートだって。

睦月さんは『私の好きなチョコレート』をくれたわけじゃなくて…

何がいいか分からなくて…『自分の好きなチョコレート』をくれた  
んだ。

「何で私…気づかなかったんだらう」

テレビには、さっきの公開収録の映像が映っている。  
ラジオブースでにつこり手を振るKEIくんは…黒のジャケット姿  
だった。

あのジャケット、すっごく似合ってると思ったのに…私、ちゃんと  
伝えられなかった。

『また…会つてくれる？』

睦月さん……………

目からは、いつの間にか…大粒の涙が零れ落ちていた。

「……………出来無いよ…睦月さん」

あなたはすずの敵なんでしょ？

あなたはすずや仁くんを傷つける人なんでしょ？

私は…すずの味方だもん。

サラマンドラにも約束したもの。

だから……………

ガチャリと玄関の鍵の開く音がして…

慌てて洗面所に走り、顔を洗う。

そして…おかえりなさい、とすずを迎える頃には、すっかり涙も乾  
いていた。

「……………ただいま」

すずは…怯えているみたいに見える。

可哀想に。

私が昨夜あんな風に…怒鳴ったりしたからだ。

すずだつて…悪気があつてやつてたんじゃないんだから。

すずなりに一生懸命考えて…戦つていただけ。

だから……………私はもう、睦月さんのことは振り返らない。

「ママね、今日もちよつと遅くなるんですつて…だから、夕ご飯一  
緒に作らない？」

「ママ…今朝ソファで寝てたけど」

……………すずにも見られてたんだ、ママ。

『ごめんなさい！寝坊したから帰りちよつと遅くなつちゃうかも！

？』

さつき、うちに帰り着いてしばらくして…そんなメールが着ていたことに気づいた。

ほんと…頑張り屋さんでおっちょこちよいで…ママらしい。

思わず苦笑してしまう。

「それがね…お昼過ぎに目が覚めて、慌てて会社に行ったらしいわよ。朝起きなきゃいけないかったんなら、ちゃんと私達に起きる時間教えててくれればよかったのにな」

これが私の家族だもの。

… たった3人だけの家族。

睦月さんより何より…一番大事な宝物。

さつき睦月さんと街の路地を駆け抜けたスニーカーに、足を突っ込んで…

「お買い物行こ、すずも一緒に来てくれるでしょ？」

困り顔で立ち尽くしているすずに…私は笑顔でそう声をかけた。

今晚のメニューはカレーライス。

すずは『お姉ちゃんの作るカレーの方が、ママの作るカレーより数段美味しい！』と、いつつも褒めてくれるのだ。

だから…今日は仲直りのしるしに、カレーを作ってあげようと思っ

た。

ママとの違いは…そうだな。  
カレールウを何種類かブレンドすることか、チャツネと加えることとか…そんな所かな。

一番大切なのは玉ねぎの炒め方だと思うけど…

ママはいつも忙しいから、なかなか弱火でじっくり炒める時間がないんだと思う。

それを…今日は、すずに教えてあげようと思った。

振り返ると…傍らにすずの姿はなく。

振り返ってみると、何かぼんやり考え込むみたいに…野菜売場に立

ち尽くしていた。

「ごめん…ぼーっとしてて」

私が声を掛けると、はっとした顔で走ってきて、そんな風に…気ま  
ずそうにつぶやく。

「疲れてるんじゃない？昨日ちゃんと、お布団で寝てなかったから  
ぎよっとした顔をして…すずはこくりと頷く。

しまった…これはちよっと失敗だったかな。

レジで精算を済ませ、スーパーからの帰り道。

夕焼けが…とても綺麗だった。

「久しぶりだね…こんな風に、二人でおつかい行くの」

「……………うん」

『すずも一緒に行く！』

小さい頃…すずはそう言い張って、いつも私のお遣いについてきた。  
でも、何かの拍子にすぐ、はぐれてしまい…

お姉ちゃん！と泣いているすずを、私も半泣きになりながら…探  
し回ったものだ。

この前みたいに迷子になっちゃうでしょ、と私が諭しても…

『大丈夫だもん！すず、もうお姉ちゃんなんだから！』

自信满满でついて来て……やっぱりその日も迷子になった。

「大きくなっただね…すず」

「……………うん」

大事な大事なすず。

何にも代え難い…私の妹。

「私ね…サラマンドラとお話したわ。もしかしたら…もう、聞いて  
るかもしれないけど」

「えっと……………うん」

目を丸くして、無言で頷いていた…サラマンドラという精霊。

見た目は私よりずっと大人みたいだったけど…

あのどこか……………すずに似ている。

「内緒にしてねって言ったんだけどな」

「あの…でも…何話したとかは聞いてないよ？なんていうか…来たよってことだけ」

「そっか……………優しいのね、サラマンドラって」  
優しそうで…素直そうな……………炎の精霊。

彼ならきつと…すぐのこと…ちゃんと守ってくれるだろう。

それに…仁くんもいるんだし。

仁くんも、すつごくしっかりしてるもの。それに……………

ひかりに良く似た…あの水の精霊。

あれだけそっくりなんだもの。きつと天国のひかりが…二人を守ってくれる。

「私ね…睦月さんにちゃんと話したんだ……………」  
「あなたにはもう、これつきり連絡はしません」って

「……………え!？」

「でもそれね…今日のことなの。もう連絡取ってないなんて…嘘ついちゃってごめんね」

すずは…泣きそうな顔で、私の腕をぎゅっと掴む。

それに、もう一つ……………私もちゃんと話さなきゃ。

「私ね、今まで言えなかつただけ…前に一度、シルフィードに会ったことがあるの」

すずは、何も言わず…涙目で私を見つめている。

「最初に熱出して寝込んだ日にね…お見舞いに伺いますっていきなり現れて」

『…チョコレートは、好きですか?』

あの時の電話のやりとり…今思い出しても、顔から火が出そうになる。

「お見舞いにチョコレート持ってきてくれたの。覚えてるでしょ? 私が前買いに行つてさ…すずは『そんな高いチョコ、味もわかんないのに勿体無い!』って怒られたの」

「……………睦月に……………会つたの?」

動揺しているすずを見て……………

そっか、すすも知ってたんだ…と思った。  
でも…言えなかったんだろうな。

そんな事話したら私が傷つくって…優しいすすは思ったに違いない。  
「ファン失格だよね…私、KEIくんの本名なんて…知らなかったもの」

すすは黙って俯き……か細い声で聞く。

「……………いいの?」

「何が?」

「睦月に……………もう…会わないって……………」

ぎゅっと胸を締め付けられるような気がしたけど……………堪えて、にっこり頷く。

「だって…すすは私の妹だもん。私はずっと、すすの味方なんだから…すすを傷つけようとする人と、一緒になんていられないわ」  
すすは、小刻みに震えて……………泣いていた。

「……………好き……………だったんじゃないの?あいつのこと……………」  
……………好き?

そんなこと…ちゃんと考えたこと無かったな。

面白いこと聞くなあ……すす。

すすの柔らかい髪を撫でながら…笑う。

「うーん、そうだなあ……………正直…ちょこつとだけ、好きだったかもしれないな……………でも、いいのっ」

だって、私にとってはすすの方がずっとずっと大事だもん。

「どうするの?すす…ゲーム…続けるの?」

すすは凍りついて……………

今までで一番小さな声で……………ごめんなさい、とつぶやいた。

「今夜も…出かけるの?」

すすは……………

泣きながら…小さく頷く。

叱ってるわけじゃ…ないんだけどな。

「行くっっ」



すずの肩をぽん、と叩いて、私は明るい声で言う。

「じゃあ、しつかり夕ごはん食べなきゃね。気をつけてね、すず……」

「ごめんね……心配かけて」

……………もう。

「本当だよ……バツとして、今日はカレー作るの手伝ってね。すず一人でも作れるように、ちゃんと作り方を覚えること！」

「……一人でなんて……作れないよお」

不安そうに口を尖らせるすず。

小さい頃は『一人で出来るもん！すずはお姉ちゃんなんだから！』って……言つてたくせに。

「そんなことないってば！慣れよ、慣れ」

元気づけながら……また、さっきの考えが脳裏によみがえる。

私がいなくなっちゃったら……どうするつもりなんだろう？

今みですつと、全部私がやってきちゃったからなあ……

この子はきつと……途方に暮れてしまっただろう。

「私がいなくなっても……ちゃんとお手伝い出来るようにならないと」

「……お姉ちゃん？」

「なあに？」

「『私がいなくなっても』って……何？」

……………あれ？

「私……そんなこと言った？」

「え……？……えつと…………ごめん、気のせいかも」

「もう……変なすず」

私は小さい頃みたいに、すずの手をしっかりと握りしめた。

はぐれないように、離さないように……しつかり。

さっき睦月さんが……そうしてくれたように。

すずは、サラマンドラと一緒に、窓からうちを飛び出していった。すこいなあ……空、飛べるんだ。

「気をつけてね……」

手を振る私に、二人はにっこり笑って手を振りかえしてくれた。  
ママは姉妹合作力レーを大喜びで平らげて、疲れていたのかすぐ寝てしまった。

暗くて静かな部屋に戻る。

『好きだったんじゃないの?』

「……………どう…だったのかなあ」

わかんないな。

優しい人だなんて…思ってたし。

一連の怖い夢のこととか…睦月さんのお陰で、大分気が楽になったのは事実だ。

でも……………睦月さん。

一体どういうつもりで、私に近づいたりしたんだろう?

私のこと……………利用しようとしたのかな?

ゲームが有利に運ぶように……………

「俳優さんだもん…親身になって見せることなんて、そう難しいことじゃないよね」

その時。

はっと…息を呑んだ。

机の上の携帯が…点滅している。

……………誰だろう。

いや……………多分。

メールを開いてみると…

「睦月さんだ……………」

タイトルは『今日はありがとう』

『驚かせて本当にごめんなさい。でも…今日は一緒に過ごさせて幸せでした』

気づいたら、私は……………ぽろぽろ涙を流していた。

『こんなこと言っても、信じてもらえないかもしれないけど…

俺、文ちゃんが好きです。

さっき運命って言ったけど…

運命なんてなくたって、俺は本当に君のことが『

最後まで読まずにパタンと携帯を閉じ……………

私は立ち上がり、コートを羽織って階段を駆け下りた。  
ぐいっと袖で涙をぬぐい…走り出す。

熱があつてふらふらしてたけど……………構わなかった。

…止めなきゃ。

3人を……………絶対、止めなきゃ。

12月24日 その1

異教の神にこの身を捧げるということ、神様はお許しにならないでしょうか？

進んで命を投げ出すことは、神の教えに反しますか？

私が聞くと。

神父様は困った顔をして、私にも分かりません…とおっしゃいました。

でしたら私は、キリシタンをやめようと思います。

私がキリシタンのままでいて、神様がお怒りになったとしたら、神父様や私の家族に迷惑がかかってしまいますから。

神父様は、そんな私におっしゃったのです。

神のご加護がありますように、と。

キリシタンをやめる、と申し上げたばかりなのに。

おかしい神父様だなあと思いました。

「…どこだろう？」

とりあえず、家を飛び出してはみたものの…

すず達がいそうな所なんて…見当も付かない。

暗い道には冷たい風が吹きすさび、人の気配は一切無い。

パジャマの上にダツフルコートという、あまりにやっつけな自分の格好に…大いに後悔。

「でも…しょうがない」

うちの前の分かれ道。

右か左か……

そもそも…走っていける距離なのかしら。

「しょうがないしょうがない。きつと…大丈夫」

自分に言い聞かせて、また走りだそうとするが…

ふらっと目眩がして………傍の壁に両手をつく。

ズキンズキンと頭に響いて…思わずうずくまってしまう。  
ふるふると小さく首を振って、顔を上げた。

「あれ……………」

目の前は…湾岸の、高層ビル群だった。

「ここは……………」

この前テレビ電話に写っていた、大きな橋と観覧車が遠くに見える。  
私、どうやって…ここまで来たんだろう？

さっきまで…うちの近所にいたはずなのに。

冷たい風が吹き抜けて…ぶるつと身震いする。

「そうだった…すず」

すずと仁くんを探さなきゃ。

熱がまた上がってきたらしく、頭がぼーっとした。

ふらふらしながら…ビルの間を走り回る。

すずー、仁くん、と叫びながら…

「もう…どこ行っちゃったんだろう？」

ここには…いないのかしら。

でも…まるで吸い寄せられるみたいに、ここまでたどり着いたのだ。

きつとここに…みんなはいる。

口の所に両手を当てて、メガホンみたいな形をつくり。

大きく息を吸い込んで…叫んだ。

「すずー！！」

すると……………」

「お姉ちゃん！！！！」

すずの声だ。

慌てて声の聞こえた方へ走って行き……………」

体が…凍りついた。

「睦月さん……………」

その光景は……………絶対に見たくないと思っていた…そのままの光景  
だった。

血まみれで倒れるシルフィード。

すすまみれになっている小人のような生き物は…土の精霊なのだろうか。

サラマンドラと、ひかり…に良く似たウンディーネと、仁くんは無事みたい。

今日はすす達が優勢だったらしいことが…その光景からはうかがえた。

おそらく……私が駆けつける、ほんのちょっと前までは。

睦月さんはすすを拘束し、首元に白く光る刀を突きつけている。

恐怖に青ざめたすすの顔。

睦月さんは……ものすごく驚いたような目で…私を見つめた。

睦月さん……

でも……

私は顔を上げて、真っ直ぐに彼の目を見た。

「すすを離してください。その子は…私の妹なんです!」

「……文ちゃん」

いたずらを咎められた小さな子供みたいな目で…彼は私の名を呼ぶ。ぎゅっと、胸が締め付けられるような気がしたけど…

負けちゃ駄目。

「ゲームっていうのが、何なのか…私は全然わかりませんが…もうやめてください!これ以上、私の大事な人達が傷つけあうの…見られないんです!」

すすの味方だって、私はさっき…そう決めた筈だった。

「メール見ました。あれ…どういう意味ですか?」

『文ちゃんが好きです』なんて……

口では、何とでも言えるじゃない。

なのに私…何でこんなに動揺してるんだろう。

「この期に及んで…私のこと…からかっってるんですか!?!」

「…文ちゃん、それは……」

必死な彼の表情に、身を引き裂かれるような気がして…耐えられない

くて。

私は地面に視線を落とした。

「睦月さんは…一体私をどうしようっていうんですか！？すずや仁くんと戦うのに、私を味方につけておけばゲームを有利に戦えるって…そういうことですか！？」

そうだよね。

普通に考えたら…それ以外ないじゃない。

悔しくて悲しくて…いつの間にか、私は涙を流していた。

「私のこと…利用したんですか！？」

「文ちゃん！？」

私の名前をそんな風に…優しい声で呼ばないで欲しい。

だって……

「本当は分かってるんです私！自分がどれだけ馬鹿か…あなたのこと、本当に良い人だって…思ってたんです。睦月さんはきっと、私のこと守ってくれる、優しい人だって……」

すずが怒鳴られても、仁くに諭されても…信じてたの。

いいえ……多分……

私はまだ…睦月さんを信じたいんだと思う。

だから……

「違うんだ、文ちゃん！そうじゃなくて……」

私の言葉を否定しようとする、彼の気持ちは本物だと…私は信じたいんだと思う。

「でも…騙されてたってわかってても…やっぱり、嫌なんです！あなたが…すずや仁くん達と戦うの…見てられないんです！！！」

それが私の……本当の気持ちだった。

睦月さんはぐつと唇を噛んで、俯き……

すずを…解放してくれた。

「不知火！」

地面にへたり込むすずを、駆け寄ってきた仁くんが、しっかり支えてくれている。

睦月さんは、私の顔をじつと見つめて…小さくつぶやいた。

「ごめん……………」

まるで…親にしかられた子供みたいな顔。

あの時と…………同じだ。

いきなり彼に抱きしめられて…

びっくりして…息が止まるかと思った。

何するの？

掠れる声で尋ねる私の唇を自分の唇で塞いで…

彼は真剣な顔で私を見つめた。

人柱って、綺麗な体じゃなくちゃいけないんだろ。

だったら、そうじゃなくなればいいんだ。

そしたら、お前は…犠牲にならずに済むんだから。

はっとして…

慌てて彼の腕を振りほどこうともがいたけど、どうやっても逃げ出すことは出来なくて。

抵抗出来なくて、怖くて、怖くてたまらなくて。

私は気づいたらぼろぼろ泣いていた。

はっとした顔で、私の着物にかけた手を止め…

ごめん、と彼は小さくつぶやいた。

変なこと言って…怖い思いさせて…ごめんな。

私を胸に抱きしめて…彼も押し殺した声で泣いていた。

いいの…とつぶやいて。

私はその温かい胸に、顔をうずめた。

幸せだなんて…思った。

その時が…生まれてから今日までで一番…幸せだった。

これは何だろう？

何でそんなこと…思い出すんだろう？

…思い出す？



これは私の記憶なの？  
でも……………そんなこと、今はどうでもいい。  
私は睦月さんに出会えて…幸せだった。  
それだけは彼に…伝えなくちゃ。  
「睦月さん…私……………」

その時だ。

「お姉ちゃん！！！！」

すずの悲鳴が聞こえて…

街灯の明かりを遮る黒い影が…上空を覆った。

はっとして、見上げると。

巨大な岩が…私を押し潰そうと、直ぐ目の前まで迫っている。

文ちゃん！

睦月さんの声が…遠くに聞こえて。

真っ白な…真っ白な光の中に……………

吸い込まれた。

とても暖かくて、遠くに讃美歌を歌う声が聞こえて。

ぼんやり周囲を見回すと……………

さっきの大きな岩は、砕けて細かい砂になり…空中にさらさら舞い散った。

音も無く…それはわずか一瞬の出来事で。

安心して…眠くなって…

目を閉じる。

ぼんやりした頭の中で…

讃美歌が聞こえた。

神父様がよく話してくださいました、異国の大きな教会の中で。

私は神様の十字架の前に跪いていた。

首が痛くなるくらい高い天井を見上げると。

そこには色とりどりのガラスがはめられていて、救世主様の誕生の光景が描かれていた。

重厚なパイプオルガンの調べと、天使の歌声。

こんなもの…今まで見たことも聞いたこともなかったのに。

こんなに美しいものがこの世にあるなんて、私…知らなかった。きつと……………

神様が、頑張った私にご褒美として…見せてくださったのね。

気がついたら夜が明けていて。

私は自分のベッドに横になっていた。

起き上がって…ズキンと痛む頭をかかえる。

「夢…見てたのかなあ」

でも…

ふと見ると、ベッドの下のカーペットに布団を敷いて、毛布にくるまるはずの姿があった。

「はず……………」

きつと心配して…傍にいてくれたのね。

「大丈夫？お姉ちゃん……………」

眠そうに目をこすりながら…はずは尋ねる。

「まあ…何とかね」

いや……………

本当は、この数日で一番…悪い。

寒気がするし、頭はガンガンするし…

これ…本当に風邪なのかなあ。

やっぱり…もう一回病院に行かないと。

でも……………その前に。

すずに、聞いておかなきゃならないことがあった。

「ゲームって…何なの？」

すずは困ったように眉をしかめて……………

ぼつり、ぼつりと…話してくれた。

大昔。

異国から来た精霊使いが『賢者の石』という不思議な石を使って、ホムンクルスと呼ばれる人工生命体を作ろうとしたのだそうだ。

しかし、実験は失敗してしまい…

代わりに起きたのは…不思議な出来事。

『四精霊』と呼ばれる…四体の精霊が、どこか別の世界から召喚されてしまったのだ。

精霊使いは四つに砕けた『賢者の石』を、四体の精霊にそれぞれ渡し。

『四つの欠片を一つにすれば、高位の精霊が召喚され…呼び出した人間の願いを聞き入れ、叶えてくれる』

『お前達の使命はそれぞれの石を守ること。眠っていた四体の精霊が目覚めたとき、この石をかけたゲームが始まる…相性のいい人間を『パートナー』として、2人一組で石を守るために戦え』  
そんなことを話したのだという。

「つまり……あなた達は…ゲームの勝者になって、その…賢者の石を一つにする為に…あんな風に戦ってるってこと？」  
んー…と、まずは首を捻ってみせる。

「別に……積極的に勝ちたいわけじゃないんだけどね…睦月が何か変なこと企んでるんじゃないかって……だから、あいつが勝者になって石を一つにするっていうのを…阻止しなきゃって思ってたさ」  
まずは一生懸命な目で、真っ直ぐ私を見つめた。

「サラマンドラも、ウンディーネもね…それに、水月も私も…別にゲームに勝って願いを叶えて欲しいなんて、そんなこと思ってるわけじゃなくて……」

その『賢者の石』を奪われると…精霊達は消えてしまうのだという。  
…やっと、納得した。

だから……

精霊達を守りたくて、すずも仁くんも…一生懸命戦ってたんだ。

「ゲームって……引き分けには出来ないの？」

「…え？」

「勝者を一人に決めなきゃならないのかなって…だって、四体の精霊が石を守らなきゃならなくても、賢者の石を一つにしようって思わなければ…石は四つの欠片のまま…精霊も消えてしまうことはないんですよ？」

どの精霊も他の精霊の石を欲しなければ、そもそもゲームという戦い自体…起こりえないんじゃないだろうか。

「でも……陸月は実際一つにしようって企んでるわけで…ゲームを引き分けに出来るのかどうかは…『ゲームマスター』にしかわからないし」

『ゲームマスター』って…

「土橋って大学教授なんだけど…あの…こないだ講演会に来てたじゃない？」

はっとした。

あの…『民俗学研究室 教授 土橋研二郎』って…名刺の人。

「あのおっさんがゲームの審判なんだって。勝ち負けを決めるのはあいつみたいで…」

『もし何か聞きたいことがあったら…』

彼は確か…そんなことを言っていた。

「聞いてみたら…いいじゃない」

私が言うつと…

すずは不快そうに眉をしかめた。

「だって…私あのおっさん、何か好きになれないんだもん。胡散臭いっていうかさ…」

それに…と、すずは難しい顔で私を見る。

「陸月が………」

「陸月さんは……勝ちたいって言ったの？」

それなら…まずすべきは、陸月さんを説得することだけだ。

「……………あれ？」

はっとした表情で、すずは私の顔をじっと見て…

「あれ??？」

もう一度…首を捻る。

「どうしたの？すず……………」

「いや……………あのね

12月24日 その2

『俺の目的は……ゲームの勝敗とか、祈願成就とか……そんな所にはない』

睦月さんは……そんなことを言っていたらしい。

『けど……他のペアを勝者にする事だけは……絶対に出来無い』  
やっぱり睦月さんも……

『引き分けでも構わない』っていうことじゃない。

『誰も勝者にならなければいい』わけで……

だとすれば……

彼は何故、ゲームを仕掛けたりするのだろう。

ぼんやりしていたら……いつの間にか、終礼が終わってしまっていた。

「あれ………？」

「あれ？じゃないでしょー、文!？」

のりとまゆが……友達数人を引き連れてやって来た。

そういえば……今日は補習の最終日で、授業もお昼までなんだった。

「昨日……どうだったの!？」

「……昨日？」

まあたとぼけちゃって……と、のりが楽しそうに笑う。

「お・さ・な・な・じ・み・さん!」

……あ。

思わず顔を赤らめた私を……彼女たちが見逃すはずも無く。

「ほーら何かあったんじゃない!報告するって言ったでしょ!？」

『幼馴染に会った』なんて……

何で私……そんなこと、言ったんだらう。

他に何とでも、言い訳出来たはずなのに。

私……どこかで睦月さんに会ったこと……あるのかしら。

でも……KEIくんの知る限りのプロフィールでは……そんなことありえない。

『出逢う運命だったんだから…』

彼は……………何でそんなこと…言ったんだろう？

私に近づいたのはゲームに利用するためじゃないって…すごく一生懸命否定してた。

あんなに傷付いたような顔して。

大丈夫かな…睦月さん。

私……………睦月さんのこと、傷つけちゃったかな。どうしよう。

気づいたら私は、ぽろぽろ涙を流して…

ぎよっとした様子で、まゆが私の顔を覗き込む。

「文！？ちよつと…どうしたのよ！？そいつに…何かされたの!？」

「……………んーん」

心配そうに見守る友人達を安心させようと…精一杯微笑んでみる。

「ちよつとね…喧嘩しちゃって」

睦月さんに…謝ろう。

彼の本当の気持ち、どこにあるのかは分からないけど…

とにかく……………もう一度、彼とちゃんと話をしようと思った。

そうは思ったものの…

「睦月さん…どうやったら会えるんだろう?」

正門を出て、とぼとぼ歩きながら考えてみるけど…

テレビ局?それとも…ラジオ?

ドラマや雑誌の撮影だったら、きつと…どこかのスタジオなんだろうし。

見当もつかない。

しかも……………熱は下がる気配が無いし。

「風邪うつしちゃうと困るよなあ…」

KEIくん…年末年始もきつと忙しいもん。

とりあえず…いつもみたいにメールしてみても…

「あーやちゃんっ」

ぎよつとして…

私は振り返ると同時に……

彼の手を掴んで、全力で駆け出した。

「ちよつと…どこ行くの!？」

「わかりません!けど…ここはまずいと思っんです!…!」  
とりあえず、人気の無い路地に駆け込んで……

ふう、とため息をつく。

と、くらくつと目眩がして……

「…………おつと」

睦月さんの腕に…抱きとめられた。

離れようともがくが…離してもらえる気配はなく。

細い路地には、人が通りかかる気配もない。

「お仕事…………お休みなんですか?」

「いや…そうじゃないけど」

楽しそうに笑う睦月さんは…昨日みたいに黒いサングラスをして、  
キャップを被っている。

「空き時間出来たから、会いに来ちゃった。今日はクリスマススイブ  
だし」

「…………はあ」

一見華奢な体つきだけど…意外と筋肉質っていうか……

あったかいダウンの中に抱きしめられて…心臓が破裂しそうだった。

「でも私…………行かなくちゃいけない所があるんです」

逃げ出したい気持ちで…

咄嗟に口をついて出たのは…その言葉。

「今日はクリスマススイブなので…教会のミサに参加しないと」

ミサには…明日も行くから、今日は行かなくてもいいんだけど……

「早く行かないと遅刻しちゃうんです。だから…また今度」

ちゃんと話しようって思ってた筈でしょ!?文。

しかも…………また今度とか言っちゃったし。

まだ睦月さんが敵か味方かもわかんないのに……



とにかく…私の言動は何もかもちぐはぐだ。

「……………そっか。じゃ、仕方ないね」

寂しそうに笑って、小さくため息をつく睦月さんに…胸がぎゅっと苦しくなる。

「……………お忙しいのに……………来ていただいたのに……………すみません」

昨夜はあんなにはつきり、自己主張出来たのに…

駄目だなあ…私。

「じゃあさ、教会まで送らせてよ！近くに車停めてあるから」

「……………え？」

教会は……………ただの口実なんだけど。

「行く！」

昨日みたいに私の手を握り。

嬉しそうに彼はそう言って…笑った。

この車……………

前…テレビ電話に映ってたのと同じ車だ。

窓の外の風景をぼんやり眺めながら…ぼんやりそんな事を考えていた。

あの時助手席に座ってたのは…睦月さん。

運転してた……………あの黒いコートの人は…一体誰？

「信心深いんだね…文ちゃんは」

睦月さんの言葉に動揺して…慌てて答える。

「えっ…いえ……………そんな…ことは」

「変わらないな…昔と」

昔…って。

「私…どこかで……………睦月さんとお会いしましたか？」

赤信号で車が停まり。

睦月さんは嬉しそうに微笑んで、私を見た。

かあつと顔が…熱くなる。

「文ちゃんの見ると、怖い夢ってさ」

睦月さんは私の質問には答えず…また前を向いて、アクセルを踏んだ。

「どんな夢？」

「夢の…内容……………ですか？」

「今までちゃんと、聞いたことなかったなって…思ってた」

「えーと……………実は…思い返すと実に…取り留めのない夢で……………」

どんな夢だっけ……………  
えっと……………

そんなに良い子でいなくなっちゃっていいんだよ。

父さんは泣きながら…そう言った。

死ぬのは嫌だ、人柱になんてなりたくないって…

お前が泣いて一生懸命すがれば、皆さん分かってくださるさ。

川の神様なんてもん、いるわけないんだ。

姿を見た人もいない。神主様だってそうさ。

父さんは、お前の命と引換えに土地なんでもらったってちっとも嬉しくないよ。

貧しくても何でも…お前がいて、家の手伝いしてくれて。

にこにこ笑ってうちに来てくれる方が、父さんは幸せなんだからね。でも……………

それじゃあ、家族みんなが食べてくことなんて出来ないわ。

お爺ちゃんやお婆ちゃん、それに父さん母さん、それに沢山の妹や弟達。

みんなにとつて、本当に幸せなのはどっちか、一生懸命考えた。

私が大きなお家にお嫁に行けば、豊かになって幸せになれると思ってたのに。

それが出来なくなっちゃった今では…

親孝行する方法は、他には無いって思ったの。

私がいなくなったら……………

最初はちよっとは寂しいかもね。

でも…きつと、病気で弟が死んだ時と一緒によ。  
いい思い出だけが胸に残って…いい具合に辛い思い出は忘れていく  
の。

だから…父さん、母さん。  
そんなに泣かないで。

「……………文ちゃん？」

睦月さん呼びかけられて…はつと我に返る。  
心臓がドキドキしていた。

まただ……………変な夢。

……………そうそう。

こういうのをうまく、説明出来れば…

「私…何かわかんないんですけど、良い子でいなきゃいなきゃって

……………そんな意識が強いらしくて」

今思い出した夢の前置きとして…そんなことを口に出してみる。

「そうなんだ……………」

「だから…多分深層心理の影響で、そういう夢を見るんだと思うん  
ですが」

「で……………どんな夢？」

「あつ…そうですよね！？えっと」

……………あれ？

「……………忘れちゃいました」

どうしたんだろう？

忘れっぱいなあ…最近。

また笑われちゃうかな…と思ったけど。

睦月さんはどこか真剣な表情で…真っ直ぐ前を見つめている。

「その夢にさ……………」

彼が口にした…その名前。

初めて聞く名前なのに…

何故かすごく…懐かしかった。

「その人が…何か？」

「いや……………そいつも……………夢に出てきたりするのかな…って」  
「……………わかりません」

夢の中の登場人物は、殊更に相手の名前を呼んだりはしないから…  
「でもね……………睦月さんは時々出てきます」  
はつとした顔をして…

睦月さんは前を向いたまま…聞き返す。

「俺？」

「はい。睦月さんはいつも優しくって…鈍くさい私のこと、いつも助けてくれるんです」

「…鈍くさいの？文ちゃん」

……………そう…聞かれちゃうと。

「自分としては、そういうつもりはないんですけど…何故かそんな風に言われちゃって…友達にも『頼りない』って言われるし……………

睦月さんもよく言ってたでしょ？『鈍臭いなあ』って」

「……………『よく』？」

……………あれ？

「そう…ですよね？私……………睦月さんに会ったの…まだ二回目なのに」

変なの。

「きつと、夢で沢山会ってるから…そんな風に思っただと思います」  
でも……………そうだっけ？

あれは…睦月さんだけど……………睦月さんじゃない気がするのだ。

夢の中の私が…私じゃないように。

でも…うまく説明できないから、それは言わないことにする。

「実は私……………ずっと…ファンだったんです、KEIくんの」

一生懸命話す私の声に、じつと耳を傾けながら…

「ドラマも毎回チェックして、雑誌も切り抜いたり、特にラジオが大好きで！あんまり一生懸命見てるから、夢にまで出て来ちゃうのかも…って……………なんか気持ち悪いですね、私…」

時々目を細めて笑いながら相槌を打つ、睦月さんの姿は……  
やっぱりどこか……懐かしくて。

嬉しくて、居心地がよくて、それにどこか……悲しかった。  
教会の前に車が停まり。

「……………泣かないで、文ちゃん」

いつの間にか頬を伝っていた一筋の涙を…睦月さんは優しく拭って  
くれる。

「何も心配いらないよ…君のことは絶対……………俺が守るから」  
につこり笑う睦月さんに…

言いたい事…沢山あったはずなのに。

「前にも…約束しただろ？」

私は胸がいっぱいになってしまい…黙ってこくりと頷いた。

「奇遇だね…こんな所で出会いは…」

教会で声を掛けられて…

「君もクリスマスチャンだったとは…だからクリシタンにも、興味を持  
っていたのかな？」

驚き過ぎて声が出なくて…私はただ、頷くことしか出来なかった。

土橋先生は、せっかくだからそこでお茶でも…と私を誘う。

「それとも、次の機会にした方がいいかな？顔色が優れないようだ  
し…」

「いえっ…大丈夫…です。是非」

『土橋がゲームマスターだ』って…

確かすずは、そんなことを言っていた。

すずは彼のこと、苦手だって言ってたし…だから私が聞かなくちゃ、  
と思ったのだ。

ゲームのことを聞きたい、と言ったら…

彼はとても驚いたようだ。

「君は何故…そのことを？」

「妹から聞きました。その最終決定権を持つのが…あなただという

「ことも」

「やれやれ……というように、髪に手をやりため息をついて、彼はじつと私を見る。」

「それで……君は一体、何を知りたい？」

「ゲームを引き分けにして……勝者を定めないまま終わらせることは、出来ないんですか？」

眉間に皺を寄せ、腕組みをする先生に、もう一度……大きな声で言うてみる。

「私……水月仁くんのお姉さんと親しかつたんです。それに……睦月さんも」

だから……彼らが傷つけあうところを見たくない。

そんな私の言葉に……彼は何か考え込むように、腕組みをして目を閉じた。

「確かに……君の言う通りかもしれない」

「え……？」

「君の妹さんやその友達の弟さん……それに……もう一人の青年も皆……前途ある若者達だ。ゲームなんてもののために、彼らの未来が潰されてしまう様なことがあってはならない。私も……そう思うよ」

だが……と彼は、テーブルに肘を突き溜息をつく。

「その為には……彼らをゲームから遠ざける必要がある」

「ゲームから……遠ざける？」

「或いは……精霊達から引き離す必要がある……という言い方のほうが的確なのか」

奥歯に物が挟まったような言い方をする先生に……

思わず……大声を出してしまう。

「はつきりおっしゃってください！大事なことなんです」

いつになく強気な自分に……正直驚いた。

「私は部外者ですし……ゲームに口を挟む権利は無いのかもしれない。でもどうしてもすす達を……睦月さんを……止めたいんです。」

そのためなら私…何でもします！」  
先生は私の顔をじつと見て……………  
厳しい表情で…頷いた。

「君になら、或いは……………何とか出来るかもしれない」  
研究室の奥へ通され、冷たい空気に思わず身震いした。

部屋の至る所に小さな蠟燭が置かれており、仄かな明かりを放っていて。

地面には…魔法円のようなものが描かれていた。

「先程、プレイヤー達を精霊達から引き離す…と言ったが」

先生は古文書のページをめくりながら、低い声で言う。

「程度の差はあれ…精霊達はゲームで勝利することに対して、一種の執着を持っている」

「サラマンドラとウンディーネは…『特に勝利には拘らない』って言ってたそうですけど」

「しかし…彼らは現に、戦っているだろうか？」

「それは……………自分達が消滅してしまうからで」

「消滅してしまう…という確たる記述は、この中にはないよはっとして…彼の手元にある、一冊の本に視線を移す。

それは何か…異国の言葉で書かれているようだ。

英語でもないみたいだし…もしかしたら、魔術に用いられる特殊な言葉なのかもしれない。

でも……………

何故だろう。

私はそこに書かれている事が…直感的に読み取れてしまった。

確かに、ゲームに敗北した結果として、魔力が全て失われれば消えてしまうことがある、という記述はあるものの、石を奪われること即ち消滅すること…とは書かれていない。

だとすれば…精霊達は何故、そんなことを言ったのかしら？

「君にはこれが…読めるのかね？」

目で文章を追っていた私を見て、先生は驚いた様子で尋ねる。

「読めてる…気がするだけなのかも知れませんが」

自信がないので…そう答えるが。

彼は目を細め、満足そうに溜息を漏らす。

「君はやはり…見込み通りの人物らしい」

「どういう…意味ですか？」

「君には何か…秘められた力があるようだね」

…秘められた力？

一体、どういう意味だろう。

話を戻そう…と言うと、彼は蠟燭の火を一つ一つ丁寧に消し始めた。

「精霊達は…頭では『勝ちには拘らない』と思っけていても、本能的

には勝利を目指してしまうんだよ。そして精霊に共感したプレイヤー

は…戦わざるを得ない状況に陥ってしまう」

「そんなことって…」

睦月さんも…同じだって言うの？

だとすれば…何であんな持って回ったような言い方をしたのか。

さっぱりわからないけど…

でも…

「精霊達を止めるには…どうしたらいいんですか？」

「精霊の持つ賢者の石を強制的に回収してしまえば…ゲームは目的

を失い、精霊達も戦う必要性を失ってしまう。つまり、プレイヤー

達も自由の身になる…ということだよ」

その言い方は…

「賢者の石があるせいで…精霊達もプレイヤーの人間達も、ゲーム

という名の戦いに縛り付けられてるって…ということですか？」

「その通り。さすがに君は飲み込みが早いね」

「それで…私は何をしたら」

彼が最後の一本の蠟燭を消して、部屋が暗闇に包まれる。

と…思った瞬間。

魔法円が白い光を放ち…暗闇の中に浮き上がった。



思わず息を呑んで…その文様に目を奪われる。

幾筋かの直線で囲まれた見知らぬ模様と共に、現れたのは…

「正十字……………」

「左様。君の信仰に関わるマークだよ」

彼は私の隣に立ち、静かに肩に手を置いた。

「君はどのプレイヤーからも近い距離にあり、しかも…熱心なキリスト教徒でもある。精霊達をこの世界へ導いたのは、実は敬虔なキリスト教徒の魂でね……………」

今は一刻を争うので説明は省略するが…とつぶやいて、ひっそり笑う。

「それだけでなく、君には何か不思議な力があるらしい。君ならこの場に全ての石を集め、勝者を定めることなくゲームを終結させることが…出来るかもしれない」

私が……………？

ゲームのこと、まだ…何にも分からないのに。

そんなこと…出来っこない。

何だか寒気がしてきて…声が小さくなってしまふ。

「先生には…出来ないんですか？だって…あなたはゲームの審判なんですよね？」

「私は審判であるが故…ゲームの進行に直接関わることは出来ない。プレイヤー達も…自分が勝者となってゲームを終わらせるより他に方法を持たない。つまり、君の言う『引き分けて終わらせる』という選択肢は、第三者にしか…取りえないものなんだよ」

私にしか…出来ない？

……………どうしよう。

本当に…そんなこと出来るんだろうか？

でも……………

さっき…出来ることなら何でもやるって言ったじゃない？私……………

これ以上、3人が傷つけあうところなんて…見たくない。

出来るかどうかなんて、全然わからないけど…

やってみるだけやってみたって…損はないんじゃないだろうか。  
しばらく自問自答して…

決心した。

「どうすれば…いいんですか？」

魔法円の中心に立ち…目を閉じる。

「念じたまえ…」

土橋先生は…まるで魔法使いが呪文を唱えるように、淀みなく朗々と私に語りかける。

「まずは四精霊の名…そして、自らの持つ賢者の石と共にここへ集うこと…更に…土橋研二郎の管理下に入るべし……」ということを「この前と……」同じだ。

真つ白な光の中に…私はいた。

その中に、四体の精霊が姿を現し。

賢者の石の欠片を……それぞれ私に手渡してくれた。

ノームという精霊とはほとんど接点がなかったので、よくわからないけど……

何故だか三人の瞳は……どこか悲しげで。

どうしたんだろう？

これで…互いが傷つけあうこともない、大事なプレイヤーを傷つけることもなくなる。

…全て丸く収まる筈なのに。

どうして？

『お人好しにも程があるよ』

『すずの言葉が脳裏に浮かぶ。』

『あのおっさん…何か胡散臭くて』

でも、すずだつて…彼がゲームマスターなんだつて言ってたじゃない？

ゲームの最終的な判断を下すのは…ゲームマスターである、彼だつて。

証拠だって、ちゃんとあるって…言った。  
でも……………

脳裏に浮かんだのは…

一人の少女の姿。

古びた緋の着物を着た…私と同じくらいの年頃のその少女は。  
何か訴えるように…じっと私を見つめていた。

はっとして、石を握り締めて…振り返る。

「土橋先生！？私……………」

その時。

白い布が口元を覆うのと同時に…強い刺激臭を感じたような気がした。

少女の顔が…どんどん遠ざかっていく。  
待って。

あなたは誰なの？

あなたは…私に何を伝えたかったの？

彼女は何も答えてはくれず。

ずっとずっと遠くで……………

あの日に聞いた…声がした。

コノ薬ヲ 才飲ミナサイ

ソシタラ少シ 眠クナルカラ

ソシタラ大分 苦シイノモ軽クナルカラネ

「…む…つき……………さん……………」

12月25日 その1

彼の呼ぶ声がした。

遠く…遙か遠くで。

私の名を呼ぶ…優しい声。

真っ暗な穴の中から…瞼に透けて見える、明るい光の射す方へ、ゆつくり首を傾け。

重い瞼を……ゆつくり開く。

眩しさに目を細めて見ると…

あの人だ。

私のこと…呼んでる。

行かないや。

また…『早く来ないと置いてくよ』って…笑われちゃうもの。でも……そうだった。

もう…一緒にはいられないの。

私のことは、もういいから。

こんなに最後まで、そばにいてくれて嬉しかった。

ありがとう。

あなたのおかげで…もう、怖くない。

あなたを安心させたくて、私はにっこり微笑んで見せたけど。

暗い穴の中にいたから、見えなかったみたいだ。

彼はただただ泣いていた。

そんなに泣かないで。

私は大丈夫だから。

さよなら。

あなたのこと、大好きだった。

だから……

目を開けると…

そこは、どこか高いビルの屋上だった。

ヘリポートのような模様の上に…さっきの魔法円が光っている。

「……………ここは」

ふと…自分が見たことの無い、白い服を着ていることに気づく。

厚手の上質そうなウールで出来たそれは、教会の聖職者が身につけていそうな法衣で。

白い…鈍い光を放っていた。

熱とさっきの薬でぼーっとする頭に…

『気ガツイタミタイネ』

若い女性の声が響き。

はっとして…見ると。

土橋が冷たい目をして、こちらを見つめており。

少し離れた所で…着物を着た少女が、静かに微笑んで立っていた。

「どうかしたかね？」

余裕の表情で尋ねる土橋に、その子は誰？と問い掛けると……………

彼は怪訝な顔をして、片方の眉を吊り上げた。

この人には、この子が…見えてないのかしら？

『ソノ通りヨ』

にやりと笑って、私が言う。

……………私？

そんなはず……………

でも……………あの子。

服装は、まるで戦国時代のお百姓の娘みただけど。

あの顔は…いつも鏡で見てる、私の顔。

『ソレニ…コノ声モネ』

くすりと笑う少女を呆然と見つめていたら……………

冷たい汗が一筋…背中を流れた。

「君にはどうやら…何か人知を越えた存在が見えているようだね」

土橋の愉快そうな声に、慌てて首を振り、否定するが。

「混乱するのも…無理はなかるう」

彼は満足そうに頷いて、ゆっくり顎に手をやる。

「君は生まれながらにして、この壮大なゲームのキーパーソンでありながら……そのことを一切知らずに生きてきたのだからね」

「……キーパーソン？」

『私』は少し上目づかいに私を見て……感情のない声で、唱えるように呟いた。

『ゲームマスターハ……アナタヨ、文』

「……ゲームマスター？」

はつとする。

「あなた……私のこと……騙したのね？」

からからと大きな声で笑い、土橋は私に名乗った。

自分は土の精霊ノームのパートナー、土橋研二郎であると……

「君のおかげで他の精霊を倒し、石を手に入れる手間が省けた……礼を言わねばならないね」

そんなことをつぶやいて、彼は『私』のことを語り始めた。

「その昔、一人のクリシタンの娘が死んだ。川の神を鎮める……人柱などという、迷信じみた名目でね」

『ソレガ……アナタヨ』

「……私」

そして……

着物姿の少女に向かって、心の中で問いかける。

それは……あなたでもある、ということね？

くすつと笑って……そうよ、と彼女は頷いた。

覚えてるでしょ？

あの……呪わしい一週間のこと。

白羽ノ矢ガ立ツタンダト。

アノ キリシタンノ家ラシイナ。

『済まないね……ほんにお前には、申し訳ないと思っておるんだ』

領主様の言葉は… 呆然とした耳を、まるで他人事みたいに流れていた。

『うちの倅の嫁に… なぞと言っておきながら、こんな……』  
構いません、とつぶやいた自分の声も… まるで他人の言葉のようだった。

『何とかしてやりたいのはやまやまだが… 川の神様がご所望とあつては、我々にはどうすることも出来ないので』  
神主様も、申し訳なさそうな目で私を見る。

母さんは倒れてしまって、布団から起き上がることが出来ずにいる。だから……

こんな難しい話、一刻も早く終わらせて、家の仕事をしなくちゃならない。

『神様の思し召しなら仕方ありません… 私でよければ、喜んでお受けいたします』

その代わり。

私は、父さんに土地をくださるよう…

家族がお腹をすかせることなく、安心して暮らせるように、領主様  
にお願いした。

『あなたは… 本当にそれでいいのですか？』

神父様は、嘆かわしいというような表情で… つぶやいた。

『ええ。村のみんなの為ですから』

『神から頂いた命を自ら絶つことは… 神の教えに反するのですよ？』  
思わず… 言葉を失った。

『ごついうのも、やはり…… 自害ということになるのでしょうか』  
『……… そう… ですね』

『異国の神にこの身を捧げるといふこと、神様はお許しにならない  
でしょうか？』

神父様は困った顔で黙り込み…

私達が教会として使っている小屋の奥に掲げられた、古びた十字架

を見つめた。

『それは……私にもわかりません』

『………そうですか』

そうよね。

こんな経験、異国から渡って来られた神父様にとって……初めてのひとだろうし。

あんまり……困らせちゃいけないと思った。

『でしたら私は………信仰を捨てます』

これは私自身が決めたこと。

誰にも迷惑は掛けたくなかった。

なのに………

両肩を掴んだ彼の腕は……わなわなと震えていた。

『気は……確かなのか？』

『………ええ』

もう決まったことなんだから。

くるりと踵を返し、どこかへ駆け出そうとする彼の、着物の袖を咄嗟に掴む。

『待つて！……どこへ行くの？』

『領主様と……神主様のところへ』

はっとした。

『お願いしてくる。お前のこと……助けてくださいって』

『そんなの無理だわ。だってあなたはもう……』

『確かに俺は、この村とは無関係な人間だ！でも………このまま、黙ってるわけにはいかないじゃないか！？』

『待つて………！お願い………！』

取り縋る私に、どうして止めるんだ？と尋ねる彼の瞳は……

悲しみの色を帯びて、やや潤んでいた。

思わず……私も、泣いてしまいそうになったけど。

ぐっと堪えて………にっこり微笑んだ。



『いいの。だって…あなたがここで騒ぎを起こしたら、ご奉公先にご迷惑がかかってしまうでしょ？せつかく先の戦で手柄を立てて、これからっていう時なのに…』

彼は…私のことなんか、もう忘れてしまふべきなのだ。

家柄の良いお姫様をお嫁さんに貰って、もっともつと上の役職に取り上げられて…

幼い頃…貧しい思いをして、苦勞をしたのはお互い様。

やっとな、ここまで来られたんだもの。

あなたには…幸せになって欲しかったの。

『アナタハ イイワネ』

少女の声に、はっとして…我に返る。

「昔のことでも…思い出していたのかね？」

土橋が低い声で言つて…私に背を向けた。

「さつき手間が省けた…と言つたが」

コツコツという靴の音が、冷たいアスファルトに響く。

「それはどうやら…私の早合点だったようだ」

「…どういうこと？」

「君の妹さんはまだ…賢者の石を所持しているらしい」

「…さすが！？」

元々あつた石を小さく割つて隠し持っていたようだ…と、彼は苦々しい顔でつぶやく。

思わず…小さく拳を握る。

…ナイス、すず。

「件の若者にもまだ、シルフィードの力が残っているようだしね…彼らは君を探して、ここへ向かっているようだ。が…」

悪人めいた笑みを浮かべ、彼はまた…ヘリポートの隅へと歩きだした。

「無駄なことだと思つがね。共に戦う精霊がない以上、彼らに出来ることなど…たかが知れている」

土橋が去り……

冷たい風の吹き荒れるヘリポートには、私一人だけが残された。

……いえ。

正確には、私と……

黙って虚空を見つめる『私』に、私は静かに問い掛ける。

「さっきの……『いいわね』って……何？」

『ワカラナイ？』

「……解らないわ。だって、あなたは私なんですよ？ だったらあなた  
だって……」

あの日から、何百年経ったのかはわからないけど……生まれ変わって、  
私の中で……

この世界を生きているはずなのに。

『コノ建物ノ……真下』

乾いたその声に……

ぞくつと背筋が寒くなる。

彼女はニヤリと笑い、小首を傾げて私を見た。

『タマシイノ大半ハ　アナタ共ニアルワ　デモ……私ハ

取り残サレテシマッタノ』

ゲームを存続させるため……

精霊達を、この世界に留めおくための……依り代として。

『デモ……ヨカッタ　ゲームガ終ワレバ　アナタト　一ツニナ

ルコトガ出来ルモノ』

……？

『勝者ノ願イヲ叶エタラ……アナタモ私ト一緒ニ……消エテシマウ  
ンダモノ』

轟々唸る風の音が……何故かとても、遠くに聞こえた。

……何？……それ……

ずっと一人で淋しかったの……と、彼女は静かに笑う。

『可哀相ダト思ウデシヨ?...アナタナラ...ソウ思ウハズダワ ソ  
レニ...一緒ニイテクレルハズ』

だってあなたは優しいもの。

彼女は無表情に呟いた。

『ダツテアナタハ...イイ子ダモノ』

少女が暗闇の中に消えてしまい...

冷たい静寂が辺りを包んだ。

私に...考える猶予を与えようとしても言うのだろうか。

手の甲で額に触れると、想像していたよりも熱くて...

まるで命の最後の灯を、燃やしているみたいで.....

.....そっか。

このところ、ずっと具合が悪かったのは...そのせいか。

私は今度もやっぱり...18歳の誕生日を迎えることは...出来ないの  
か。

『バカじゃないの!?!』

すずの怒鳴り声が聞こえた気がして...思わず身を固くする。

...すずの声?

いえ.....違う。

「ひかり.....?」

.....そっか。

私.....まだ...やり残したこと、沢山あるもの。

ひかりと約束した。

私は医者になって...

ひかりみたいに、夢半ばで倒れるような子供が、いなくなるように  
するんだって。

土橋の消えた...ヘリポートの隅にある、鉄の階段をじっと見据える。  
生きなきや。

私は.....

両手をついて立ち上がり、階段へ向かって駆け出した。

が……

「きゃっ！……！」

突風に煽られて、魔法円の中心に引き戻される。

はっとして……見ると。

目の前に立っていたのは……

「シルフィード……」

『あなたを行かせるわけには参りません』

今まで聞いたことのない、無機質な声。

「お願い！睦月さんや……すず達が下で私のこと待ってるの！私……早

く行ってあげなきゃ」

『そうは参りません』

「……………どうして!?!」

『プレイヤーの命令だからです』

どきんと心臓が高鳴る。

「……土橋が?」

『土橋の命令に従うように……と。文さん……これはあなたの命令だっ

たはずですが?』

「それは……………」

しまった……と思う。

でも。

「じゃあ……撤回する。あなた達は皆、元のプレイヤーの所へ」

『それは出来ません』

「……………何故?」

『あなたはゲームマスターとしての、正当な手続きを踏んでいませ

ん。だから……今、あなたの命令に従うことは出来無いのです』

「正当な……手続き」

そう、と頷く彼女の瞳からは、一切の表情が読み取れない。

そうか。

さっきは土橋がお膳立てをした上で、私が命令したから……言う事を

聞いてくれたってわけ。

方法はきつと…あの古文書に書いてあるはず。

でも、本は彼が持つてどこかへ行ってしまったし…  
難しいなあ。

何か…他に方法は…

そうだ。

さっきの子…どこへ行ったんだろう。

ゲームの依り代だって言つてた…あの子にお願いすれば、きつと。  
すつと大きく息を吸い込んで…

彼女を呼ぼうと、口を開き。

…はたと、気づいた。

私…

あの子の名前…忘れちゃってる。

どうしてだろう…自分の名前なのに。

そういえば…睦月さんの名前って…何だったっけ。

…睦月さん？

私、どうして彼が睦月さんだって…思ったんだろう。

でも…理由はわからないけど、やっぱり睦月さんだ。

睦月さんはきつと、私のことを覚えていて…それで私を探し出して  
くれたんだと思う。

『君のことは絶対…俺が守る』

この前確か…そんな風に。

…そうだ。

睦月さんはきつと、ここへ来てくれる。

「睦月さん…」

つぶやいた…その時だ。

「文ちゃん!!!」

ビルの屋上に現れたその姿に…

ほっとして…私は思わず、ため息をついた。

「睦月さん!」

12月25日 その2

睦月さんは穏やかな表情で、じっとシルフィードの顔を見つめた。

「シルフィード…彼女をこちらへ渡して」

『あなたの命令には従えません』

「…やつぱりそう」

じゃあ、とつぶやく彼の周囲に…冷たい風が吹きすさぶ。

「力づくでも…渡して貰わないとね」

シルフィードの華奢な体に、激しい風が吹き付ける。

両腕で覆うように体を庇い、彼女は瞳をぎらつと光らせた。

「睦月さん!」

次々に襲い来るかまいたちを、白く光る一振りの刀で回避しながら、彼は私達の元へ駆け寄ってくる。

そして。

シルフィードの目の前で、彼はぐっと右手を突き出した。

風の塊が彼女を襲い。

咄嗟に、風の塊を繰り出して反撃するシルフィード。

二つの風は白い眩い光を放ち、激しくぶつかり合うが…

やがて…睦月さんの放つ風が、シルフィードの攻撃を弾き飛ばした。

彼女の体はヘリポートの端まで飛ばされ、地面に叩き付けられる。

ドサっという音と共に倒れ、ぐったりと動きを止めたその姿に…少し不安になるが。

「大丈夫だよ。精霊にとってはあのくらいの攻撃、なんてことないから」

冷静な声の睦月さんが、シルフィードに向かって声を掛ける。

「下で沢山の分身を動かしてるから…本体の方には力をあまり残してなかったんだろっ」

『……………』

「いいからお前は…そこで体を休めてな。後は俺に任せて」

彼の温かい腕に抱きしめられ…

目から熱い涙がこぼれ落ちた。

「遅くなってごめんね…大丈夫？」

「……………はい」

よかった…と微笑んで、彼は私の頬を流れる涙を拭ってくれる。  
やっぱり…来てくれた。

睦月さん……………

「すずと…仁くんは？」

「今は下にいるけど…大丈夫だよ」

「…よかった」

「じゃあ、とにかく…二人と合流しなきゃね。早くここを降りて」

「そうはさせんぞ！」

はっとして…見ると。

さつき睦月さんが現れた階段を、駆け上ってきた土橋が…荒い息で怒鳴る。

「シルフィード！そいつらを捕まえる！！！」

むっくりと体を起こしたシルフィードは。

呆然とした表情で…私達と土橋を交互に見た。

「何をしている！？早くそいつらを…」

言いかけた彼に睦月さんが駆け寄り、風の塊を放つ。

大柄な彼の体はコンクリートの床に押し付けられ、身動きが取れなくなってしまう。

焦った様子で、息苦しそうに喚く土橋。

「貴様っ…はなせ……………」

「文ちゃん！今のうちに下へ…」

「でも…睦月さんは」

「俺は大丈夫だから！だから早く下へ」

「シルフィード！早く捕まえる！！！」

「駄目だシルフィード！土橋の命令には従うな！」

無言でこちらを見つめる彼女の瞳に…迷いの色が見える。

「約束しただろ！？俺達で彼女を守ろうって…」

『……………ムツキ』

「彼女の幸せを、俺達はずっと…願ってきたんじゃないか」

『……………』

「シルフィード…!!」

怒鳴る土橋を冷たい目で一瞥して、駄目だ、とシルフィードに再び声を掛ける。

「彼女を行かせてやれ!」

「睦月さん…」

「いいから行って！文ちゃん…!!」

シルフィードと目が合う。

彼女はまだ…迷っているみたいで。

「文ちゃん…!!」

「貴様…シルフィード！プレイヤーの命令に従えないのか!？」

『私は……………』

「その男はもう…お前のパートナーではない！私の命に従うようにと、ゲームマスターによって命じられたはずだろう!？」

青ざめる彼女に…低い声で彼は命じる。

「ならばよい…娘を捕まえる！さもなくば…その男を殺せ…!!」

……………何ですって？

「風群睦月を殺せ！それが出来ないならば…その娘を捕まえるんだ」  
「!」

静かに目を閉じ…睦月さんが厳しい声で言う。

「シルフィード…彼女を行かせてやれ」

「…睦月さん」

「いいから…行くんだ…!!文ちゃん…!!」

「命令に従え！シルフィード…!!」

意を決した様子で、彼女は私達に近付き…

風の刃を……………



彼の背中に突き立てた。

「そうだ…………シルフィード」

長身の体が…ふらりとよろめいて。

「それで…………いい…………」

乾いた音を立てて…床に崩れ落ちた。

「睦月さん……！」

駆け寄って、その体を抱き起こす。

苦痛に顔を歪める。

彼の背中を支えていた、私の白いシャツが…赤く染まっていく。

彼の着ていた黒いシャツは大量の血を吸って、びしょびしょになっていた。

「…………睦月さん」

呼ぶ声が…掠れる。

『睦月』

シルフィードが傍に跪く。

『これで…本当に良かったのですね？』

「そんな…良いわけが」

「いい…んだよ…………文ちゃん」

弱々しく微笑む、睦月さん。

「昔…………約束したのに…………君を守れなかったから…………」

「睦月さんっ…………」

「君を殺した連中を…………皆殺しにしてやったけど…………そんなの

…君は望んじやいなかったんだろっね…きっと…………俺の自己満足

だったんだと…思う」

「…………そうですね。私は…………あなたに…………幸せになって欲しくて

「もう一度会えて…………本当に…嬉しかった」

「睦月さん!？」

「今度こそ…君のこと…………守りたいって思ったんだ…………でも…………」

「こんなこと…私…ちっとも嬉しくありませんよ…………」

そつだよね……と……微笑む彼の頬を……涙が一筋流れる。

「これで君を守れるって思ったけど……やっぱり……これも……俺の……自己満足……かな……」

「……睦月さん……!」

彼の呼ぶ声がした。

遠く……遙か遠くで。

私の名を呼ぶ……優しい声。

真っ暗な穴の中から……瞼に透けて見える、明るい光の射す方へ、ゆつくり首を傾け。

重い瞼を……ゆつくり開く。

眩しさに目を細めて見ると……

あの人だ。

私のこと……呼んでる。

とてもとても……愛おしそうに。

聞いたことの無い名前。

私の名前は文なのに。

でもとても……懐かしい名前。

『蘭!』

「……一也」

動かなくなつた彼の体が、次第に冷たくなっていく。

うつむいた私の背後で……

土橋の笑い声が響き渡つた。

じつと睨む私に構う様子もなく、彼は得意げな声で私に問いかける。

「どうだね?自分の為に、恋人が犠牲になつた気分は……」

「……最低」

私の答えは勿論……気分の話じゃなくて。

この……人の皮を被つた悪魔のような……男のことだ。

唇を噛んだシルフィードは、くるりと私達に背を向け…小刻みに背中を震わせていた。

ずっとずっと彼と一緒にいて…かけがえの無いパートナーだったのに。

……………そっか。

だからこそ……………シルフィードは睦月さんの言葉に従ったのだ。

守りたかった？

……………私を？

ひどい。

『取り残サレタ者ノ気持チガ 少シ八分カッタカシラ？』

顔を上げると。

あの子が立っていた。

彼女は楽しそうにくすくす笑いながら、私に手を差し出す。

『ネエ 早く一緒ニ逝キマシヨウ？』

「……………あ…あなた」

『ダツテ 彼ノイナイ世界デ アナタハドウヤツテ 生キテイクツ

モリナノ？』

「恋人のいない世界になぞ…君も未練はないだろう」

土橋が彼女の言葉を追うように、語りかけてくる。

……………ころしてやる。

あんななんか……………

『アナタハ 一也ト 同ジ事言ウノネ』

はっとした。

『自己満足だったんだ』

……………そうね。

きつと、自分が犠牲になって…

家族もあなたも幸せになれるんだって…

そんな風に思ってた……………私もきつと。

「自己満足…だったのね」

ふふふ…と笑って、彼女は首を傾げる。

『生きテイタツテ仕方ナイワ』

「それならば、一人の哀れな男の願いを叶えてくれても、罰は当たらないと思うがね」

……………何よ、それ。

意味わかんない。

ジヨウシキテキニカンガエテ、おかしいでしょ。

すず……………

大丈夫かな。

仁くんは……………

どうしただろう。

でも……………

きつと……………なんにもしてあげられない。

私には、睦月さんすら……………助けられなかったんだもの。

どうしよう。

誰か助けて。

怖い。

悔しい。

悲しくて……………

絶望で……………体が引き裂かれそうだった。

痛くて痛くて……………泣き叫んでしまいそう。

私は俯いて……………

冷たくなつた睦月さんの額に……………手を置く。

血が出るほど唇を噛んで、懸命に……………痛みに耐えることしか出来無い。

何も考えられなくて……………まるで使い物にならない頭に……………

あの子の笑い声だけが……………大きくこだましていた。

「顔を上げる……………！！娘……………！！」

苛立ったような土橋の声。

はっとして……………

背筋が凍りつくのが分かった。

「……………すず？」

「お姉ちゃん……」

頭から血を流したすずは……

土橋に……その小さな体を拘束されていた。

すずの頭の横に突き出された土橋の手の中には……銃のようなものが見える。

あんなもの……………

「あんだこんなもん、どこで手に入れたのよ!？」

すずが空元気を振り絞って、土橋に向かって怒鳴るが。

彼が動じる様子など……微塵も感じられない。

「ネットというものは……君も相当な通らしいが」

余裕たつぷりに口を開き、にやりとすずに笑いかけた。

「何とも便利な代物でね……誰でもどこからでも……何でも手に入る」

「し……信じらんない!!! あんだなんか…………… あんだなんか……死んじやえはいいのよ!!!」

「……………君の姉上の答え次第では」

上機嫌だった声が、急に低く陰しくなり。

カチャリ……と、銃の安全装置を外す音がした。

「死ぬのは君だよ……不知火すずくん」

青ざめるすずを一瞥して、土橋は厳しい目を私に向けた。

「……………こんなひどいこと……………なぜ？」

「そんなこと、決まっているだろう!？」

自分の願いを叶えなければ……すずを撃つ。

彼は淡々と……そう言った。

『サア……ドウスルノ?』

彼女が楽しそうに尋ねる。

『可愛イ妹ヲ犠牲ニシテマデ アナタハ生きテイタイノ? 彼ノイナ  
イ コノ世界ニ』

すず……………

『ドウシテアナタハ 私ノ才願イ 聞イテクレナイノ?』  
…それは。

そっか、と笑って、彼女はどこかを指差し、私を見た。

『夢…ダツタワネ。 アノ子ノ才姉サント 約束シタンダツタカシラ  
?』

……………あの子?

彼女の白くて細い指先の向こう。

仁くんと、傷だらけのウンディーネの姿が見えた。

すずを拘束したまま、土橋は愉快そうに笑う。

「どうやら…あちらも決着がついたようだね」

ぐっと唇を噛んで、仁くんは…土橋に向かって行くこととする。

でも……………

「じ……………ん……………」

虫の息といった様子のウンディーネが、細い声で彼の名を呼ぶ。

はっとした顔で、今にも泣きそうな表情で…仁くんは彼女の身体を  
抱きしめた。

二人は何か、話してるみたいだったけど…

その声はとても小さくて、何を話しているのかわからなかった。

ただ……………

「私も…仁が……………すきでした」

微かに笑って消える前の、ウンディーネの言葉だけが、風に乗って  
私の耳に届いた。

……………そっか。

仁くんも……………私と一緒に。

大事な人に…置いていかれちゃったのね。

ひかりだけじゃなく……………あの子にも。

私もきつと…あんな風に打ちひしがれて見えるのだろう。

膝に、冷たくなってしまった睦月さんの重みを感じながら…

コンクリートの地面に両手をつけて、小刻みに身体を震わせている

仁くんの姿を見つめ、呆然とそんなことを考えていた。

「水月！」

土橋の手から逃れようと、体をじたばたさせながら、さすが仁くんの名を呼び。

はっと…我に返る。

ノームの使いらしき、岩で出来た化物が、仁くんに近づき。

青く光る石の欠片を、彼の手からもぎ取った。

「駄目！駄目だってば！！水月！！！」

放心状態の彼に、すずの叫びは届いていないらしく。

絶望に満ちたその瞳は…まるで。

ひかりが死んだ……………あの日のようだった。

「聞き分けが良くって結構なことだね、仁くん」

ゲームの勝者が…満足げな声でつぶやく。

「さあ、ゲームマスター！君はどうする？」

返事は分かっている…と言わんばかりの態度で、土橋は私に声をかける。

「石はこれで全て揃った！そして、君のかわいい妹さんの命は…私の手の中にある」

『コレ以上 誰にも傷ツイテ欲シクナイ』

はっとする。

彼女は…と、私の傍に立っていたらしい。

一時の沈黙の後。

彼女は…弾けるように笑い出した。

楽しくて楽しくて仕方ない…そんな様子で。

『…何がそんなに可笑しいの？』

『ダツテ！ソウ思ツテタデシヨ！？』

『そりゃ…思っただけ』

『アナタツテ本当ニイイ子ナノネ！信ジラレナイワ』

『私は……………あなたなのよ？』

『デモ信ジラレナイノ アマリニ アナタガ…バカバカシクテ』  
お腹の底から…怒りがこみ上げてくる。

あなた怒ってるの？と、彼女は依然愉快そうに尋ねる。

『逃げチャエバイイノニ』

『出来ないわよ、そんなこと』

『ジャア アノ男ヲ殺シテシマエバ？ アナタガ命ジレバ 精霊達  
モ従ウンジャナイ？』

『その間に…ずくに何かあったらどうするの？それに』

『ソウヨネ アナタハ…自分ノ手ヲ汚シタクナインダワ』  
ズキン、と胸が痛んで…

心臓に何か…突き刺さったような気がした。

くすくす笑いながら、彼女は小首を傾げて微笑む。

『ダカラ ヤツパリ今度モ 前ノ時ト同ジヨウニ…アナタハ死又コ  
トヲ選ブノネ』

『……………それは』

「さあ！！儀式を行い私の願いを叶えたまえ！！！」  
土橋の声が、ビルの屋上にこだまする。

『可哀想ネ アナタツテ』

……………可哀想？

『ソウヤツテ イイ子デイナキヤ…ツテ コノ後ニ及ンデ思ッテル  
ンデスモノ』

そうなの…かな？

私……………

心臓の鼓動が耳に響く。

膝に抱いた、冷たい睦月さんの額に…手を当てる。

私のことを愛してくれた人。

命を賭けて…守ろうとしてくれた。

私は彼のために……………

何が出来るだろう？

『可哀想なのは…あなたの方よ』



ずっとずっと一人ぼっちでいた…そのことも可哀想だけど。

『それよりもずっと…そうやって、自分の気持ちを裏返しにしてることの方が可哀想だわ』

『……………ドウイウ意味？』

少し動揺した様子が、その声から伺える。

『あなたは何も感じないの？あんな風に悲しみに暮れている仁くんを見ても、あんな風に怖い思いをしてるすずを見ても、それに…こんな睦月さんの姿を見ても』

『……………カンジナイワ』

『嘘よ。あなただって可哀想だって思ってるはずだわ…何もしてあげられないのになって、何とかみんなを助けてあげられないかなって…出来る事なら……………あの人にも考え直してもらえないかなって』

『……………馬鹿ジャナイノ？ソナハズ…』

『いいえ、そのはずよ！』

あなたはいい子過ぎるの。

自分が犠牲になったことで、沢山の人を悲しませてしまった。

だから…いい子でいちゃいけないんだって。

あなたはそう…思ってるんでしょ？

『……………チガウワヨ』

『私があなを可哀想だって思うのは…私がいい子だからじゃないわ』

『……………ジャア…ナニ？』

『いい子だから、そう思わなきゃいけないって思ってるわけじゃない…私に自然な気持ちなの。誰も傷つけないっていうのだった、いい子ぶって思ってるわけじゃない』

自分の気持ちに蓋をして、わざとそんな風に笑ってるんでしょ？

『チガウチガウチガウ！！チガウワヨ！！ワタシハ…』

泣きそうな顔をして、何度も何度も首を振る…少女。

その姿を見ていたら……………

『一緒にいてって…さっき言ってたわね？』

黙って俯く…彼女。

『私…あなたと一緒にいてあげる』

驚いた様子で、大きく目を見開く。

『……………アナタ…ヤッパリ自分ガ犠牲ニナルツモリナノ？』

さつきまで、あんなにそのことを促していたくせに。

彼女は非難めいた声で、私に尋ねた。

『いいえ。私ね……………名案があるの。あなたと一緒に、みんなを助けるのよ』

…なぜだろう。

急に…何か方法がありそうな気がしてきたのだ。

この子を助ける方法。

そして、睦月さんやウンディーネを…

それに……………

目の前で高らかに笑う…あの男のことも。

少女の姿が見えなくなる。

そして……………

一瞬、体が暖かくなったような気がした。

意を決して、口を開いた時。

自分の声があまりに冷静で…驚いた。

「あなたの願い事って…何？」

「…何？」

「まだその事…聞いてなかったじゃない」

土橋に羽交い絞めにされ、恐怖で固まっていたさすが、はっとして顔を怒鳴る。

「駄目！！お姉ちゃん！！！」

「おいおい、君は黙っていたまえ」

「うっさいわねえ！お姉ちゃん！！！！こいつの願いなんて…そんなことしたらどうなるか、わかってるの！？お姉ちゃん」

私が死んじゃうって…思ってるんだろう。

必死で私を思いとどまらせようと叫ぶすずの姿に、胸が熱くなる。

「すず…大丈夫」

あなたを悲しませるようなことは、絶対しないから。

「だから…大人しくしてて」

はつとした顔で私を見つめたまま。

すずは、小さく頷いた。

『でも…どうする気なの？』

彼女の目は…そんな風に私に尋ねている。

……………どうしたらいいんだろう。

すずにも、あの子にも…大丈夫って言うてみたものの。

名案なんて…未だになんにも思い浮かばない。

「私の願い…か。そうだな……………」

きつと何年も何十年も抱き続けてきたのであろう、その願い事を…

彼は厳粛な面持ちで、私に告げた。

「私を……………民俗学研究の権威に」

すずが彼の顔を凝視する。

「……………はあ!？」

「世界中の研究者がひれ伏すほどの最高の権威を、私の手に……………」

それが、私の願いだ」

恍惚とした表情を浮かべる土橋に向かって、真っ赤な顔ですずが怒

鳴る。

「信じられないわあんた!!! そんなことの為に、私のお姉ちゃん

死なせようっていうの!?! それに…あんたのせいで、ウンディーネ

も…睦月も死んだのよ!?! あんた目覚ましたらどう!?! そんなちっ

ぽけな願い事なんか…」

「黙れ!!! お前のようなガキに何が分かる!?!」

「だ…からっ……………それはあんたの努力不足でしょうが…」

「違う!?!」

苛立つて地面を蹴る音が、静かな屋上に響きわたった。

「この業界はな…努力だけではどうにもならんだ!何が真実であ

るかなど二の次、金や権力を持ったものの言い分が通る…勝ち組はずっと勝ち続け、そこから漏れた人間は…」

声を震わせ、彼はすずに向かつて怒鳴り続ける。

「分かるか!? 私は精霊の研究に何十年もの時間を費やしてきた。

その間…どれだけの人間に絵空事と揶揄され、嘲笑われ続けてきたか……お前には想像出来るか!?」

そして……

今度は、私と仁くんに向かって…訴えるような必死な表情で叫ぶ。

「お前達も見ただろう!? 確かに精霊は存在しているんだ!!! 長い眠りから覚めた『精霊の書』は本物だった!!! だが世間の一体誰が、それを信用すると思う!? だから私には石の力がどうしても必要なのだ!!! この世紀の大発見を証明し、世界に発信し…」

苦しそうに、大きく一つ息継ぎをして…

彼は高らかに宣言した。

「今まで馬鹿にしてきた連中を嘲笑うのは…今度は私の番だ!!!」

一瞬…言葉を失った。

なんて……

なんて……可哀想な人なんだろう。

長い長い間、この人はずっと、辛い悔しい思いに耐え続けてきたのだ。

誰にも理解されず、相手にされずに…

ひたすらに、自分の信じたものを求め続けてきた。

『精霊はたしかに存在する』

どんなに嬉しかったことだろう。

でも……

やっぱり理解してくれる人なんて…一人もいなくて。だから……

こんな風に…感情が麻痺してしまったのだろう。

「やっぱり…そんなことの為にお姉ちゃん死なせるなんて出来ない

わよー！」

優しいはずの叫びに、哀れな男は冷たく言い放つ。

「それは…君ではなく、お姉さんが決めることだよ」  
そして、救いを求めるような目で…私を見た。

「ゲームマスター！さあ、この石を…」

差し出された4つの石を、手にして。

深く息を吸い込んで。

……考えた。

この人に、目を覚ましてもらうには…どうしたらいいんだろう。  
ゲームなんて、最初から無かったら良かったのだ。

そうすれば、ウンディーネも…睦月さんも…失うことはなかったの  
に。

ゲーム……か。

拘束されたまま、私を思いとどまらせようと叫び続けているはずに  
…視線が止まる。

……そうだ。

「……お姉ちゃん!?」

まぶしく光り輝く魔法円。

『トンデモナイコト思いつイタノネ』

少女の声が脳裏に響く。

…そうよ。

あなたが思ってるほど…私はいい子じゃないの。

ゲームのルールに則って、それでみんなが不幸になるなんて  
まっぴらだ。

こんなもの……

彼女が嬉しそうに笑う声が聞こえた。

思わず私も微笑んで彼女に答える。

そうよね。

ゲームなんて……

12月25日 その3

ゲームなんて……………

二人で…壊してやりましょう。

「ゲームを……………リセットします」

目が眩むような、白い光に周囲が覆われて  
思わず固く、目を瞑る。

そして……………

いつも教会で捧げる祈りの言葉を…  
あの子と一緒に、唱えた。

ゆっくりと……………瞼が開き。

呆然と、自分の手のひらを見つめる睦月さん。

「……………これは」

どこか不安げな表情で私を見つめる彼に…

私は少し首を傾けて、笑いかける。

「大丈夫ですか？」

睦月さんは子供みたいに、こくりと頷いてくれて。

ほっとして…思わず大きいため息をついた。

少し離れた所に…ウンディーネの姿も見える。

涙をぐつと堪えて、彼女の華奢な手を握る…仁くんが。

なんだかちよつとだけ…男らしく見えた。

大きく目を見開いたすと…目が合う。

『もうヤダー!!!』

ちっちゃい頃、ずすは半泣きで言い放つと。

決まって…ゲームのリセットボタンを押すのだった。

『おいおい…簡単に諦めちゃ駄目だよ』

そんなずすを、パパは呆れ顔で笑ってたしなめたが。

『駄目じゃないもん！次頑張るからいいんだもん!!!』

大きく首を振って、ずすはいつもそう反論し。

しばらくすると…また同じ事を繰り返すのだった。

そんなこんなで、ずすのゲームはちつとも進む気配が無くて。

最後はいつも泣き出してしまい、見るに見兼ねたパパが助け舟を出すのだ。

『すごいすごい！パパかつこいい!!!』

大はしゃぎで目を輝かせるずすに、パパは得意げに笑いかける。

そんな二つ並んだ背中を…私はいつも眺めていた。

それは懐かしくて、暖かくて、優しい…遠い記憶。

「……………うおおおお!!!」

突如上がった叫び声に…はっとした。

土橋の握りしめた銃は、真っ直ぐ私に向けられている。

私を庇おうと前に進み出る睦月さんを制して、私は彼と向き合った。

「貴様!!!…一体どういうつもりだ!？」

「どういうって……………見ての通りよ」

「……………私を…騙しおつたな!？」

一瞬、言葉を失ってしまふ。

この人には、まだ…分からないんだろうか。

「騙す!？先にそれをやったのはあなたじゃないですか!？私はゲームマスターなんです!!!ゲームマスターとして……………こんなゲーム、到底認められません!!!」

「……………何だと!？」



「人の気持ちを利用して、操って…自分は最後においておいしいところだけ持っていていこうなんて、しかも…勝利の為には人の、精霊の命なんてどうでもいいなんて、そんなの…だからリセットしたんです！どうしても願いを叶えなければ、もう一度ノームと契約を結んで、そして他の精霊達から石を集めたらいいじゃないですか！？」

必死の形相の土橋に…

ノームは、何気ない口調でつぶやく。

「わしは…下りるぞ」

「……………何だと!？」

有無を言わさぬ態度で、彼は石を空高く放り投げ。

それはきらりと光って、私の手の平に収まった。

「…どういうことだ、貴様私を裏切るのか!？」

「裏切る?」

呆れたように笑い、彼はのんびりした口調で土橋に反論した。

「わしはまだ、貴様とは契約を結んでいない…裏切るも裏切られるも無いわい」

はっとした顔で、辺りを見回す土橋。

と……………

「どうする?…ず…」

「どうって……………当たり前でしょ!?!あんと組むのは私だけよっ」

「よし、上等!」

楽しそうに笑いあう、炎の精霊とず。

はにかんだ笑顔で、でも…固く手を握り合う、水の精霊と仁くん。

そして……………

「シルフィード?」

優しい彼の声が、彼女の名を呼び。

「はい…睦月」

穏やかなシルフィードの声が、すぐ傍に聞こえた。

土橋は……………

愕然とした表情で…冷たい地面に膝をつく。

その瞳から、さつきまでの狂気は消え。

やっと彼はゲームの呪縛から解き放たれたのだ、と…思った。

「土橋…先生？」

怯えた小動物のように見える彼に、そつと手を差し伸べる。

「あなたがさつき…おっしやっていた通りです。精霊は確かにいて

…『精霊の書』は本物でした。たとえ誰も信じなくても…私

達には…先生の研究が真実だって、ちゃあんと分かっていますから」

私を見つめるその目には…恐怖すら浮かんでおり。

出来るだけ刺激しないように、笑顔で静かに語りかける。

「正しいことを言ってる研究者が、信じてもらえないことって…よ

くあることじゃないですか。長いときを経て、それが真実だってよ

うやく分かってもらえて、そうして名前が残ってる研究者って…世

界にたくさんいるじゃないですか。私達…応援してますから」

これまで…彼はどんな風にして生きてきたのだろう。

どんなことを思い、どんなことに幸せを感じてきたのだろう。

ゲームばかりが全てじゃない。

聖夜が終わる、その前に…

目を…覚まして欲しかった。

「どうかこれからも…」

沈み込んだ、その肩に……

手をかけようとした。

……その時だった。

「………黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ!!!」

彼は突如、立ち上がって叫び。

銃口を私達に向け、屋上の端の方に駆け出した。

「待ちなさい!!!」

………いけない。

「うるさい!!!貴様らのようなガキにはわかるまい!!!私の…

私は………」

狂ったようにフェンスをよじ登る彼に。  
もう一度、声をかけようとした時。

「……………うわあああ！！！！！！」

一生忘れることは出来無いであろう、叫び声と共に。

彼の姿は……………

ふっと……………夜の闇の中に消えた。

「……………どうして？」

最後に私達を見つめた……………その目は。

確かに正気を取り戻したように見えたのに。

きつとまた、学者として真摯に研究と向きあってくれろ……………思ったのに。

肩に、ふっと……………重みがかかり。

睦月さんが、静かな口調で話し始めた。

「ゲームの勝者になると……………数十年もの長い年月、あいつはそれだけを思って、ここまで生きてきたんだろ……………生活の全てを犠牲にして、ただひたすらそれだけのために……………ね。このゲームに勝ちさえすれば、自分は名誉を手に入れ、生まれ変わることが出来る……………そんな風に思ってたんじゃないかな」

「でも……………」

困惑したはずの声を遮るように、彼は淡々と言う。

「あいつはきつと、ゲームに囚われてしまっていたんだろ……………」

研究を世に知らしめるとか、そんな純粹なものだったろう最初の目的が……………いつの間にかゲームの勝者になる、という欲望にすり替わってしまったのに……………あいつは気づかなかったのかも知れない」

「……………囚われる……………か」

仁くんが、神妙な顔で言い。

小さく頷いて、微かに光が差し始めた……………藍色の空を仰ぐ、睦月さん。  
「ゲームの勝者になれないとわかった瞬間に……………あいつは、生きる意

味を失ってしまったように感じたのかもしれないな。絶望に全身を支配されて…だから」

深い溜息をついて、ゆっくりと目を閉じ。噛みしめるように…つぶやいた。

「土橋もまた…ゲームという虚しい夢に囚われた、哀れな男だったんだな」

少し…背筋が寒くなり。

思わず彼の大きな手を、両手でぎゅっと握り締める。

そうでもしないと、睦月さんが…どこか遠くへ行ってしまういそぐで。はつとした顔で見つめる彼に、私はにっこり微笑んで。

「帰りましょう…一緒に」

「……………文ちゃん」

彼の瞳の奥にいる…もう一人の『睦月さん』に語りかけた。

あの時は……………

ちゃんとさよなら言えなくて…ごめんね。

それに……………

「睦月さんは、長い長い時間をかけて、私のこと見つけてくれたんですから…」

また、私が消えてしまつても思つたのだろうか。

少し震える腕が、ゆっくりと私の体を包み。

そして……………

息が出来ないくらい、強く強く…抱きしめた。

…心配しないで。

私も、彼の大きな背中に手を伸ばす。

「私はもう…どこにも行ったりしませんから」

温かい彼の体温。

ちよつと早い心臓の音。

土橋先生を…助けたかった。

後悔は苦く苦く、体を締め付けるけど。

睦月さんのこと、取り戻せて…よかった。

すすり泣く彼は、まるで小さな子供のようだ。  
もしかしたら、ずっとずっと泣きたかったのかもしれない。  
生まれてからずっと、ゲームの中を生きてきた。睦月さん。  
ゲームのこともシルフィードのことも、誰にも言えず……  
本当に会えるかも分からない、私を探し続けていたのだ。  
どんなに孤独で、辛くて……心細かっただろう。  
もう……なんにも心配いらないから。  
「だから……ずっと……一緒にいて下さいね」

魔法円が眩い光を放ち。

中心に立つ……長い、白い髭の老人。

聖書の中に出てくる、預言者か何かのような出で立ち。

……そう。

「また……大胆なことを考えたものなのう、ゲームマスターよ」

彼は……このゲームの創造者だ。

「ええ。リセットしちゃいけないなんて……ルールにはなかったでしようっ？」

「ふおおおお……利口なお嬢さんじゃ」

「ただ……プレイヤーを一人失ったことは……誤算でしたけど」

「それは仕方がなからう……」

「仕方……なからうじゃないわよ、ジーさん！あんたの仕掛けたこのゲームのせいで、私達どんだけ大変な思いしたと思ってるのよ!？」  
怒鳴るすずに、老人は穏やかに笑いながら答える。

「しかし……お嬢さんらも命を賭けてゲームを戦っておったのじゃろうっ？」

「……だから……!」

「このような過程が……石を昇華させるには必要だったんじゃ」

「……昇華!??」

左様、と小さく頷き。

彼は神妙な顔で、私達に語り始めた。

『偶然とはいえ、このような事態を招いた、禍々しい石を…再び無に帰すためには、どうしてもゲームという過程が必要でこのう。しかし、お嬢さんらの言う通り、沢山の犠牲も出るであろうゲームが…実際に行われてしまうことを、わしも望んではおらんのだ』

ゲーム…それは、精霊使いの真の目的なんかじゃなくて。

自分の手で引き起こしてしまった悲しい出来事を、彼自身も悔やんでいるに違いない。

その証拠に……

穏やかな笑顔の奥には、暗い影が張り付いていた。

『そんな訳じゃから、極力先延ばしにするため、石を各地に隠したんじゃよ。長いこと眠りに付かざるを得なかった精霊達には、気の毒じゃったが……』

彼は自身の寿命を終えて尚、ゲームの行方が気掛かりで、こんな風に現世を離れることが出来ずにいたのだろう。

精霊使いのおじいさんの為にも…ゲームをちゃんと終わらせなくては。は。

そして…それが出来るのは。

『して…ゲームの勝敗は如何に？』

そう……

ゲームマスターである…私だけだ。

大きく一つ息を吐いて。

みんなをぐるりと見回して…宣言した。

『勿論…引き分けです。ゲームが始まり、どんな形であれ終了する

…それが精霊使いさんのおっしゃる『過程』でしょ？』

『…これはこれは、本当に利発なお嬢さんじゃわい』

さすが老人に近づいて、小さく手を挙げる。

『願いを叶えるとか…そういうのしなれば、ゲームマスターは消えなくて済むの？』

『勿論じゃ。賢者の石が昇華する際に発する大きな魔力を用い、ゲームマスターの命を捧げることで願いを叶える…実際のところは、』

そうだった仕組みでの中」

目を丸くしたすずは、満面の笑みを浮かべ。

「…やったあああ！！！！」

両手を天に突き上げて、大きくジャンプした。

次に口を開いたのは…仁くん。

彼は真剣なまなざしで、精霊使いに問いかける。

「ウンディーネ達は…どうなるんだ？」

仁くんの顔をじっと見て、老人は小さく唸り。

それは、彼ら次第だ…と答えた。

「彼ら次第？」

「左様。ゲームが終息した以上、彼らは賢者の石から解放放たれることとなる。さすれば、どこへ行くも、何をするも、これからは…精霊達の意味次第、ということじゃよ」

四体の精霊が、神妙な面持ちで精霊使いの前に立つ。

『では…順番に聞いてゆこうかの』

ノームが、長い髭を一撫でして…語り始める。

「わしは…もう、疲れましたわい」

『ほう…疲れたとな』

こくりと頷き、ゆっくり目を閉じる。

「四体の中で最長老として、あの本を守っておったが…」

その様子はまるで…長い長い月日の出来事を、一つ一つ…瞼の裏に描いているようだ。

「これまでの長い時の中で…ゲームにまでは至らずとも、石の魔力に魅了され、己の欲望の為に狂う人間の姿を幾度も幾度も見て参った。ちと…疲れましてな」

彼もまた、好き好んでゲームを戦ってきたわけじゃないのだろう。

それに。

土橋の死を……

彼もまた、望んではいなかったのだ。

『して…どうする？』

「静かに眠らせていただきたい。わしは年じゃて…故郷に帰ったところまで待つ者もおらぬ、故郷にずっとおったとすれば、もうとつくに命も尽きておろう」

そして、ノームは清々しい顔で、私達の方を振り返った。

「長い月日の中、色々な人間を見てきたが……お前さんらのような、気持ちのいい人間と出会ったのは初めてじゃったよ」

「いいのか！？本当に……」

仁くんが引き止めるように言うが。

首を横に振って、彼は依然穏やかな調子で答える。

「お前さんような、若い者にはわからんじゃろうが…ゲームと同じじゃよ。物事には全て、潮時というものがある」

「ノーム」

「その…最後の最後に出会った人間が、お前さんらのような人間で…本当によかった」

ありがとう、と笑って……

彼は、白い光の中に…消えた。

精霊使いの前に立つ…ウンディーネ。

名残惜しそくに、仁くんの方を振り返る。

仁くんは……

彼女を促すように、励ますように…男らしく笑っていた。

『ウンディーネ、そなたはどうする？』

老人の問い掛けに、一筋の涙を流し。

彼女ははっきりと答える。

「元の世界へ…帰ります」

頷いて、精霊使いが右手を天にかざすと…

そこには、光の扉が現れた。

『では…行くがよい。この先に見える道をまっすぐに進めば、やがて…そなたの故郷へと辿り着くであろう』



はい、と答えるウンディーネ。

その声は、微かに震えているみたいだった。

シルフィードは、いつもの歌うような声で、精霊使いに告げる。

「私も、元の世界へ戻ります」

『では…お主もウンディーネと同じく、この扉をくぐるが良い』

「はい」

小さく首を傾げて答え、彼女はにっこりと微笑んだ。

最後に残ったのは…サラマンドラ。

神妙な面持ちの彼に、さすが慌てて声をかける。

「待ってよ！サラマンドラ！？」

「何だ？」

「あんた…帰っちゃうの！？そんなの…」

この上なく寂しそうな、すずの顔を見て。

彼は不敵に笑い、精霊使いに向かって、宣言する。

「俺…このまま、この世界に残るよ」

「……………え！？」

すずの表情が、みるみる明るくなるが…

申し訳なさそうに笑って、サラマンドラは再び口を開く。

「俺、もつと…こいつらの世界を見てみたいんだ」

『…世界、とな』

「そ！あの街だけじゃなくてさ、色んな国の色んな人間を見てみたい。世界中を旅して…俺、どうせあつちに身寄りもねーし、帰りたいくなったらなつたで、きつと何か方法はあるだろうしさ」

夢を語る彼の瞳は、好奇心できらきらしている。

ちゃんと話したことはほとんどなかったけど、さすがどうしてサラマンドラとこんなに仲良くなったのか…すごく良く分かる気がした。

『…左様か。ならば』

精霊使いは、精霊達の背後に立っていた、私達の顔を見て。

再びその穏やかな視線を、精霊達に向けた。

『皆、パートナーに別れを告げるがよい。過酷なゲームを共に戦い

…お主達に命を預けた…この、勇敢な若者達に』

少しだけ、沈黙があつて。

くるっとターンした彼女は、私と睦月さんを交互に見た。

「実は私…睦月に、秘密にしていたことがあるんです」

思わず、睦月さんと顔を見合わせる。

「秘密つて…何？」

「私ね…むこうの世界に、将来を誓った人がいるんです」

「将来を…誓った人？」

こくりと頷いて、寂しそうな目で笑う。

「ええ、睦月が文さんを想うように、愛する人が…ね。そうは言っても、長い間行方をくらませていた私のこと…彼が待っていてくれる保証は…ありませんけど」

「そんなこと…ないわ！絶対彼は、あなたのこと…」

思わず叫ぶ私に、そうですね！と楽しそうに答える、シルフィード。

「彼にずっと会えなくて、辛くて寂しかったけど…でも」

睦月さんを見つめ、静かに言う。

「だからこそ…『愛する人にもう一度会いたい』というあなたの願い、叶えてあげたかったです」

「…シルフィード」

「会わせてあげることが出来て…本当に良かった」

「ありがとう…シルフィード」

睦月さんは目を細めて微笑み、握手を求めるように、右手を彼女の前に差し出した。

そんな彼の仕草に、肩をすぼめてくすつと笑うと。

シルフィードは、ふいに私の手を取り。

その手を、睦月さんの手の上にふつ…と、重ねる。

そして、二つの手の上に自分の手を重ね…

「この手…絶対に、離さないでくださいね」

冷たくて白い、シルフィードの手。

「たとえこの先どんなことがあっても…だって、二人は長い長い時を経て、やっとここで出逢うことが出来たのですから」  
誓いの言葉を告げる神父のように、厳かな口調で彼女は言って。  
さよなら…と、微笑み。

光の扉へと…消えていった。

ようやく陽の光を浴び始めた…静かな都会の街並み。  
歩いているのは…

私と睦月さん…二人だけ。

『私、水月と帰るからさ』

すずは、そんな風にいたずらっぽく笑って、手を振っていなくなっ  
てしまった。

明るくなってきた街の中で…

すらりとした睦月さんの姿は、はっきり言っても目立つ。

今はまだ明け方で、誰もいないからいいものの…

誰かに見られたらどうしよう。

何の話をしたらいいんだろう。

さつきまで、あんなに普通に話せてたのに…

不安や迷いや恥ずかしさや…色んな想いが頭をめぐる。

睦月さんも…もしかしたら、私と同じ気持ちなのかもしれない。

アスファルトの道を、まっすぐ前を見て、黙々と歩いていた。

こんなに大きな街の真ん中を歩くことなんて、実は滅多に無いけれ  
ど…

朝霞に白む街並みは、まるで別の世界みたいに思えた。

私達が住んでいるのとも、シルフィードが帰って行ったのとも…違  
う世界。

空想していたら……不意に、怖くなった。

私は本当に、彼と一生一緒にいられるのだろうか。

また…離れ離れになってしまったら。

それに。

たとえ、遠い昔の記憶があつたとしても…私はずっと、彼を愛し続けられるのだろうか。

それに……………睦月さんは？

私は、本当は…聖女なんかじゃないのだ。

私のことを知っていくうちに、彼は幻滅してしまうかも知れない。そんなことになったら……………

急に冷たい風が吹きつけて、小さく身震いする。と……………

視界の隅に映つたもの。

それは……………

大きな大きな、クリスマスツリー。

深い緑の木を覆う金銀の飾りは、朝日を受けて…きらきら輝いていた。

「……………綺麗」

思わず呟いた私の肩に、そっと置かれる…大きな手。

「本当だね」

睦月さんの優しい声が、冷たくなった体に溶け込んでいく。

「睦月さん……………私ね…この景色、前にも見たことがあるような気がするんです」

あれは…いつだっただろう。

確かに見た筈なのに…よく、思い出せない。けど……………

「私…夢だつたんです。こんな風に…大好きな人と、クリスマスツリーを眺めるの」

今日は降誕祭で…私の生まれた日。

「この大切な日を、あなたと二人で…過ごしてみたかったんです」  
「…そうだね」

目を細めて笑いながら、睦月さんは頷いて。

優しく私を…抱きよせた。

「泣かないで…文ちゃん」

彼の言葉で、初めて…自分が泣いていたことに気づく。

「あ…れ？私…変だな、何で涙なんか…出てくるんだろ」

「しょうがないなあ…」

慌てて目をこする私を見て、彼が困ったみたいに笑うと。

懐かしい気持ちで…胸がいつぱいになった。

「これからは、そんな風に泣かなくていいように…ずっと傍にいるから」

「……………本当に？」

「…本当に」

「……………これから…ずっと？」

「うん…ずっと」

だから…と、睦月さんは私の顔を覗き込んで。

昔のままの優しい顔で…笑った。

「だから、笑って…文」

私の机の引き出しの…一番奥には。

あの日の新聞記事の切り抜きが、今でも大事にしまつてある。

『都市部の中心で起きた、不発弾の爆発事故』と。

『大学教授、拳銃で自殺』の………二つの記事。

精霊達の戦いの名残は、戦時中に投下された不発弾が今になって爆発した…という事故に変換されたい。

それ以来、都市の安全を考える研究者達は、今も残る不発弾とその危険性についてテレビや新聞でしきりに議論するようになった。そして。

土橋先生は翌朝、研究室に来た学生によつて発見されたのだそうだ。右手には、未だに入手経路の分かつていない、ピストルを握り締め山のような古文書に埋もれ、膨大な資料に埋まるようにして。

家族も無く、友人も少なかった彼のお葬式は…とても寂しいものだった。

彼が命を賭けてきた研究テーマである…『精霊の書』。

それは………

私の本棚の一番上の一番右に、今でも大事にしまつてある。そうそう。

高校と一緒に卒業した眼鏡も、切り抜きと一緒に引き出しの中だ。

「お姉ちゃん、ごはんっ」

寝ぼけまなこのすずが、台所に立つ私に声をかける。

高校生になつても朝ギリギリに起きてくるのは相変わらず。

「…はいはい」

そんな私達のやりとりを、楽しそうに眺めていたママ。

「春ねえ……」

コーヒーを啜りながら窓の外に目をやり、嬉しそうに目を細めた。

「暖かくなつて、陽射しも明るくなつて…外の植物も生き活きして  
ると思わない？」

「……………そうかなあ」

寝起きの悪いさすが、つまらなそうにつぶやく。

「ご機嫌斜めねえ、すず」

「…だって、遊べない日曜なんて、あつたつてしよーがないもん  
…大変だなあ。

すずは今日、学校で模試を受けなくてはならないのだ。

むすつとした顔のすずに、お気に入りの赤いギンガムチェックのお  
弁当箱を渡す。

と……………

「何これ！？お姉ちゃんお弁当作ってくれたの！？」

すずは無邪気に、目を輝かせて喜んでくれた。

が…そこですかさず、澄まし顔のママが言う。

「すずつてば…いくらお姉ちゃんでも、学校お休みなのにわざわざ

『すず』作る訳ないでしょー？」

「へ？」

「…ちよつと、ママ！？」

きよとんとした目で私とお弁当箱を交互に見つめ。

不愉快そうに眉間に皺を寄せる…すず。

「そっか…そういうことね」

「すず！でも…すずは日曜も学校で、大変だなんて思って…それは  
本当よ？」

大学生になつて、高校生の頃よりも自由な時間が増えた。

だから、こんなに気持ちのいい日曜に学校に出かけるすずを、少し  
でも元気づけてあげたかったのだ。

…ママの言うのも、一理あるけど。

「文、今日はサークルあるでしょ？学校まで、睦月さんが送ってく  
れるんですって！」

「ふーん…あいつもママだねえ」

「違う！違うの…ただ…ちょうど用事があるから、ついでに乗せて  
つてくれるって…」

慌てる私をいたずらっぽく目で見て、ママは嬉しそうに目を細める。  
「ねえ文、今度睦月さん、うちに連れてきなさいよお！せっかくか  
わいい娘に彼氏が出来たっていうのに、写真一枚見せて貰えないな  
んて…ママ、寂しいなあ」

……………どきっ。

「えっ…と……………それは…然るべきときに、ちゃんと紹介するから  
……………ね？」

背中に嫌な汗を掻きながら、必死でママに弁明するのは最近の日課  
だ。

そりゃ…好きな人をママに紹介したい気持ちは、すっごくあるけど。

『文のママに会わせて』

なんて…彼も言うのだけど。

でも……………

ママ、びっくりするだろうし。

反対なんかされちゃった日には…どうしていいか分からないし。

その時。

壁掛け時計に向けられた、すずの視線が固まる。

「やばい！！！行かなきゃ！！！！」

「すず、ちよつと朝ごはんは！？」

ママの問い掛けに、ごめーん、と間延びした声で答え。

すずは慌てて玄関に走っていく。

小ぶりの可愛らしいお弁当箱を…大事そうに抱えながら。

「そっかあ…文も板挟みになって大変だねえ」

ハンドルを握り、視線は前に向けたままで。

睦月はいつものように、楽しそうにくすくす笑う。

「……………誰のせいだと思ってるのよ」

「嫌なの？文…」



「……………嫌じゃないけど」

まったく…意地悪ばかり言うんだから。

シートベルトをぎゅっと握って、私は窓の外に目を向けた。  
と……………

突如携帯が鳴り、慌てて通話ボタンを押す。

『先輩！お久しぶりです』

聞こえてきたのは…仁くんの声。

「仁くん、お久しぶり…でも、どうしたの？」

何だか、彼の声は少し興奮しているみたいだ。

赤信号で止まり、睦月も不思議そうな顔で見ている。

『実は俺…さつき、サラマンドラに会ったんです』

「…サラマンドラに？」

そっか。

彼はまだ、『こつちの世界』にいるのだ。

『何でも、偶然…あつちの世界と繋がって、その…うまく説明出来ないんですけど』

彼は、シルフィードの伝言を預かった…と言っていたらしい。

急に心臓がどきどきしてくる。

「で……………シルフィードは何て？」

『えっと……………よく分かんないんですけど』

『私は幸せです』

そう伝えれば分かる…サラマンドラはそんな風に彼女に言われたらしい。

思わず…安堵のため息をつく。

……………よかった。

ありがとう、とお礼を言うと。

仁くんは明るい声で笑う。

『いいんです、そんな大したことじゃないし。それより…今度二人で見に来てください！野球の試合……………夏に向けた大事な練習試合があるんです』

仁くんは、あの『ゲーム』以来…

それまで以上に、一生懸命練習をしているらしい。  
一年生でレギュラーなんてすごいし…彼は、私の母校のエースなのだ。

『そもそも、うちの学校はあんまり強くないですけど…でも、頑張りますから!』

ウンディーネのことがあってから…もう一度ピッチャーで頑張ってみようと思っただけらしい。  
きつと……

ひかりも天国で、すごく喜んでいるだろう。

頑張つてね、と電話を切ると。

いつの間にか、車は路肩に止められており。

少し真面目な顔の睦月は…私の目をじっと見つめていた。

あれから半年ちかく経って、大分平気になってきたけど…

相変わらず…彼の、この表情には慣れない。

ドキドキしながら…仁くんから聞いた話を伝える。

「『お二人も、どうかお幸せに』…か。何か上から目線だなあ、シルフィードの奴」

不満そうなつぶやきに、思わず噴き出してしまふ。

「ねえ、文……」

「ごめんなさい…つい…笑っちゃって」

「そんな事はいいんだけどさ」

「…じゃあ、なあに?」

再び、真剣な眼差しになって……

彼は優しい声で…言った。

「結婚しよ、文」

……え?

「え!?!あの…今……何て???」

「シルフィードにも言われたことだしさ…」

「いや……でも……」

「嫌？」

「いつ……嫌じゃ……ないけどっ……」

思考回路がショートする。

「だって……あなたは有名人だしね……それに……私まだ学生だし……」

二つ年が上だと、見えている世界も違うのだろうか。

私には……まだまだそんなこと、想像もつかない。

「そうだ！私………まだ未成年でしょ？だから、ママの同意がないと……だし……ね？」

んー……と考え込むみたいなお顔で唸る睦月。

「俺のことは関係ないし、学校にはそのまま通えばいいし、文のママにも同意貰えばいいじゃん」

「………そうなんだけど」

「俺……仕事忙しいし、文も学校結構忙しそうだし、これからもっともっと会える時間は減ってっちゃうだろう？だから………一緒に暮らせるといいなって、ずっと思ってたんだ」

どきん、と心臓が高鳴る。

そりゃ………私も。

もっともっと一緒にいたい……けど。

「ごめんなさい、私………まだ……よくわかんない」

早く大人になりたい。

睦月と一緒にいると……いつもいつも、そんな風に強く思う。

そうだね、と頷く彼の笑顔は……相変わらず優しい。

「待ってて……くれる？もうちょっとだけ………」

「勿論」

ほっとして、小さくため息をついて。

私はずっこり笑って、頷いた。

すると………

「でも……約束したからね」

「…何？」

「俺…『ちよつと』しか待たないから」

「…もう、また…意地悪なこと言つて。」

「そうだなあ…じゃあ、あと一年半！」

「一年半…つて…それじゃまだ、私大学生じゃない？」

「文が二十歳になったら…結婚しよ」

「…だから…ね」

決まり、と笑つて、再びアクセルを踏む睦月を…恨めしい気持ちで見える。

サングラスをかけた、綺麗な横顔。

本当…いつも意地悪で…強引なんだから。

…好きだけど。

何？と訊かれ、慌てて窓の外に視線を移すと。

大きな公園の緑が、春の光に照らされて、生き活きと輝いていた。

まぶしくて、思わず目を細め。

私はシフトレバーに掛けられた彼の手に…自分の手をそつと載せた。

「…どうしたの？文」

「んーん。何でもない」

こんな風に…

おじいちゃんとおばあちゃんになるまで、一緒にいられると…いいな。

「…春だね、睦月」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0518j/>

---

GAME -aya-

2010年10月15日15時51分発行